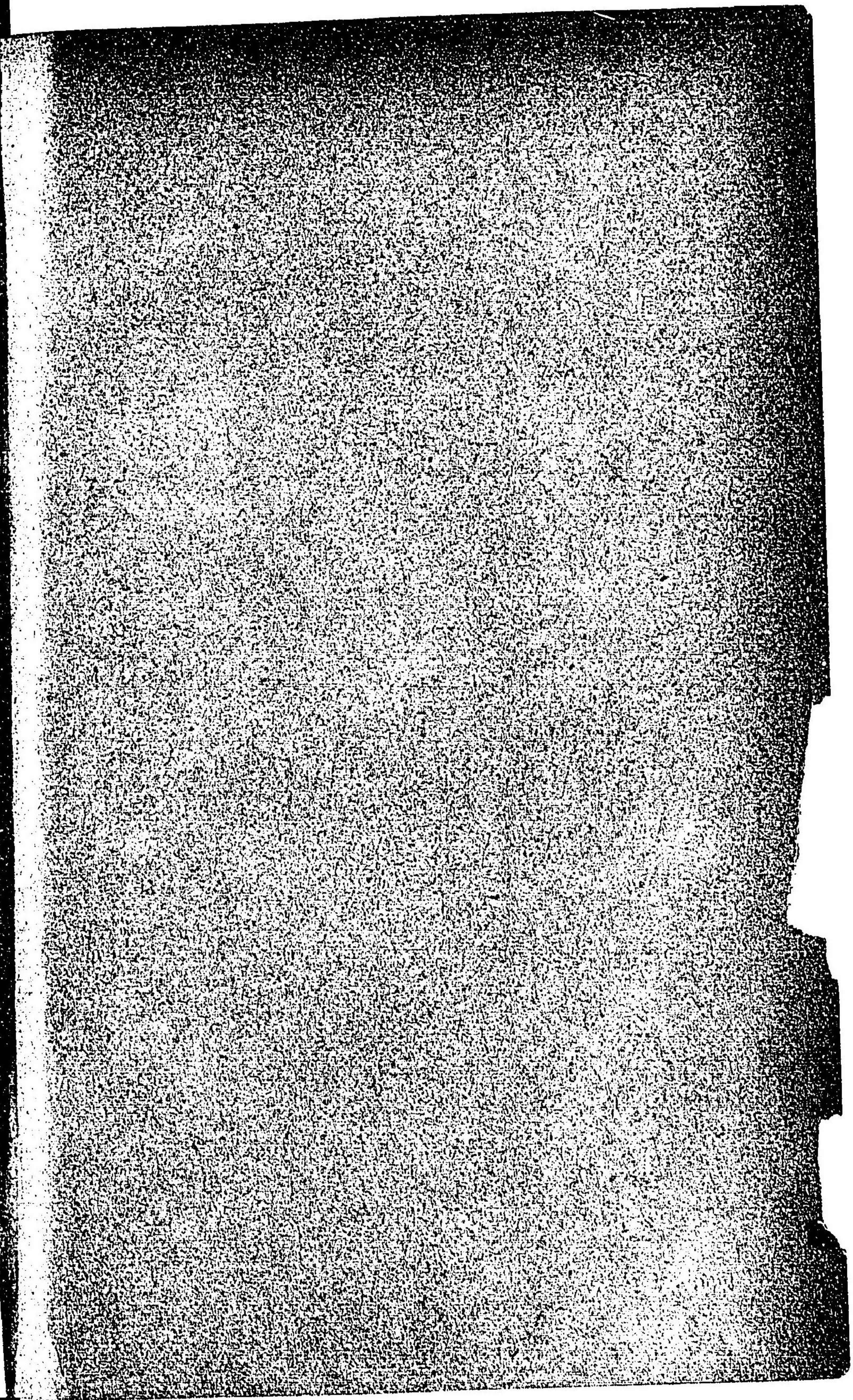
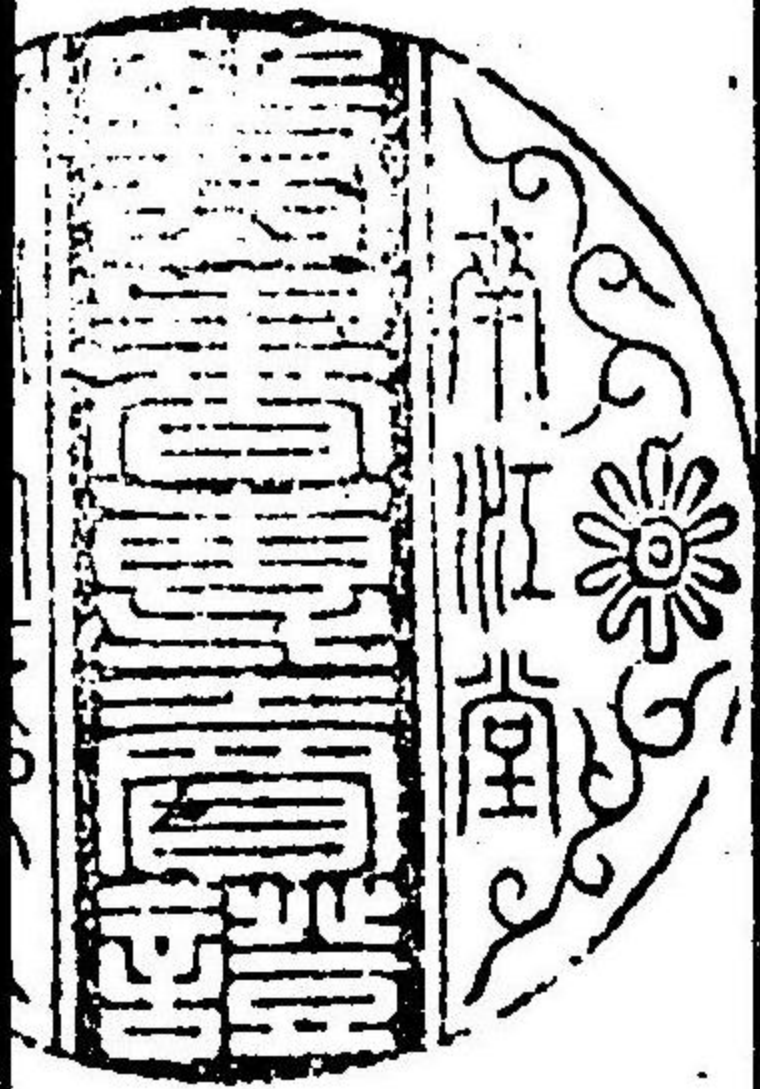


53-22

精學大成

傳染病編



例言

- 一 此書名ケテ大成ト云フト雖凡固ヨリ完全ヲ期ス可ラス然レモ余輩一般内科學ノ甲ニ詳ニシテ乙ニ缺クル所アルヲ見心竊ニ讀者ノ左顧右盼ノ煩アルヲ知レリ例ハバ多クノ成書療法條下ニ藥名ヲ記シテ其處方ヲ錄セズ爲メニ讀者ハ一内科書ヲ購フト同時ニ別ニ處方集ヲ求メザルヲ得ズ是レ尙ホ可ナリ一々牽引ニ就テ所希ノ條ヲ求ムルガ如キ其煩ニ至テハ少カラズト信ズ是レ余輩ノ本書ヲ編ムニ當テ假令ヒ完全ハ期シ難シトスルモ一書ヲ以テ事ヲ辨ジ得ルガ如クナシタル所以ナリ
- 一 地名ニハ複縦線ヲ用ヒ人名ニハ單縦線ヲ用ヒタリ「」ヲ以テ圍ミタルハ病名若クハ物名ナリ
- 一 本書傳染病編中吾人臨床ニ於テ遭遇スルコト極メテ稀レナル者ノ如キハ記載ヲ簡略ニセリ假令バ枯草熱黃熱ノ如シ是レ本書ハ專ラ醫學生並ニ實地醫家ノ爲メニ編述セル者ナルヲ以テ無用ノ條下ニ徒勞センヨリハ緊用ノ疾病ニ就テ詳細ナランコト必要ナルベシト信ジタレバナリ
- 一 譯語ハ在來ノ者ヲ用ヒタルモ時トシテ新造セル者ナキニアラズ如此ハ同時ニ

痘瘡	百十六頁
水痘	百五十頁
丹毒	百五十三頁
窒扶斯	百六十五頁
發疹窒扶斯	百六十六頁
再歸熱	百七十三頁
腸窒扶斯	百八十頁
亞細亞虎列拉	二百九頁
歐羅巴虎列拉	二百二十五頁
赤痢	二百二十七頁
實扶的里	二百四十頁
咽頭實扶的里	二百四十一頁
喉頭實扶的里	二百五十四頁
百日咳	二百六十頁
流行性耳下腺炎	二百六十六頁

梅毒	二百六十九頁
淋疾	二百九十八頁
肺結核	三百〇四頁
急性全身粟粒結核	三百四十四頁
結核性腦膜炎	三百四十七頁
他部ノ結核	三百五十二頁
癩病	三百五十四頁
脾脫疽	三百六十一頁
馬痘	三百六十四頁
狂水病	三百六十七頁
旋毛蟲病	三百六十八頁
「アクチノミコーゼ」	三百七十頁
枯草熱	三百七十四頁
「ペスト」	三百七十六頁
黃熱	三百七十九頁

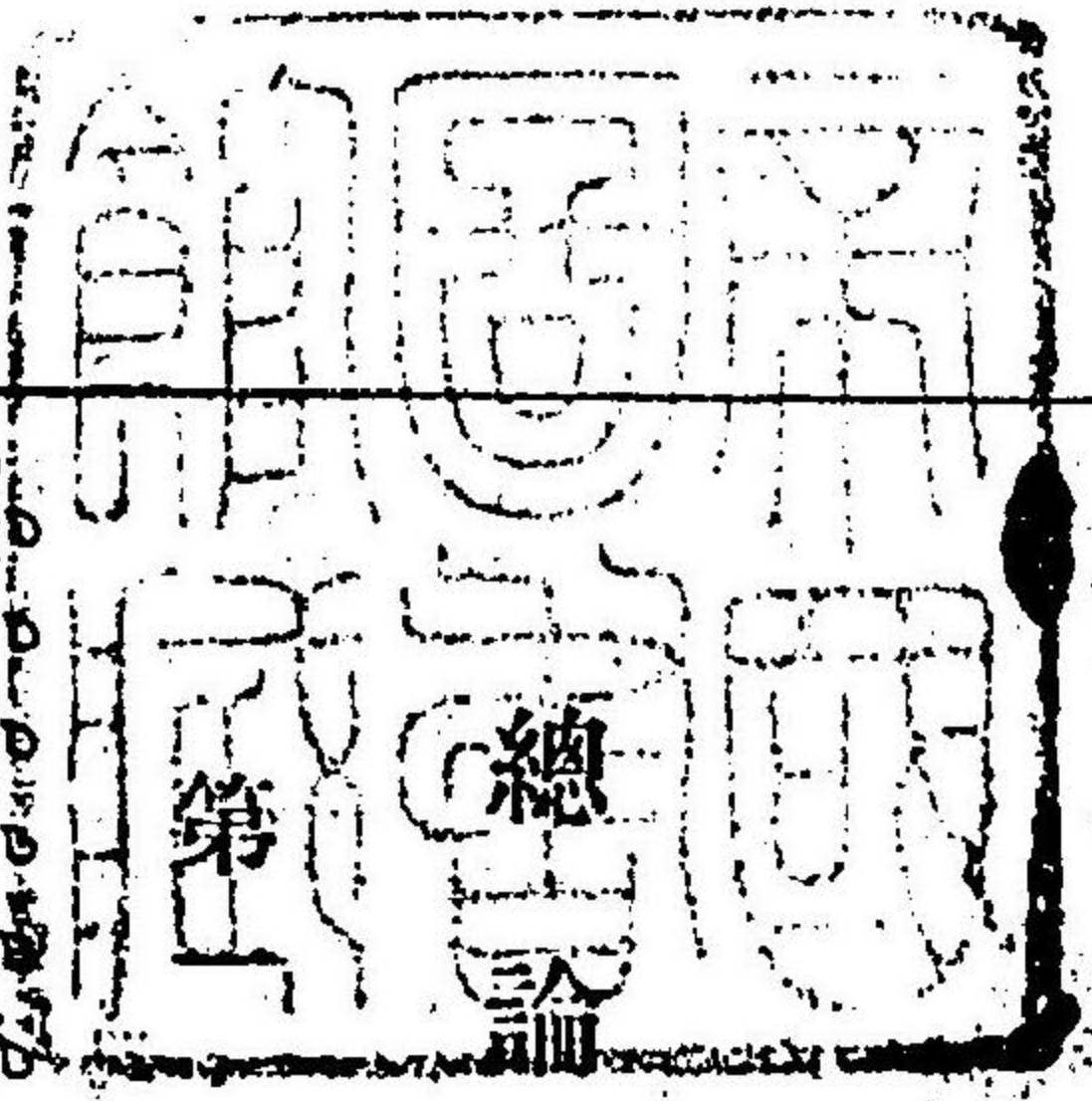
麻拉利亞
 流行性腦脊髓膜炎
 急性關節癱瘓麻質斯
 「インフルエンザ」

三百八十一頁
 三百九十二頁
 三百九十八頁
 四百四頁

內科學大成目次畢

內科學大成

醫學士 佐藤 恒 丸
 醫學士 谷口 吉 太郎
 編纂



緒言

「インフルエンザ」ナル語ハ昔時總テノ中毒症ニ用ヒタリシガ近時ニ至
 テ意義大ニ狭少トナリ特殊ノ毒素ニ因スル中毒ノミノ義トナレリ而
 ノ其毒素ト一般ノ毒トノ異ナル所ハ通常ノ毒ニアリテハ初メ體中ニ
 入リシ時ノ量ヨリ滅ズルアルモ増スガ如キ鮮ク況ンヤ繁殖スル
 事等ナシト雖モ所謂特殊ノ毒素ニアツテハ適宜ノ條件ヲ與フルトキ
 ハ漸次増殖スト云フ點ニアリ此増殖機能ヲ有セル事實ヨリ既ニ昔時

ニアリテモ、一ニノ醫師ハ、此毒素ハ生活體ナラザル可ラズト思考シ、而
 ノ近時ニ至テハ益々此説ヲ確メ、多クノ疾病ハ、球菌桿菌分裂菌等ノ非
 常ニ小ナル有機小體ニ依テ起リ、且ツ各箇固有ノ病原トナルベキヲ
 確證スルニ至レリ、然レモ又余輩ハ傳染病ハ必ズシモ有機小體ノ或一
 種ニ原因スト確言シ得ザルガ故ニ、少クトモ廣義ニ解釋セル傳染病ハ
 瘴毒性ニ依テカ各人接觸ニ依テカ有機小體ノ人體内ニ竄入スルニ依
 テ起ス者ト想像セザル可ラズ、
 昔時ノ醫師ニアリテモ、四圍ニ蔓延シテ害毒ヲ逞クスル、此傳染病ノ原
 因ニ就テハ、單ニ天候ノ寒暖食餌ノ不衛生ノミニ歸スルガ如キヲハ、其
 説明トシテ餘リ簡單ニ失シ、到底尋常ノ想像ヲ以テハ及ブ可ラズ、必ズ
 ヤ他ニ奇怪ノ、ナカラザル可ラザルハ、悟リシト見ヘ、或ハ患者ノ體格
 ヲ記スルニ地方病性體質 *Constitutio endemica* 或ハ流行病性體質 *const. e-*
pidemica 等ノ語ヲ以テシ近時ニ至ル迄襲用シタリ、然レモ其所謂病的體
 質トハ如何ナル者カ、或ハ其如此キ體質ヲ有スル原因ハ何故ナルカ等
 ノトニ至テハ殆ンド一モ明瞭ナル思想ヲ有セザリシ、既ニ天候ノ如何

ヲ以テセル説明ノ不充分ナルガ爲メニ、太陽、月、遊星、及其衛星、彗星等ノ
 不可思議ナル關係ヲ説キ、屬々天文學ノ怪説ヲ以テ説明ヲ試ミント
 シタリ、加之地震、火山、噴火、海嘯、等一言之ヲ貫ケバ病性ニ變セル地球ノ
 瘴癘状態、搦トモ稱スベキ者ガヨシ地球ノ他半部ニ起リ、疫病ハ別ノ半
 部ニ流行スルモ、何カ此間關連スル處アルカノ如キ臆説ヲ逞フスルニ
 至レリ、詳細ノトハシユヌレル氏ノ疫病歴史 (*B. Schnurer, Chronik der*
Seuchen 1823, 1825) ニ就テ見ヨ、或者ハ又一種ノ汚氣ヲ原因トシテ唱フ
 レモ、其所謂一種ノ汚氣トハ唯無態的 (*immaterial*) ノ者タリト云フニ過ギ
 ズ、兎ニ角以上記載セル、或ハ明瞭ナルモアリ不明瞭ナルモアル、諸説ヲ
 總括シテ世界的地球的影嚮説 (*Kosmisch-terrustrische Einflüsse*) ト稱ス、近代
 ニ至テハ又頻リニ空中電氣、阿災等ノ附會説モ出テタリ何レニセヨ近
 世紀ニ至ル迄ハ、學者トナク、不學者トナク、唯臆測説ノ製造ニ急ナリシ
 ガ一トシテ理想ニ適合セル者ナク、徒ニ古代詩人ノ枯瑟ヲ操返シ、寧ロ
 小説的ナル事ヲ眞面目ニ主張シタルニ過ギズ、然レモ一時黒死病ノ大
 流行ヲ來セルキ民間流語アリ、井水ニ毒アリト唱ヘシガ如キハ少クモ

學術上ノ一部ヲ言現ハシタル稍高尙ノ臆説ト稱スベキカ、
 上記ハ其一斑ヲ記スルニ過ギザレト如此數多ノ怪談雜語ノ中ニ就テ
 ハ種々ノ名説ナキニアラズ即チ彼ノ羅馬ノ學者ワルロー(Varro)ホルメ
 ラ(Columella)等ノ記載セシ書中ニハ觸接傳染、瘧毒性傳染等ノヲ記シ、
 此等ノ疾病ハ皆最小有機體ニ仍テ起スベキ者タル意味ヲ言現ハセリ、
 此等ノ所説ハ其後麻拉利亞、ペスト等ニ就テモ諸人ノ唱フル處トナリ
 シガ愈々顯微鏡ノ發見以後確定スルニ至リタリ、假令パローウエンホ
 ーク氏ガ滴蟲ヲ發見シ、千六百七十五年又精蟲ヲ發見セル等ノ事實ヨ
 リ、動物體中ニハ諸種ノ生活體寄生スル者タルヲ知リ必竟スルニ傳染
 病ハ一種有毒生活體ノ人身體中ニ進入スルニ由テ起ス者タルヲ確信
 スルニ至リ、此所説ハ汎ク學者間ノ唱和スル所トナレリ、
 有名ナルハキルハネ(Kircher)ランチニ(Paracelsus)リリス、然ルニ、斯ク道理
 リ(Vallinier)ハオムーン(Bäumler)リンナ(Linné)等ノ諸氏トス、
 アル理論ノ喧傳サル、ニモ拘ハラズ、又其間甚ダ怪シキ臆説アツテ行
 ハル、モ奇ト云フ可シ、十七世紀時代ノ或ル學者ハ傳染病ノ原因ヲ同
 シク有機小體ニ歸シタルハ可ナレトモ其有機體ハ恰モ瓜蛋族ノ群ノ

如キ者ト想像シ、大鼓若クハ不得已レバ砲ノ如キ者ヲ放チテ之ヲ追拂
 ハント計畫シ、又或ル學者ハ其有機小體ヲ疥癬蟲ノ如キ者ト想像シ、曲
 嘴銳爪ヲ有セル小蟲ノ圖ヲ畫キ然モ其中多少ノ差異ニ依テ各病ノ原
 因トナシタルガ如キ今日ヨリ之ヲ見レバ其愚其膽共ニ及ビ易カラザ
 ルニ似タリト雖モ當時如此者迄モ稱シテ學者ノ列ニ加ヘシハ時世ノ
 不得已ニ出ヅ、然レモ當時ノ刊行書ニシテ今尙一讀ノ價値アル者ハハ
 ンブルヒノ醫師ヨット、ア、ハー、ライマルスノ著述セル「傳染病ノ一般性狀
 ニ就テ」(Über die allgemeinen Eigenschaften ansteckender Seuchen)ト稱スル千
 七百九十四年同府發刊ノ書ナリトス。

近世ニ至テ此有機小體傳染説ハ屢々反覆サレシガ不幸ニ其初メノ
 實驗者ハ其所説ノ公刊ヲ過急ニシ又其内容ヲ過大ニセルノ傾キアリ
 即チ彼ハ痘瘡、Pockenherchen、虎列拉、Cholera thierchen、虎列拉植物(Ch-
 olerapflanzen)等ト命名シ、且ツ此等ハ皆一般ノ滴蟲ト異ナルナキヲ記載
 セリ、蓋シ彼ハ腐敗セル標本ヲ顯微鏡下ニ置キタルニ心付カザリシナ
 リ、又今世紀ノ中頃ニ至テ有機小體説ニ反對ノ議論現ハレ以前ノ妄想

説ト同シク一時ハ流行シタリ如此右往左來一定ノ根據ナカリシ諸説
 モ近時ダーバイン (Davaine) バストール (Pasteur) クレーブス (Klebs) エ
 ーベルト (Eberth) オーベルマイエル (Obermeyer) ロンバート (Robert Koch)
 フリードレンダー (Friedländer) ナイセル (Neisser) フォールアイゼン (Feh-
 leisen) アウフレヒト (Aufrecht) ハウムガルテン (Baumgarten) 緒方北里等諸
 家ノ不撓不屈ノ勤勉攻學ノ結果トシテ確固動カス可ラザル學説トナ
 ルニ至リタリ。

元來一事ノ實驗中最終ノ結果ヲノミ聞テ以テ満足スルノ輩ハ本病ノ
 原因ニ就テモ其事實ニ適合セル有機小體説ノ他又諸説アルヲ知ラザ
 ルハ論ナク如此輩ニ至テハ複雑ナル原因ノ學説ヲ口ニセンヨリハ寧
 ロ簡單ナル事實ヲ聞テ満足スル者多シ、

今日一般ニ知リ渡リシ如ク有機小體ヲ以テ本病ノ原因トナセル所以
 ハ其繁殖機能ヲ有スルコト増殖ノ無限ナルニアリ見ヨ極メテ僅カノ
 牛痘苗ヲ小兒ニ接種スレバ明ニ感染シ此患兒ノ痘苗ヲ以テ又他ノ健
 兒十人以上ニ接種シ得ベク其十人ハ又同シク各箇多數ノ健兒ニ接種

シ得ベシ之ヲ以テ見レバ非常ニ僅少ナル毒ヲ以テシテモ數學的無窮
 ニ傳搬シ得ラル、ニアラズヤ此事唯痘瘡ニ限レルニアラズ猩紅熱、窒
 扶斯、梅毒、有毒性潰瘍等皆然ラザルナシ、此事實ニ據テ見ルモ或ル一
 ノ學者ノ唱フルガ如キ傳染病ノ原因ハ化學的化合ノ作用ニヨツテノ
 ミ生ズル者ナリトノ説ハ一步モ立脚ノ地ナキニ至ラン、
 然レモ人若シ如此無究ニ繁殖スル者ハ世間又他ニ理ノ會得スベキ者
 アリヤヲ問ハハ余輩ハ先ヅ二箇ノ説ヲ並ベテ之レガ説明ヲ試ミント
 ス、其第一ニ曰ク化學的作用其第二ヲ生活有機體トナス蓋シ一片ノ鈹
 屑ハ能ク一家一市ヲ燒キ盡クスニ餘アリ之レ火ナル者ハ假令ヒ初メ
 小ナルモ燃燒ノ材料存在スル限リハ漸次ニ增多スルガ如ク生活體ト
 雖モ自箇ノ存在ニ適宜ナル材料具備スル限リハ増殖シテ已マザレバ
 ナリ、是レ此點ニ於テ化學説有機小體説ノ一致スル所以ナリ、故ニ傳染
 病ノ原因ヲ説クニ當テハ此二説ヲ主トシ他ニ顧ミルノ價値アル者ナ
 シ而シテ此二説ニハ各之レガ證左トナスベキ代表者ノアルアリ彼ノ
 化學的機能ニハ發酵及ビ腐敗作用アリ其極メテ少量ノ原料ヲ以テ他

常在性有機小體

ニ傳播スル有様ハ、觸接傳染ノ景況ニ甚ダ一致ス、況ンヤ若シ吾人ノ所信ノ如クンバ、狹義ニ於ケル酸酵ナル者ハ、或ル有機小體ノ存在ト、増殖ニ因スル者トスレバ、全ク有機小體説ト同一物ナルニ於テヲヤ、故ニ、傳染病ハ廣義ニ解釋スレバ、又一種ノ寄生蟲病ノミ、假令ヒ、通常ハ斯ク云ヒ現ハサルニセヨ、元ト根元的ノ區別ニアラズシテ、唯用語ノ關係ヨリ、歴史的ノ沿革ヲ異ニスト云フニ過ギズシテ、實ハ有機小體ト云ヒ寄生蟲ト云ヒ純然タル性質上ノ區別アルニハアラザルナリ、此故ニ傳染病ハ一種ノ寄生蟲ニ依テ起スト云フモ誤謬ト、稱スルコトハ得ザルナリ、假令ヒバ、疥癬ノ如キ其固有ノ病蟲ヲ發見スル迄ハ同ジク傳染病ノ一種トシテ算用サレタルニアラズヤ、要之スルニ、同ジク有機小體ニ依テ起スモ、皮膚ノ表面ニノミアルカ、又ハ、一處ニ局在スル者ノ如キハ傳染病ノ範圍外ニ置キタルニ過ギズ、

吾人ハ下等有機小體ヲ其存在スル場所ニ從テ二大屬ニ分ツ、世ニ時ト處トヲ問ハズ、常ニ存在スル有機小體アリ、彼ノ催腐機能ヲ有スル菌類ノ如シ此等ノ菌ノ芽胞ハ始終存在スルガ故ニ余輩之ヲ常在性有機小體

地方性病類流行性病類

特發説

(ubiquitäre Mikroorganismen)ト稱セン、是等ノ者ハ全ク人體ニ無害ナル者ナレバ、非常ニ多數ニ積蓄シ、且ツ其發育ニ適當ナル位置ト條件ヲ得ルトキハ、害毒ヲ逞フスルコトアリ、假令バ、屍體ノ腐敗スルガ如ク、生活體ノ一部モ生活ヲ失フトキハ、茲ニ腐敗作用ヲ起シ、其生産物血行中ニ入りテ敗血症等ヲ起スガ如シ、蓋シ、是レ體ノ一部ニ異常ヲ生ジ、是等微菌ノ發育ニ適當ナル條件ヲ與ヒシニヨルノミ、

反之、或ル種類ノ病毒ハ或ル地方ヲ局シ若クハ或ル時期ニ限テ發生スル者アリ之ヲ稱シテ地方性及ビ流行性病類ト云フ、(endemische und epidemische Krankheitsreger) 假令バ麻拉利亞ト云ヒ虎列拉ト云ヒ、窒扶斯ト云ヒ、其他ノ急性發疹症ト云ヒ、皆隨時何レノ處ニモ發スルニアラズシテ、其病毒ノ運搬サレシ後初メテ地方性或ハ流行性ニ蔓延スル者ナリ、

今ヨリ甚ダ遠カラザル時代ニ於テ、尙一ノ迷想行ハレ、地方病、流行病、共ニ、一種ノ條件ニヨツテ特發スヘキ者タルヲ信シタリ、シオドール氏ノ如キハ曰ク、多人數集合シテ、空氣ノ容積甚ダ減少シ、腐敗セル空氣ヲ吸入スルトキハ、遂ニ疾病ヲ生ズト、如此、空想ハ容易ニ人耳ニ入り易ク、當時ノ醫トナク、素人

變化説

トナク、多クハ如此説ヲ信ズルノ已ムヲ得ザルニ至リタリ、醫師ガ梅毒ヲ多
 數人ノ交際ノ結果トシ、百斯篤ヲ其腐敗セル空氣ニ歸シ發疹瘰癧扶斯ハ換氣
 不充分ナル室ニ多數ノ集合スル爲トシ虎列拉ハ、腐敗セル食物、及び未熟
 ノ果物ノ餌トシテ、説明スルガ如キハ、甚ダ容易ナルニ似タレ、何故ニ同シ
 ク衛生上ノ缺點ヲ有シナガラ、其結果トシテ來ル疾病ノ如此種々ナルヤ、ノ
 間ヲ發サバ、遠ニ一語モ發シ得ザルニ至リシナラン、其後人文漸ク進ミ、各種
 傳染病ハ各固有ノ病毒ヲ有スル者ナルヲ知ルニ至テ、此等ノ說漸ク跡ヲ絶
 ツニ至リタリ、此時代ニアツテハ、昔ニ傳染病ノ特發ヲ唱ヒシノミナラズ、大
 寄生蟲ノ特發スベキモ、稱道シタリ、今日ト雖モ其食物ノ不攝生、空氣ノ不潔、
 居所ノ不適當、ナルハ皆共ニ傳染病増殖ノ誘因トシテ重キヲ置クニ相違ナ
 シ、然レモ之ヲ以テ絕對的ノ原因トハ承認セズ、試ニ思ヒ、墓地ノ近傍必ズシ
 モ百斯篤ノ流行アルニアラズ、戦地粗食ノ際、常ニ虎列拉ノ流行ヲ來スト斷
 言シ能ハザルニアラズ、要之、理論上ヨリスレバ、百ノ不攝生、千ノ不潔アル
 中固有ノ病毒ナキ限リハ一定ノ傳染病ハ決シテ流行スル者ニアラズ、
 近時又々一疑問アリ、假令ヒ、上記ノ如キ特發ハ困難ナリトスルモ常在
 性有機小體ハ漸次變化シテ、遂ニ固有ノ傳染病毒ニ變ズルヲナキカ、ト
 物質的變化ノ永遠不朽ニシテ、高等動物ニ於テスルモ、尙數十世紀内ニ

傳染病ノ發現及其影響

ハ變化アル者ナリト云フト雖モ、然レモ日常ノ實驗ヨリスルモ事實上
 ノ結論ヨリスレハ、有毒性有機小體ハ、尙高等動物ニ於ケルガ如ク、決シ
 テ容易ニ眞性ヲ變ズルヲナク、常在性有機小體ハ、飽適常在性有機小體
 ニシテ、是レヨリ彼ニ變ズルヲナシ、故ニ假令ヒ、其培養地ノ變化アルモ
 解剖的ニモ病理的ニモ眞性質ヲ全ク一變ズルヲハ余輩ノ經驗上ナキ
 者ト信ゼザルヲ得ズ、
 臨床的ニ常在性有機小體ニ因スル疾病ナルカ、將タ地方性流行性病毒
 ニ依ル疾患ナルカヲ判別スルハ極メテ必要ナルヲナレ、此事甚ダ困
 難ニシテ確實ニ之ヲ定ムルヲ得ズ、故ニ傳染病ヲ論ズルニ當テハ本
 來ハ此二種ノ區別ヲ明カニシテ論ゼザル可ラザル筈ナレ、通例地方
 性流行性病毒ニ因スル者ノミヲ論ズルヲ多シトス、余等モ亦其例ニ從
 テ此編ヲ草シタリ、

第二 傳染病ノ發現及ヒ其影響

古來ヨリ、傳染病ノ來歴ヲ傳フル者多シ、然レモ唯一箇ノ醫書トシテ記

載セルハナク、多クハ文明史ノ一部ニ記録サレタリ、而ノ一度之ヲ緝カバ如何ニ多クノ民族ハ此恐ルベキ疾病ノ爲メニ、一掃サレシカ否全ク絶滅セル部落アルカヲ知ラン、知名ノ史家其史ヲ記スルニ當テ、希臘及ビ羅馬ノ勢力文明ノ一朝ニシテ消滅ニ歸セル者、必竟他ニ諸種ノ源因アルベシト雖モ、古代ノ末中世紀ノ初メニ東西羅馬ニ蔓延セル疫病ノ流行モ、一大原因ナリトセシハ、決シテ過當ナラズト信ズ、其後第十四世紀ニ流行セル黒死病ハ、殘餘ノ開明人ヲ拭ヒ去テ殆ンド風俗慣習ノ變更ヲ來スニ來レリ、

今古來歐洲ニ於テ實見サレシ、流行病患者及ビ死者ヲ列記セバ、如何ニ其害毒ノ恐ルベキカヲ知ラン(但シ如此事ハ今日殆ンド必要ナキニ似タレモ)近ク五十年間ニバーゼルニ於テ、二回ノ大流行アリ、一回ハ虎列拉ニ、千八百五十五年ニ流行シ、二百〇五人死亡シ、第二回ハ望扶斯ニ、千八百六十五年及ビ六十六年ニ流行シ、四萬二千ノ住民中四百五十人ヲ失ヒタリ、然レモ是等ノ數モ古代ノ流行時ニ比スレバ甚タ僅少ノ者タルヲ見ル、即チ千五百六十三、四年ノ流行ニハ四千人或ハ云フ七千人

トノ死亡數アリ、千六百〇九年ニ同シク十一年ニ至ルノ流行ニハ、黒死病ヲ以テ四萬〇四十九人ヲ亡ヒ、又十四世紀ノ中頃ニ於ケル黒死病ニテハ、住民ノ四分三ヲ奪ハレタリ、獨乙ハ、割合ニ他ノ歐洲諸國ニ比スレバ流行少シト雖モ、尙千萬人程ノ死亡數ヲ出シ、以太利ハ殆ンド住民ノ半數ヲ失ヒタリ、又英國ハ住民ノ十分九ヲ失ヒタリト傳フレモ、稍過大ナルノ傾キアリ、近世ニ於テ如何ニ死亡數ハ減少シタリト云ト雖モ、尙地震海嘯、崩土、洪水、等ノ天災地變ニ比シテ甚タ死亡數多キヲ見ル、戰爭ニ於テハ、戰死ノ僅少ニシテ、病死殊ニ傳染病ノ爲メニ死スル者ノ多キハ吾人近クハ廿七八年戰役ニ於テモ、耳ニシタル處ナリ、其結果ハ未ダ確知セザレモ、彼ノ千八百七十、七十一年ニ涉レル普佛戰爭ノ當時ニ於テハ戰死ハ病死ニ比シテ甚タ僅少ナリト云ヒリ

第三 傳染病ノ分類

本病ノ分類ニ付テハ、古來種々ノ說アリ、初メハ單ニ發現セル症候ニ仍テセリ、故ニ荷類似ノ症狀ヲ呈セル者ハ、集メテ一類中ニ算セリ、假令バ

傳染病ノ分類

症候的分類

全身水腫、黃胆、腦出血、熱性譫妄、灼熱ト區別セルカ故ニ日發麻拉利亞ハ
 隔日發麻拉利亞若クハ四日發麻拉利亞トハ別物トナレリ、反之腹水ト
 鼓腹(瓦斯ニ因セル)トハ同疾病ノ異態トセリ、而シテ此流ヲ汲ム者ニハ、解
 剖的或ハ原因的等ノ注意ハ、一モ容ル、處トナラザリシ之ヲ以テ假令
 ヒバ一患者アリ、右胸下部ニ疼痛ヲ訴フ、之ヲ診スル者ハ其位置及ビ疼
 痛ノ性質ヨリ想像シテ肝炎ト断定セシニ、解屍ノ後右胸膜炎ナルヲ
 發見セリ、然ルニ此流ノ者ハ之ヲ以テ、診斷ノ誤謬ヲ恥デズ、寧ロ症狀ノ
 ミヲ以テスル診斷ナレバ、無理ナラヌ事位ニ思ヒ居レリ、其後漸次病理
 解剖ノ研究盛ナルニ至リ、漸前說ハ勢力ヲ失ヒ、必竟如此分類ハ學術的
 ナラズトナスニ至レリ、然レモ又一理ノアル所ハ所謂一不理ノ潛ム處
 タルハ免ル可ラサルノ數ニ、此病理解剖的ノ分類行ハレテヨリ以來
 濫リニ疾病ヲ一器臟ノ變化ニ歸スルノ弊ヲ生ジ、假令ハ間歇熱ハ肺炎
 ヨリ、傳染病ノ多數ハ腸胃ノ加答兒ヨリ、急性發疹病ハ皮膚ノ焮衝ヨリ
 起ルト、論究スルニ至レリ、此分類法ト雖モ最終ノ者ニアラスシテ、其後
 醫學ノ進步スルニ從テ、又原因的、分類ノ法出デタリ、蓋シ病ノ原因ニ注

病理的解剖的分類

原因的分類

意シ、之ニ仍テ分類ヲナスノ法ハ昔ニ學理的其當ヲ得タルノミナラス
 醫學最終ノ目的タル治療上ニ大影響ヲ與ヒタル者ナリ、其明ラカニ各
 病ノ原因ヲ知リシハ、最近ノ事ニ屬スト雖モ、然レモ古クヨリ知ラレシ
 者モ少カラズ、同ジク熱性ノ疾患アリトセンニ、其源ヲ詳カニセシテ、
 徒ニ下熱劑ヲ與フルモ、効驗アルノ理ナク、況ンヤ傳染病ノ如キニ至テ
 ハ治療中尤モ必要ナル豫防等ハ、前二種ノ分類法ニ至テハ到底考ヒ及
 ボシ得ザルノコトナラン、此法ノ優レル事如此キモ、凡テノ疾病全班ヲ通
 ジテ之ヲ施スハ難シ、見ヨ、或ル病名假令ハ、糖尿病、神經痛、癩、精神病等
 ノ如キハ、依然症候的及病理解剖的ノ名稱ヲ存セルニアラスヤ、唯傳染
 病ニハ汎ク原因的分類法ヲ費用セリ、昔時全ク異物ト思惟サレシ、日發麻
 拉利亞ト四日發麻拉利亞トハ元來同一種ノ疾病タルヲ明カニシ、之ト
 殆ンド類似ノ症候ヲ有スル膿血症等ハ、全ク別種ナルヲ知リ、又加之症
 候的ニハ甚ダ異ナレル疾病假令ハ麻拉利亞性神經痛、麻拉利亞性下痢
 及ビ、麻拉利亞惡液症等ヲ同一種ノ疾病トナスニ至レリ、其他假痘ハ痘
 瘡ト同一型ノ者トスレモ、種痘、水痘ハ之レヨリ分チ、亞細亞虎列拉ノ極

メテ輕症ナル者ト雖也、亞細亞虎列拉ハ亞細亞虎列拉ナリ、假令ヒ重症
 ニシテ甚ダ危險ヲ來スモ歐羅巴虎列拉ハ之ト別物ナリ、軟性下疳ト梅毒
 ト、格魯布ト、實扶的里ト、古來迷ヲ生シ易キ症ナリシ、然レモ今日ハ之ヲ
 全ク別テリ、蓋シ今日云フ處ノ主點ハ、其症狀ノ異同、局處障害、若シクハ
 變化ノ如何ニヨツテ云フニアラズ、全ク其原因トナルベキ病毒ノ異同
 如何ト顧ルノミ、如此原因の分類ノ正確ナルハ爭フ可ラズ、從テ目下ノ
 急ハ、其原因ニ從テ各種疾病ノ名稱ヲ明カニ區別シ、其間少シモ迷フ處
 ナカラシムルニアリ、然レモ今日多クノ病名ヲ見ルニ尙古ノ症候の時
 代ノ命名ヲ襲用セルヲ多シトス、
 疾病ノ原因タルベキ凡テノ有機小體ニシテ其發育ノ工合及ヒ生物學的
 諸種ノ關係、明ラカナランニハ、之ヲ屬ニシ、之ヲ類ニシ、其階級種別ヲ定
 ムルニ甚ダ難カラザレモ、如何ンセン、今日ノ處ニアリテハ、其多數ハ未
 ダ不明ニ屬セルヲ以テ、唯其症候經過ヲ見テ、其人體ニ及ボス、作用ヲ察
 シ、而ノ之ヲ以テ既ニ存在ノ明ラカナル病毒ニ比シ、其本態ヲ想像スル
 ニ過キズ、勢如此キガ故ニ、余輩ノ分類法ヲ生物學的志想ヲ以テ、觀察セ

痘毒性傳染
間接性傳染

バ、甚ダ理想ニ外レタルニ似タレモ、然レモ尙ホ多數ノ疾病ニ就テ、異同
 ヲ定ムルノ便利ハアリ、要之、疾患分類ノ法ハ、多ク其一々ニ付テ考フレ
 バ、皆多少ノ道理ヲ有セリ、然レモ余輩ハ先ツ考テ生物學ニ置キ、少クト
 モ其知渡リシ者ニ付テ、分ツテ尤モ正當ナリト信ズ、今日廣ク行ハレ且
 ツ甚ダ必要ト見做スベキハ、各種傳染病ノ發生、及ビ其傳播ノ景況ニ據
 テ分チタル者トス、即チ大體ニ分テ痘毒性及ビ觸接性トナス、痘毒即チ
 「ミアスマ」トハ不潔ト云フ意義ニシテ、汚氣空氣中ニアリテ之ニ觸ル、
 者疾病ヲ起スノ意ナリ、而シテ古ヘヨリ麻刺利亞、痘瘡等之ニ數ヘタリ、
 觸接毒トハ或ル疾病ニ固有ノ病毒ヲ意味スル者ナリ、而ノ之レニ傳染
 シタリト云ヒバ必ズ第一ニ之ヲ有セシ患者ナカル可ラザレモ、痘毒性
 ニアツテハ體外ノ所謂汚氣ニ因スル者ナルカ故ニ、必ズシモ第一ノ患
 者ヲ要スルコトナシ、故ニ甲ハ原病ノ患者ヨリ蔓延シテ、多クハ流行性ニ
 來レモ、乙ハ病毒體外ニアリ、ヨシ之ニ罹レル人アリテ、方々ヲ漫遊スル
 モ爲メニ之ヨリ流行ヲ來スコトナシ、之ヲ以テ多クハ地方性ニ來ル、之レ
 其原因ヲ有スル地方ニ病毒アリテ、之ニ觸ル、者ノミ感染スレモ、人ヨ

リ人ニ傳ハラザルガ故ニ蔓延ヲ來スナキニ依ル此觸接傳染病ニハ
 麻疹猩紅熱痘疹發疹瘰癧斯再歸熱實扶的里丹毒馬疫脾脫痘恐水病梅毒
 有毒性壞瘍膿漏性結膜炎百日咳及結核其他ノ加答兒性諸病等ヲ編
 入ス此等ノ疾患ハ皆觸接ニ依リテ感染スル者ニシテ其方法ノ如キハ
 必ズシモ直接ノ傳染ヲ要スルニアラズ種痘器具衣類或ハ唯空氣ヲ傳
 フテスルモノトス醫師看護人等ノ第三者ヲ介シテ傳染スルモアリ此
 病毒ハ人體ヲ離レテハ人工ニ培養基等特殊ノ裝置アルニアラザレバ
 永ク生存スルヲ能ハズ全ク大寄生蟲ノ關係ニ異ナルヲナシ故ニ病毒
 ノ運命ハ一ニ合主ニ繫ル者トス而ノ其大寄生蟲ト異ナルハ此者ハ患
 者ヨリ病毒ノ或ル他ノ健康人ニ進入スルニ當テ既ニ固有ノ病毒ヲ形
 成シ敢テ患者ノ身體ヨリ出テ、他ノ健康人ニ移行スル迄ニ種々ノ變
 遷等ヲ要セザル者ナリ
 療毒性傳染病ハ則チ麻拉利亞諸病ニシテ其人體中ニ寄生スルヲガ此
 病毒ノ繁殖ニハ一モ必要ト云フニアラズ故ニ本病々毒ノ生存スルハ、
 寧ロ偶然ト稱スルモ可ナリ療毒性傳染病ノ定義既ニ如此ナルガ故ニ、

彼ノ急性關節痲質斯肺炎心内膜炎骨髓炎等凡テ常在性微菌ニ依テ
 起ス疾病モ皆此屬中ニ包括サル、ニ至ルベシ
 以上列記セル諸病ハ先ヅ其所屬明カナル者ニシテ觸接傳染病ト療毒
 性傳染病トノ別稍明ラカナルニ似タリ然レモ尙此他其何レニ屬スベ
 キカ甚ダ分類上困難ナル者アリ故ニ此等ノ諸病ニ至テハ其傳搬ノ模
 樣甚ダ曖昧ニシテ觸接療毒ノ孰レトモ決シ難キ者アリ、
 之ヲ虎列拉ヲ以テ例センカ古來諸說紛々トシテ歸着スル處ナク臨
 床上尤モ緊要ナル問題即チ本病ハ觸接傳染病ナルカ將タ療毒性傳染
 病ナルカノ疑問ニ至テ諸家ノ所說一致セズ斯道ノ大家エル、コツホ氏
 スラ尙此問題ニ付テ明瞭ナル判斷ヲ下シ得ザル程ナリ或ル者ハ本病
 ヲ直接觸接ニ依テ傳染スル者ニアラズトナシ醫師看護人ノ屢々患者
 ニ接スルニモ係ハラス甚シキ多數ノ傳染者ナキト其排泄物及ヒ血液
 等ヲ授種スルモ陰性ノ結果ノミナルト假令ヒ純粹培養セル微菌ヲ嚥
 下スルモ尙ホ必ズ本病ノ發スルトハ定マラズ然ルニ一度モ患者ニモ、
 接セズ見タリモノナキ者ニシテ尙ホ本病ニ感染スル者ハ多數ニアリト

ノ事ヲ舉テ證トナセリ、然レモ亦一方ノ論者ハ曰ク、若シ果シテ前説ノ如クンバ、初メ東印度ニノミ流行セシ本病ノ如何ニシテ諸方ニ傳播セシカ、彼ノ病毒性傳染病ニ於ケル其一地方ノミニ流行シ、居ル者ナランニハ、其土地ヲ履マザル者ノ本病ニ罹ル道理ナシ、故ニ此等ノ事實ヨリ見レバ、虎列拉ハ明ラカニ觸接傳染病ナリト、如此關係ハ、窒扶斯、赤痢、黃熱、黑死病等ニモ存ス、彼ノ麻疹、猩紅熱、痘瘡等ノ觸接傳染病ナルハ疑ヲ容ル、者ナキモ、今日尙虎列拉、窒扶斯等ノ諸病ニ至テハ、一定ノ確説ナシ、豈遺憾ナラズヤ

然ラバ如何ニシテ此表面上異ナリタル二説ヲ事實ニ照シテ同一理ニ歸セシムヘキカ、即チ一ハ直接觸接ニ依テ感ゼズト云ヒ一ハ既ニ本病ヲ患ヒタル者ヨリ健康ナル他人ニ傳染スルノ事實アリ、稍々表裏ノ感ナキニアラズ、然レモ傳染病毒ノ有機小體ヲ以テ寄生虫ニ對比シテ至當ナルベキハ、前ニ云ヒタルガ如シ、此寄生虫ニ就テ考フレバ、諸種ノ成塾階級アリテ其人體内ニ入りテ害ヲナスニハ、諸方ニ宿替ヲナサザル可ラザルハ人ノ能ク知ル處ナリ、之ト同ジク虎列拉、窒扶斯、赤痢等ノ

觸接性病毒性傳染

有機小體ハ、人體内ニ繁殖スルニ至ル迄ニハ、二期ノ發育期ヲ經過セザルベカラズ、即チ一ハ人體内ニ於テシ、一ハ人體外ニ於テス人糞ノ新鮮ナル者ニハ此發育期ニアル有機小體ヲ含ム、故ニ假令ヒ之ヲ人體内ニ送入スルモ、通常疾病ニ罹ルヲナシ之レ其有毒作用ヲ逞フスルニ至ルニハ尙一度體外ニ於ケル發育期ヲ經過セザル可ラザルガ故ナリ、故ニ若シ本病ニ罹レル者ノ糞一度地ニ下リ、濕氣、有機質等凡テ有機小體ノ發育ニ都合ヨキ狀況ニアルトキハ、茲ニ其發育ヲ遂ゲ、初メテ有毒作用ヲ逞フスルニ至ルヲ以テ、此状態ヲ以テ人體内ニ入レバ、直ニ感染スル者ナリ

然レモ本病等ノ唯患者ニ觸レシノミニテハ患染セザルハ明ラカナルガ故ニ、實ハ觸接傳染病ト云ヒバ、用語ニ僻スル處アリ、麻拉利亞ノ如キハ、實際毒氣人體外ニアツテ、而シテ之ヲ療毒性ト云フハ當レリ、本病モ亦若シ患者體内ヨリ毒芽ヲ地中ニ放テバ、即チ毒ハ體外ニアルナリ、此點稍麻拉利亞ニ類ス、唯一ハ其前ニ患者ノ脱糞等ノ條件ヲ要セザレモ、後者ハ常ニ脱糞其他ノ排泄物出ヅルニアラザレバ、外部ニ毒ナキノ差

アルノミ故ニ古來ヨリ此ニ義ヲ含有セシメテ虎列拉腸窒扶斯赤痢等ヲ觸接性瘧毒性傳染病(contagios-miasmatische-infectionskrankheit)ト稱シ尙黃熱黑死病等モ此内ニ屬ス

限局性傳染病
全身性傳染病

臨床的ノ必要ヨリ傳染病ヲ尙ホ二種ニ區別ス其一種ニ屬スベキ者ハ唯身體中ノ一部ニ限局シ他ニハ少シモ障害ヲ及ボサル者ニシテ他ノ一種ニハ感染スルト同時若シクハ暫クシテ直ニ全身ニ病毒ノ蔓延スル者屬ス甲ヲ限局性(local)乙ヲ全身性傳染病(allgemeine-infectionskrankheit)ト稱ス甲ハ假令バ淋病ノ如シ僅ニ尿道粘膜ヲ犯スニ過ギズ其率丸膀胱等ヲ犯スニ至ル者ハ粘膜連續ノ關係アレバナリ下疳亦此關係ニ同ジク其横疹ヲ發スルモ其理之レニ異ナルコトナシ乙ハ假令バ梅毒并ニ急性發疹病(麻疹猩紅熱痘瘡等等)ノ如シ急性發疹病ハ昔シハ皮膚ニ局在セル傳染病ト見做サレシモ今日ハ其然ラズシテ其皮膚症狀ハ唯一般症狀ノ外皮ニ發表サレシニ過ギズト云フニ至レリ而シテ此全身性傳染病ニシテ其症狀ヲ一局處ニノミ發現スルコトアリ之ヲ全身病ノ限局地位(Localisation des Allgemeinerkrankung)ト云フ要之限局性ト

全身性トノ差ハ甲ハ病毒ノ副産物血中ニ循行セズ乙ハ之ヲ血中ニ注ギ以テ全身ヲ巡行スルノ點ニアリ

全身性傳染病ニ屬スベキハ梅毒急性發疹病ノ他尙再歸熱黑死病腸窒扶斯麻拉利亞及急性關節僂麻質斯トス

限局性傳染病ニハ有毒性壞瘍痲病百日咳赤痢虎列拉流行性腦炎黃熱肺炎丹毒等屬ス

「赤痢ニハ其局所ニ發セル實扶的里嫩衝ヲ以テ其症狀ノ原因ト見做ノ餘リアリ虎列拉モ亦ニ一マイエル氏ノ思考ニ依テ單ニ腸ニ於ケルノミノ變化ナリトシ諸種ノ實驗ヲ積テ之ヲ證明シ其病源ハ心臟血液神經系ノ直接ニ障害ヲ與フル者ニアラズトシ後エルコツホ氏之ヲ證明シテ確定セリ又ニ一マイエル氏ハ流行性脊髄膜炎ハ腦膜炎ト脊髄膜炎ノ凡テノ症狀ヲ證明シ得ルコトヲ明ラカニセリ黃熱モ亦リ一マイエル氏(ス)タル氏ニ仍テ固有ノ傳染病源ニ因セル肺ノ實質炎ナルコトヲ知ルニ至リタリ」

限局性傳染病ノ病毒ハ血行中ニ移行セズト云ヒシモ時トシテ例外アリテ一處ニ限局性症狀ヲ發シ其毒血中ヲ傳フテ又他部ニ移行シ茲ニモ一局處ニ其症狀ヲ呈スル者アリ假令バ一種ノ化膿症ノ如シ彼ノ痲

病赤痢等ノ場合ニ膝關節ニ轉移性ニ症狀ヲ發シ又肺炎丹毒等ニ於テ轉移性ノ腦膜炎及ビ腎臟炎等ヲ發スルモ皆此理ニ由ル此轉移症狀ハ即チ傳染病分類ノ第三者ヲ連繫ニナス者ト云フベキカ、
 此傳染病ノ第三類中ニモ亦限局性ト全身性アリ且ツ初メハ限局性ニ來リ其病毒血中ニ運行スルトキハ遂ニ全身ヲ犯スニ至ル者アリ假令ハ實扶的里敗血症產褥熱及ビ結核ノ如シ、

實扶的里ハ初メ限局性ニ來リ咽喉諸器或ハ時トシテ他部ノ粘膜炎等ヲ犯シ其部ノ組織ニハ連續的ニ蔓延スレバ尙局部ニ止ルト雖モ或ル場合ニハ其病毒血中ニ移行シテ全身性トナリ他ノ多數ノ器臟ヲ犯スニ至ル、
 敗血症及ビ產褥熱敗血症等ハ多クノ點ニ於テ相近似スレバ尙ホ其性質ハ全ク異ナリタル者ナリ敗血症ハ常在性有機小體ニ依テ生ジ時ト處トテ論セザレバ其有機小體ノ性質ニ從テ人體ニ及ボス作用ト症候トヲ別ニス假令ハ或時ハ非常ニ高熱ヲ發スルコトアリ又或時ハ之ニ反シテ重症ナルニモ拘ハラズ消耗性ノ熱ニ止マルコトアリ膿血症及ビ產褥熱ハ地方性又ハ流行性ニ來ルモノニシテ勝手ノ催腐菌ニテ引起ス者ニアラズ一種固有ノ有機小體アリテ存ス故ニ其來ルヤ一定ノ處ト時トノミニ限ル而シテ此二病ハ當時

尙想定サル、如ク唯其犯ス場所ノ異ナルノミニ依リテ其名ヲ異ニシ產婦ニ來レバ產褥熱ト稱シ手術患者傷者等ニ來レバ膿血症ト稱スル者ナリトノ説ハ信シ難シ如何トナレバ病ノ經過並ニ解剖的所見等ヨリ察スルモ必ズ各一種固有ノ病毒アツテ生ズルヲ知レバナリ勿論昔時ハ病院ノ外科室等ニハ非常ニ多ク蔓延セシヲ以テ前述ノ如キ所説ノ行ハレシモ無理ナラヌ障ナリ而シテ昔ハ之レガ爲メニ外科患者ノ死亡數ヲ増ス事夥ダシカリシガ近時消毒方法ノ完備スルニ至テ全ク本病ノ跡ヲ絶ツニ至リタリ膿血症ハ一種ノ傳染病ニシテ器具帶材料加之創面ヲ吹來ル空氣等ニ依テ病毒ヲ運搬サレ又其部ヨリ病毒ハ血中ニ入りテ血栓性轉移症ヲ發シ體中諸器ニ多發性膿瘍ヲ生ズ產褥熱モ亦一種ノ傳染病ニシテ好テ產婦ヲ犯シ或ハ直接ニ感染スルモアリ又或ル時ハ本病ニ依テ死セル患者ノ解屍ヲ傍覽セル醫師ノ直ニ產婦ヲ處置スル等ヨリ感染スルモアリ又時トシテ其病毒進入路ノ不明ナル場合モ多シ本病ハ時々蔓延セル流行チナシ近時ニ至ル迄産室ノ死亡數中大部ヲ占メタル位ナリシガ近來消毒法ノ進歩ト共ニ著シク其數ヲ減シタリ產婦ニアリテハ其他子宮内膜炎ニヨリテ本病ヲ誘起スルコトアリ而シテ病毒血中ニ入り殊ニ漿液膜假令ハ腹膜胸膜心外膜軟腦膜及ビ關節粘膜炎等ノ嫩衝ヲ誘起ス、

結核ハ通例限局性ニ來レモ一方ニハ原發病變アリ相隣諸器ニ移行シ一方
 コハ淋巴腺ヨリ又ハ病毒ノ器械的運行ニ仍テ他器ニ波及ス、假令ハ今肺ノ
 一部ニ結核病變アリトスレバ、病毒ハ或ハ淋巴腺ヲ傳テ氣管枝腺及ビ胸膜
 ニ移行シ、又ハ氣管氣管枝ノ粘膜炎ヲ犯シ、或ハ呼吸ニ依テ肺ノ他部ニ傳播シ、
 或ハ咯痰ニ依テ、屢々喉頭粘膜炎ニ播種シ、若シ又痰ヲ嚥下スルトキハ、腸粘膜炎
 ナリシテ、腸結核ヲ誘起シ、此處ヨリ再ビ淋巴腺ヲ傳テ、腸間膜腺及ビ腹膜ニ
 移行ス、以上ノ如ク假令ヒ其犯サレシ局處ハ、漸次増多スルモ、病毒ノ未タ血
 中ニ入ラザル間ハ、純全タル限局性ニ止ル、此例ハ肺ニ原發變アリトシテ、假
 定シタル者ナレモ、泌尿器、又ハ腸ニ原發スルモ、同シ關係ナリ、即チ膀胱腎、
 丸等ハ漸次犯サルモ、肺ノ全ク健全ナルコトアルハ、人ノ能ク實驗スル處ナ
 リ、然ルニ一朝病毒血中ニ運行スルトキハ、體中諸所ノ器臟ヲ犯シ、粟粒結核
 ナナスニ至ル、

之ヲ要スルニ、多クノ醫師ハ傳染病ト云ヘバ、直ニ全身性ナルガ如キ感觸ヲ
 有スル者アリ、甚シキニ至レハ限局性ノ者ハ傳染病中ニハ算入セザル者モ
 アリテ傳染病ナル定義モ、實ハ甚ク困難ナル者ナリ、或ハ限局性ノ者ハ、他ノ
 其局部ノ疾病ト同シク、其條下ニ述アルヲ便且ツ理解シ易キガ如シ、假令ハ
 百日咳ハ呼吸器病篇ニ流行性腦膜炎ハ一般腦膜炎ノ條下ニ肺炎ハ肺ノ條

下ニ丹毒ハ皮膚疾患ノ條下ニ疥癬下疳ノ如キハ生殖器疾病ノ條下ニ各論
 スルハ或ハ當テ得タルヤモ知レズ、然レモ日新ノ今日苟モ一定ノ數箇ニ仍
 テ起ス者ヲ傳染病トナス以上ハ部分ノ甲乙ヲ論セズ皆一括シテ論載スル
 ノ便レルニ如カズト思惟ス、

今吾人ノ必要ナル分類ハ瘧毒性ト觸接性トノ區別ナリ、次ニ記載セル
 病名中本書ノ目次ニナキ者モアリト雖モ純粹ノ定義ニ從テ今ハ區分
 セルノミ、

第一 瘧毒性疾患

麻拉利亞、急性關節癱瘓、麻質斯肺炎、

第二 瘧毒性觸接性疾患

亞細亞虎列拉、歐羅巴虎列拉、赤痢、黃熱、腸窒、扶斯、百斯、篤、流行性腦膜炎、

第三 觸接性疾患

急性發疹病(痘疹、種痘、風痘、即チ) 麻疹、猩紅熱、再歸熱、インフルエンザ
 流行性耳下腺炎、百日咳、丹毒、實扶的里馬疫、脾脫疽、恐水病、アクト
 ノミ、コリーゼ、有毒性膿漏及ビ潰瘍、梅毒、癩病、膿毒症、產褥熱、結核

上記分類セル疾病ハトニカク微菌ノ現存ニ依テ發スル疾病ノミヲ列記セル者ナレハ後來恐クハ尙此區域ハ廣クナルニ至ルベシ例令バ諸種粘膜ノ加答兒等ハ多クハ細菌ノ作用ニ起因シ又惡性腫瘍ハ恐クハ固有ノ細菌アツテ生ズルニアラズヤトノ疑問モアリ必ズ後來ニハ尙諸種ノ疾病ヲ傳染病中ニ算入スルニ至ルベシト思考ス、

第四 一般ノ原因

既ニ各傳染病ニ固有ノ病毒アルコトハ確實ナルガ故ニ今日ノ問題ハ其病原ニアラズシテ其病毒ノ人身體中ニ進入スルノ経路ト病毒發育ニ要スル條件トニアリ、
傳染ノ道ハ種々ニシテ多數ノ疾病ハ直接ノ觸接ニ仍テ傳播スレバ之レ又觸接傳染病ニ限ルコトニシテ人體外表ヘノ傳染ハ殊ニ特別ノ罅隙ヲ要ス例令バ或ル病毒ヲ接種スルトキノ如ク病毒ハ直接ニ血液或ハ淋巴液ト混合ス彼ノ刺蟲屬ノ如キモ時トシテ上記ノ如キ媒介ヲナスコトアリ又粘膜ノ如キハ例令ヒ如此罅隙ナシトスルモ本來ノ組織疎

鬆ナルヲ以テ病毒ノ進入大ニ容易ナリ膿漏性粘膜炎ノ如キ單一粘膜ヨリ他部ノ粘膜ニ其排出液ヲ移植スルトキハ其部ニ同症ヲ生ゼシムルコトヲ得又實扶的里ノ如キモ同様ノ成績ヲ得ルガ如シ其他多クノ傳染病例令バ有毒性潰瘍梅毒恐水病種痘脾脫疽并ニ馬疫等ノ如キ皆然ラザルナシ、

病毒ノ進入スル通例ノ経路ハ凡テ體外ヨリ物質ヲ體內ニ攝取スル處即チ消食器系及呼吸器系等ニ其消食器ニ入ルハ多クハ不熟ノ湯又ハ羹炊セザル肉類等ヲ食スルヨリ來リ又生乳ヨリモ動物ノ病毒ヲ輸入シ生水ハ勿論尤モ重キ原因ヲナス而シテ消食器ヨリ入ル傳染病ノ種類ハ重ニ腸管ヲ犯ス限局性傳染病ナルカ又ハ少クトモ最初ニ腸管ヲ犯スベキ傳染病ナリトス之ヲ例ヘハ虎列拉赤痢腸窒扶斯等ノ如シ結核ノ最モ初メニ腸ニ來ルハ稍々希有ニ屬ス、

他ノ傳染病毒ハ空氣ニ依テ傳播サル之ヲ稱シテ揮發性病毒 (Flüchtige Infektionsstoffe) ト云ヒ然ラザル者ハ固定性病毒 (Fixe Infektionsstoffe) ト稱ス勿論揮發性ト稱スルモ化學的ノ意味ニアラズシテ微細小體ノ氣中ニ

合包サル、者ナリ、決シテ病毒ノ瓦斯狀ニ變セルニハアラズ、如此揮發
 性病毒ニ屬スルハ麻拉利亞、虎列拉、腸窒扶斯、急性發疹病、實扶的里、百日
 咳、結核等ニシテ有毒性潰瘍、膿漏性、疥癬、梅毒、恐水病、種痘等ハ固定性病
 毒ニ屬ス、
 液性、或ハ濕性ノ病毒含有物ハ固ヨリ空氣ヲ傳テ人體内ニ入ルコトナシ
 ト雖、肺結核、實扶的里、百日咳、等ノ患者ノ呼氣中ニ病毒ヲ含ムカト云
 ヘバ、通例ハ含マザル者トス、然レモ若シ液性ノ病毒含有物若シ氣狀ニ
 霧散スルトキハ、同時ニ病毒モ含マレテ飛散ス、例令バ百日咳ノ傳播ス
 ルヤ多クハ喀痰ヨリスルガ如シ、
 兎ニ角病毒ノ氣中ニ傳播スルハ、之ヲ含メル液體例令バ唾液、糞、等ノ乾
 燥シテ小片トナリ、風ニ送ラレテ飛散スルニ因ス、故ニ肺病患者ノ手巾
 (唾ヲ拭ヒタル)虎列拉患者ノ糞便附着セル褌衣等ヨリ病毒ノ飛散シテ
 爲メニ感染セルナラント推考シ得ラル、場合少ナカラズ、如此シテ氣
 道ニ入り後終ニハ血中ニ循環スルニ至ル、又空氣中ニ飛散セル病毒ノ
 食物飲料中等ニ落下シテ、嚥下サル、事モアリ、又一時吸入サル、モ咽

頭附近ニ附着シ後食物ト共ニ嚥下サル、コトモアリ、然レモ病毒ノ單ニ
 外皮ニ附着セルガ爲メニ感染スルト云フ説ハ疑ハシキモ彼ノ蠅、其他
 ノ羽蟲ニ依テ病毒ノ運搬サル、ハ稍異ニ近シ、
 又揮發性傳染病ハ短距離ナレバ、夫丈ケ感染ノ力強シ、假令バ痘瘡、麻疹、
 猩猴熱ノ如キハ患者若クハ其用器ニ接觸セル者ハ直ニ傳染スルモ、其
 患者ト室ヲ同フセザル者ニハ經驗上感染スルコト鮮シ、虎列拉、赤痢、腸窒
 扶斯等ノ患者ノ糞便ヲ扱フ者ハ感受シ易ク、痘瘡ノ如キハ街道ヲ越テ
 一家ヨリ向側ノ家屋ニ病毒ヲ傳播スレモ、虎列拉、腸窒扶斯ニハ如此氣
 中ヲ傳フテ蔓延スルコトナシ、麻拉利亞ノ如キモ百歩以内ニハ蔓延ノ効
 力ヲ有スレモ、遠距離ニハ此事ナシ、故ニ想像ヲ以テスレバ、傳染病毒ノ
 感受ニハ一定ノ量ヲ要スル者ニシテ、氣中ニ飛散スレバ體中ニ達スル
 迄ニ其量ヲ減ジ爲メニ其効ヲ失フニアラザルカ、
 病源ノ氣中ヲ傳フテ蔓延シ得ル距離ニ付テハ、古來種々ノ説アリ、一定ナ
 ラズ、一ニノ醫師ハ想像スラク、百新篤、虎列拉及ヒ其他ノ諸傳染病ハ埃及ヨ
 リ地中海ヲ越ヒ、伊太利ニ吹送ラレ、又麻拉ノ如キハ南米ノ一地方ヨリ北米
 迄テ歐洲ニモ達セルナラント、如此遠距離ニ病毒ノ傳播サレ、尙毒力ヲ保ツ

水ノ傳播力

事ナシトハ理論上確言シ得ザレド、實際ノ經驗ニ徴スルニ患者ノ居室ト多
 少ノ距離アレバ確實ニ傳染ヲ免レ得ル者ノ如シ、
 水ノ傳播力ニ付テモ、往々疑點少ナカラズ若シ河床ヲ流通スル水量大凡ソ
 一定セルトキハ、可成遠距離ニ傳達シ得、例令ハ腸窒扶斯ノ水道ヲ傳フテ憂
 延スルガ如シ、然レモ時トシテ怪訝ニ耐ヘザル安説ヲ唱道スル者モ少カラ
 ズ、例令ヒ前項ニ述ベタルガ如ク理論ト實際ト多少ノ相違アリト雖モ例令
 ハ地中海ノ一島ニ、虎列拉病流行シ其病毒東海ニ移行シ、其處ニ碇泊セル艦
 船ニ流行チ米セリ等ノ説ノ如キハ、寧ロ一笑ニ附スベキ者トス、

個人的素因
免疫質

又健康體ニ病毒進入スルモ、必ズ其毒ニ感染スルト定リタル者ニアラ
 ズ、之レ例令ヒ無數ノ病毒ハ體中ニ入ルモ、其發育ニ適當ナル地位ヲ占有
 シ得ザル者モ多數ニ存スレバナリ譬ヒバ同ジク痘苗ヲ接種スルモ一
 人ハ重ク感シ、他ノ者ハ輕ク感シ、又全ク感染セザル者モアルト同理ナ
 リ、之ヲ要スルニ唯病毒體中ニ入リシノミニテハ、發病ノ原因トナラズ、
 必ズ之ニ伴フニ身體器臟ニ特殊ノ關係ヲ要ス、之レ即チ各人感染ノ異ナ
 ル所ニシテ、而シテ感受スルモ輕重ノ差アル所以ナリ、之レヲ稱シテ個
 人的素因ト云ヒ其病毒ニ感染セザル者ヲ免疫質ト云フ、此二ツノ術語

ハ必竟スルニ經驗上ヨリ來リシ者ニシテ、一定ノ學理的基礎アルニ非ズ
 次ニ此事ニ付テノ必要ナル經驗ヨリ得タル事實ヲ述ベン、

罹病ノ素因トハ論究スレバ局處ノ損傷ニ因スル事柄ナリ、假令ヒ皮膚
 膚ニ多少ノ損傷アツテ或ル病毒ニ觸ルレバ、直ニ感染スルモ健全ナル
 皮面ニ假令ヒ病毒ノ觸ル、一アルモ此事ナシ、呼吸器ノ如キ其健全ナ
 ル者即チ完全ナル機能ヲ有セル纖毛上皮ヲ以テ被覆サレタル氣管枝
 粘膜ニハ、結核微菌ノ入ルコトアルモ、排泄運動盛ナルガ故ニ、一處ニ占位
 シテ發育スルコト能ハザルモ若シ慢性加答兒等ヲ患ヒ居リ、纖毛ノ働キ
 充分ナラザルトキハ初メテ微菌沈着シテ疾患ノ基ヲナス故ナリ、
 又身體一般ノ衰弱モ素因中ニ算入サル、而シテ重ニ結核、虎列拉肺炎等ノ
 好デ犯ス所ナリ、反之腸窒扶斯ノ如キハ好デ壯年ノ者ニ來ル、
 殊ニ奇ナルガ如クニシテ必要ナル經驗ハ、二三ノ疾病假令ハ痘瘡、麻疹、
 猩紅熱、發疹、室扶斯、黃熱等ヲ一回經過スレバ、多クハ免疫質ヲ得、又腸窒
 扶斯、百斯篤、百日咳等モ一回之ニ罹レバ免疫トナルト云フト雖モ確實
 ナラズ、反之シテ虎列拉、赤痢、再歸熱、及ビ有毒性潰瘍等ニ至テハ、一回罹

病ノ後ハ却テ數々反覆スルノ傾キアリ、加之加答兒丹毒肺炎急性癩麻質斯ノ如キハ一回經過セル後益々素因ヲ益スガ如シ、假令ヒ傳染病毒身體ニ附着スルヲアルモ、其病毒ヲ逞ニスルニ至ル迄ニハ一定ノ量ヲ要シ、其量ハ又病毒ノ性質ニモ關ス、通例ノ病毒ニアリテハ、若シ非常ニ稀薄ナルキハ、害ヲ及ボサズ、故ニ病室ノ換氣宜シキヲ得ルカ、或ハ特ニ通氣ヲ盛ニスルトキハ、感染ノ度ヲ著シク減ズルヲ得、但シ此際揮發性ノ病毒ト固定性ノ病毒トヲ比スルニ其毒度ヲ失フ甲ハ乙ニ比シテ容易ナルノ差アリ、假令バ種痘ニ用フル痘苗ノ如キ、一定ノ度ニ至ル迄ハ水又ハ處理設林等ヲ以テ稀釋スルモ、尙効ヲ奏スレモ、其度ヲ過グルトキハ、遂ニ其効ヲ失フニ至ル、又反之シテ病毒ノ量多キカ、或ハ屢々襲フトキハ其害愈増要ス、之ヲ例セバ僅ニ結核素因アル者モ永ク同患者ト同棲スルカ、或ハ結核微菌ヲ含メル空氣ヲ永ク呼吸スルトキハ、遂ニハ同病ニ罹ルガ如シ、彼ノ夫婦間ニ結核ノ感染シ易キガ如キハ之レガ爲メナリ、茲ニ餘事ナガラ附記スベキハ夫婦間ノ結核傳染ハ妻ノ夫ヨリ感受スルハ夫ノ妻ヨリ感受スルニ比シテ其數多キカ如シ、之レ或

ハ婦人ハ能ク其夫ヲ看護スルヲアルモ、夫ノ直接ニ婦ヲ看護スルハ稀レナル爲メナランカ、又此傳染ハ病毒ノ性質ニモ關ス、強力ノ痘苗ハ弱度ノ痘苗ニ比スレバ、大ニ感受ノ力强キニテモ知ルベシ、多クノ病毒素ハバストー氏ノ證明セル如ク發育ニ不適當ナル培養基ニ養成セル者ハ通例弱キガ如シ

神経系疾病ニ於ケルガ如キ、遺傳ノ關係ハ傳染病ニモアレモ、甚ダ僅カナリ、就中一般ニ知了サレタル者ハ梅毒ニシテ此者ハ直接ニ親ヨリ子ニ傳フノミナラズ、父本病ヲ患ヒ、尙潜伏期ニアリテ母ハ未ダ感染シ居ラザルニ其兒ニハ既ニ傳染シテ出生スルコトアリ、又ノ結核症ノ如キモ一部遺傳サル、ガ如シ、但シ之レニハ多クノ學者ニ異論アリテ、始メヨリ病毒ニ遺傳サル、ニアラズシテ、一定ノ身體構造ニ虛弱ナル處アリテ後チ病毒ノ沈着スル者ナリト云フ人多シ、リーベルマイステル氏ノ如キハ多數ノ經驗ヨリ梅毒結核等ノ直接ニ親ヨリ兒ニ感染セルヲ見タリト主張セリ、而シテ此二者ノ間ニハ甲ハ出産當時直ニ遺傳病アルヲ目撃シ得レモ、乙ハ永ク潜伏シ或ハ二三代後ニ出現スルノ差アリ、通

常結核性遺傳ヲ有スル小兒ハ其十歳頃ニ至レバ結核性腦膜炎ヲ發シテ例ル、ヲ多シトシ、假令ヒ生存スルモ發育不十分ニシテ身體常ニ虛弱タルヲ免レズ、

上來説キ來リシ如ク傳染病ノ眞成ノ原因ハ、固有病毒ニアリトスレバ、古昔ヨリ稱道シ來リ且今日ト雖モ普通ニ信用サレツ、アル一種ノ説ト大ニ咀嚼スル所アリ、其所謂一種ノ説トハ假令ハ肺炎及急性關節痲質斯等ハ感冒ニヨリ神經性發熱(Nervenfieber)ハ精神的勞働、苦痛及心勞等ニヨリ、間歇熱并ニ其他多クノ疾病ハ感冒、不攝生或ハ時候ノ關係等ノ原因ヨリ起ルト云フガ如シ、然ラバ此説ハ全ク根據ナキ者トノ放擲シ去ル可キカト云ハ、余輩遠ニ首肯シ難キ者アリ、蓋シ此等ノ説ハ皆多年ノ經驗ヨリ立案シ來リ、今日吾人ノ經驗スル處ニヨルモ尙ホ此等ノ説ノ他ニ説明シ難キ場合尠カラズ、要スルニ之ヲ學術的立脚ノ地位堅カラズトノ顧ミザルハ吾人ニ於テ大ニ不便ヲ感ズル所ノ者ナリ、加之吾人ハ又上來所述ノ説ヲ枉グルコトナクシテ、前記諸説ヲ承認シ得ベシ、夫レ傳染病ノ發生スルヤ前ニモ屢述ベシカ如ク、唯病毒ノ體中ニ

進入セルノミヲ以テ出來得ベキニアラズ、必スヤ體中ニ入テ一定ノ發育ニ適當ナル位置ト材料トヲ得ザル可ラズ、而シテ其材料位置ノ病毒發育ニ適合スルニハ、又一條ノ條件ヲ要ス、即チ前記ノ諸害ハ、或ハ初メ偶然ニ來リ、其結果人體機關ノ異和ヲ生シ、依テ以テ病毒ノ沈着發育ニ便ナル位置ト材料トヲ供シタル者ナランカ、此故ニ吾人ハ普通之ヲ稱シテ誘因(disponierende Ursache)トナス

此故ニ僅微ノ創傷ト雖モ、體中ニ病毒ヲ進入セシムルニ足ルキハ、重症ヲ惹起シ、又苦痛心勞及ヒ榮養不良等ハ人體ノ毒素ニ對スル抵抗力ヲ弱メ、感冒ハ諸種ノ器臟ニ變化ヲ來シ、仍テ以テ肺炎、急性關節痲質斯并ニ其他諸病ノ發生ヲ容易ナラシム、暴飲過食等ノ不攝生ハ唯虎列拉流行時ニ於テ若シ其微菌人身中ニ潜在セルトキハ虎列拉ヲ發ス多クノ場合ニハ不攝生セズノ虎列拉ノ發生スルコトハ少シ、又屢々吾人ノ目撃スル如ク、急性骨髓炎ハ外來ノ歐打損傷等ノ刺戟ニ依テ發スルコト多シ、如此場合ニハ吾人ハ其人ノ體中ニハ既に以前ヨリ病菌存在セル者ト思考セザル可ラズ、其ノ他從來議論ノ存スルハ單純ノ肺炎ニシテ結核ニ

移行スルカ否カナリ臨床家ハ經驗上之ヲ承認シ、理論家ハ學術上之ヲ非難セリ、然レ例令ヒ單純ノ加答兒或ハ肺炎ト雖モ從前ヨリ體中ニ微菌ヲ有セル者カ又然ラズトスルモ、加答兒或ハ肺炎等ニ仍テ微菌ノ沈着ヲ容易ナラシメ、遂ニ發育ニ適當ナル地位ヲ與フルガ爲メニ此病變ノ存在ハ實地上決ノ少ナカラズ、且ツ學說上敢テ悖理ト云フ可ラズ之ト同理ニ外傷性骨膜炎ノ結核性ニ變ズルコトアリ、個人ニ付テ疾病素因ノ異ナルガ如ク傳染病ノ流行スルニハ時ニ關シ又處ニモ影響アリ故ニ吾人ハ之ヲ區別シテ地方的素因(Orliche Disposition)季節性素因(zehliche Disposition)ト云フ

此故ニ虎列拉ノ流行スルヤ或ル地方ニハ非常ニ重症ヲ發スルニ、之ニ隣接セル地方ニ於テハ其侵害ヲ免カル、カ、或ハ甚ダ輕症ノ流行ヲ見ルコトアリ、但シ此時殆ンド免疫ヲ得タルガ如キ觀アル地方ト雖モ其後ノ流行時ニ再ビ如此ナルコトハ難シ、

多クノ場合ニ於テ傳染病ノ流行スルハ、人間相互ノ交際ヨリ來ルハ論ナキモ、接觸性瘧毒性ノ流行病ハ、又其他家屋圍圃、市街ノ構造及ビ床下

ノ土質等ニ關ス、其蔓延スルヤ多ク不潔若クハ有機分解物ノ集積等ニ關シ、土地ノ高燥、氣候、飲料水ノ性質食物ノ關係及ビ住民ノ習慣、生活ノ程度等ニモ關ス、季節ノ素因ヨリ云ヘバ重ニ氣温及ビ晴雨其他地水ノ高低等ニモ關ス、

如此キ凡テ傳染病ノ發生ヲ助成スル諸因ヲ稱シテ誘因或ハ助因(Hilfsursache)ト云フ、此等ハ時トシテ臨床的ニハ眞因ト誤マラシテ却テ此助因ニノミ注意シテ、眞因ヲ忘却スル等ノ事アリ、試ミニ思ヒ、如何ニ豐饒ノ耕地ト云フト雖モ、種蒔カズシテ穀物ノ生育スルコトアルベキヤ、必克助因ニノミ拘泥シテ其本源ヲ忘ル、ガ如キハ、所謂素養足ラザル者ト云ハザル可ラズ、

第五 一般症狀

今或人傳染病毒ニ感染シタリトセンニ、直ニ其病毒固有ノ症狀ヲ呈スル者ニアラズ、尙若干時日ハ健康ニ經過スル者ナリ、此病毒ニ感シテヨリ、一定ノ症狀ヲ現出スルニ至ル間ノ時日ヲ稱シテ、潜伏期(Incubations stadium)ト云フ、而シテ此期ハ疾病ノ異ナルニ從テ、長短種々アリテ、假令ハ猩紅熱ハ七日、麻疹ハ十日、痘瘡ハ十日乃至十四日、腸窒扶斯ハ二乃至四週間、梅毒ハ三乃至四週間ナリ、其他恐水病ノ如キハ甚ダ種々ニシテ、平

均四十日ト稱スレトシテ甚ダ短キヲアリ時トシテ非常ニ長ク或ハ月餘或ハ數年後ニ發セル例モ少ナカラズ又一二ノ傳染病ニアリテハ、全ク潜伏期ノナキ者アリ、假令バ有毒性潰瘍又ハ膿漏性眼炎等ノ如シ此潜伏期ハ病毒ノ如何ナル關係ヨリ生ズベキ者ナルカ、吾人多少ノ疑ナキ能ハズ、又古來種々ノ臆說アリ、或ル者ハ曰ク假令ヒ病毒體中ニ入ルモ、其量少クシテ、未ダ身體ニ變化ヲ呈スルニ足ラザルナリト、然レ此說ハ實地吾人ノ經驗ニ合セズ、如何トナレバ、種痘スル場合ニ於テ種痘針ニ痘苗ヲ多ク着クルモ、少ク着クルモ、又一針接種スルモ、二十針接種スルモ、其潜伏期ニ於テハ、毫モ變ズルコトナケレバナリ、加之若シ前說ノ如クスレバ、病毒少量ナレバ、夫レニ應ジテ適度ノ症候ヲ呈セザル可ラズト雖モ、潜伏期中ハ敢テ徐々ニ或ル症候ヲ呈スルニ非ラズシテ、此期中ハ全ク訴フル處ナク一定ノ期日ヲ經過セル後多クハ急ニ症狀ヲ現出スル者ナリ、

尙ホ他ノ一說ハ此期中ニ於テ、病毒發育及ビ増殖スル者ナリト、故ニ其病毒ノ異ナルニ從テ其期モ亦同ジカラザル所以ナリ、假令バ純粹ニ觸接性ノ病毒ハ、人身體中ニ於テ發育シ、觸接性瘰癧性ノ病毒ハ、恰モ他ノ寄生蟲ト同ジク、體外ニ於テ一定ノ發育期ヲ經過ス、故ニ此二病毒ノ愈々症狀ヲ呈スルニ至ル迄ニハ自ラ差異ナカル可ラズ、

加之同一ノ傳染病ニ於テ各人其潜伏期ノ異ナル者アリ之レハ個人的ノ差異ニモ關スト雖モ、諸種ノ誘因アルカハ此期ヲ短縮シ、或ハ前項ニ述ベシ如ク病毒ノ異ナルニ從テ其發育ノ順序及ヒ體中ニ進入シテヨリ舍主ノ身體ニ變化ヲ起スニ至ル經過ノ模様等ノ異ナルガ故ナラシカ、通例急性發疹症ニアリテハ自然ノ通路ヲ經テ病毒ノ體中ニ入ルヨリハ、之ヲ接種スルトキハ遙ニ潜伏期短キ者ナリ、甲ノ場合ニ於テハ病毒ハ持続性形狀 (Dauerform) 例令バ芽菌ノ如キ者トナツテ入ルガ故ニ之レヨリ一反變化シテ後毒性ヲ逞フスルモ乙ノ場合ニアリテハ直ニ増殖シ得レバナリ、

要スルニ傳染病ノ症候ハ其病毒ニ感染セル結果ナルハ明カニシテ、各種傳染病ノ症候中相似タル處甚ダ多シ、然レモ固ヨリ其種類ノ異ナルニ從テ各々固有ノ徵候ヲ呈スル者ナカル可ラズ、是レ吾人ガ數多ノ經

驗ト學說ニ依テ各種ノ症候ヲ統合シ以テ各自ノ鑑別トナス所以ナリ、
 而ノ症候中感染後直ニ出現スル變化ヲ區別シテ直接ニ病毒ノ進襲ニ
 因スル者 (directe Wirkungen des Krankheits erregers) ト之レガ爲メニ起ス人身
 體ノ反應 (die Reaction des Organismus) トナス、
 人體組織上ニ及ボス病毒ノ勢力ニ付テ尙ホ數多不明ノ點アリ、彼ノ小
 體ノ體中ニ入ルヤ其發育ノ資トシテ組織中ヨリ一定ノ成分ヲ攝取ス
 ルハ疑ヒモナク、之レガ爲メニ人體ハ大ニ榮養ヲ害サレ、甚シキニ至レ
 バ其部壞疽ニ陥ルコトアリ、加フルニ組織間ニ存スル分解作用及ビ有機
 小體ヨリ生ズル化學的產物ハ一部ハ再ビ局部ヲ犯シ一部ハ全身ニ蔓
 延シ爲メニ中毒症狀ヲ呈スルニ至ル、
 此病毒ノ侵襲ニ對シテ人身體ノ呈スル反應ハ即チ熱ナリトス、此熱ハ
 病毒刺戟ノ反應ニ據ルヤ明ラカナリト雖モ偶然ニ又病毒ニ對スル人
 體ノ防禦作用 (Wehr-action) ニノ之ニ依テ病毒ヲシテ死ニ至ラシメ或ハ
 少クトモ無害タラシメ或ハ之ヲ體外ニ排除スルノ効アリ、其他人體ヲ
 構成スル生活アル細胞ハ病毒ヲ攝取シテ器械的ニ之ヲ體外へ輸出ス

ルノ働アリ、此事實ハ彼ノ化膿性脈衝ノ場合ニ於テ白血球ニ就テ屢々
 見ル所ナリ、
 如此病毒ニ感染シテヨリ直ニ病變ヲ起スハ或ハ病毒自箇ノ爲メカ又
 ハ人身體ノ之レガ爲メニ起ス反應ニ因ル者ニノ之ヲ稱シテ固有症狀
 ト云ヒ之ニ連接シテ組織ニ變化ヲ來スガ爲メニ生ズル症狀ヲ副症狀
 ト云フ此物ハ幸ニメ治癒ニ至ルトキハ全然或ハ其一部、原形ニ復スル
 モ不幸ノ場合ニ於テハ單ニ一部組織ノ壞死ニ止マラズ遂ニ全身體ノ
 生命ヲ失フニ至ル者ナリ、而シテ此副症狀ハ常ニ固有症狀ニ續發スル者
 ニアラズシテ病機ノ初メヨリ發生シ長ク持續シテ終ニ生命ヲ危クス
 ルコトアリ
 一ニノ疾病ニアリテハ其症狀及ビ經過トモ甚ダ種々ナルコトアリ多
 クハ急性傳染病ニ於テ見ル處ナレモ麻拉利亞諸病、有毒性潰瘍、膿漏性
 眼炎、梅毒、結核等ノ慢性病ニアリテモ亦屢々此事アリ急性傳染病ハ多
 クハ固有ノ經過ヲ有シ且ツ其經過中ニハ種々ノ期アリ之レ恐クハ病
 毒ノ發育ト人身體ノ反應トニ因テ起ル者ナラン加之急性傳染病ニハ

單型熱

熱ノ發生モ固有ナリ或ル傳染病ニアリテハ單ニ日晡體温ノ弛張スルノミニテ毫モ他ニ熱型ヲ混ゼザルアリ彼ノ麻疹ノ如キハ通例五乃至六日猩紅熱ニアリテハ六日發疹空扶斯ニアリテハ殆ンド十四日腸窒扶斯ニアリテハ殆ンド三週間ハ朝夕ノ昇降アルノミニシテ通例他ニ復雜ノ熱型ヲ呈セズ時ニ或ハ殆ンド常温ニ等シキ弛張ニ留マルコトモアリ如此熱型ヲ稱シテ單型熱ト云フ反之數種ノ熱型相集テ一箇ノ熱型ヲナス者アリ例令バ麻拉利亞諸病ノ如ク數日間或ル熱型ヲ呈シ一度無熱ノ間歇ヲ置テ再ビ一熱型ヲ初ムル者アリ彼ノ急性關節痲質斯若クハ肺炎ノ如キモ亦此類ニ屬スル者ナラン如此者ヲ稱シテ多型熱ト云フ時トシテハ二種以上ノ熱型集リテ其經過ノ速度ヲ更ニシ一熱型ノ發作終ラザルニ他熱型ノ發作初ルトキハ一見甚ダ不正ノ熱型ヲ呈スルコトアリ然レモ仔細ニ檢スルトキハ二種ノ熱型交互錯雜セラルヲ發見スベシ而シテ一回ノ罹病後免疫質ヲ得ルハ單型熱ノ傳染病ニ多ク數回反復犯サルハ多型熱ノ者ニ多シ

傳染病ノ轉歸ハ一ニ人身體ノ抵抗力如何ニ關ス抗抵弱キ者ハ直ニ不

多型熱

良ノ轉歸ヲ取り抗抵力强クシテ病毒ヲ體外ニ排除シ得ル者ハ其轉歸亦善良ナリ而シテ傳染病ノ經過中危險ト稱スベキハ病毒其者ノ害毒ヨリモ寧ロ正當防禦トシテ人體内ニ起ル反應即チ熱ニアリ熱ハ元來一方ヨリ云ヘバ有機小體ノ繁殖ニ向テ妨害ヲ加フル者ナリト雖モ同時ニ合主タル人身體ニモ害ヲ及ボス者ナルヲ以テ未ダ人體ノ抗抵衰ヒザル間ニ病毒ヲ撲滅スルヲ得バ人體ハ甚ダ安全ナレモ若シ之ニ反セザル場合ニ於テハ不幸之ニ過ギザルナリ故ニ此危險ノ度モ亦各人一定セズ甲ノ人未ダ安全ナル熱度ニ於テ乙ノ患者ハ既ニ死亡スルコトアリ之ヲ以テ轉歸危險モ一ニ人體ノ抵抗力如何ト熱ノ持長ノ長短ニ關スト云ハザル可ラズ

又病毒既ニ消滅セル後嘗テ病毒ノ爲メニ犯サレタル組織ノ變化ニ依テ更ニ危害ヲ來スコトアリ假令バ腸窒扶斯赤痢等ニ於テ固有ノ疾病ハ既ニ經過シ去ルモ尙ホ嘗テ病毒ノト位セル腸粘膜ニ潰瘍ヲ遺セルガ爲メ榮養復舊セズ危殆ヲ加フルガ如ク又彼ノ猩紅熱後ニ生ズル腎臟炎實扶的里後ノ局那麻痺ノ如キ皆然リ

傳染病ノ症候ハ概シテ激烈ニシテ多クノ場合ニハ完備スル者ナレバ時シテハ其幾部ヲ缺キ又ハ全ク症狀ヲ呈セザルヲ尠カラズ其然ル所以ハ或ハ病毒ノ量ノ不足ナルニ因スルカ或ハ個人的素因ノ少キニ基クカ言明シ得ベキ限リニアラズ例之バ甲乙同棲シテ甲ハ重キ痘瘡ニ罹リ乙ハ輕キヲ患ヒ乙亦丙ニ傳テ丙ハ重キ痘瘡トナルガ如キ又虎列拉ノ如キモ異性虎列拉ヲ患フル者ヨリ同シク傳染セル者ニテモ虎列拉下痢若シクハ類似虎列拉ニテ終ル者モアリ又一ハ腸室扶斯ニ罹リ一ハ不全室扶斯ニ罹ル等例ヲ求ムレバ揚グルニ違アラズ而ノ前章分類ノ條下ニ述ベタルガ如ク近時病理解剖學ノ進歩セルガ故ニ假令ヒ其症候ハ全ク異ナルガ如ク思惟サル、モ尙ホ原因ニ於テ一致スレバ病ノ輕重症候ノ激否ヲ問ハズ皆同一類ニ算入スルモ昔時ハ單ニ症候ヲ以テ區別セルガ故ニ虎列拉ノ輕キ者ハ腸加答兒中ニ腸室扶斯ノ輕症ノ者ハ胃熱ト稱シタル程ナリシナリ、

上記ノ如ク眞性ト云ヒ不全ト云フモ其疾病ヲ起ス根原タル病毒ハ相一致セル者ナレモ茲ニ不然ル者アリ即チ其根原タル病毒全ク異ニシ

テ而シテ外觀上稍相似タル者アリ假令バ痘瘡ト假痘、麻疹ト紅斑、亞細虎列拉ト歐羅巴虎列拉、腸室扶斯、腸加答兒、黃熱ト流行性黃疸、神經衰弱性肺炎ト危險少キ通例ノ肺炎等ノ如ク外觀酷似シテ而シテ眞因ノ全ク異ナリタル者はレナリ如此者ヲ稱シテ相似型疾病 (Parallelform) ト云フ

是等ノ相似型ハ數多ノ疾病ニ於テ目撃スル所ニシテ之ヲ以テ單ニ一ヶ偶然ノ現象ト看過スベキ者カ將タ其相似兩病ノ間ニ關係アルモノナルカ普通ノ見解ヲ以テスレバ或ハ其病毒ハ同種類中ノ異屬ニノ元來ハ同一物ナリシモ其發育ノ經過中ニ變化シテ他ニ一異物ヲナセルニハアラザルカト想像シ得レバ然レモ亦茲ニ爭フ可ラザルヲアリ假令ヒ其根原ニ溯ラバ同一物ナリシ時代ハアリシト云ヒ既ニ判然異種類トナリシ今日ニ於テハ決シテ甲ヨリ乙ニ若シクハ乙ヨリ甲ニ變形スルヲ得ズ即チ甲ニ罹リシ者ヨリ他ニ乙トナツテ傳染シ又ハ之ニ反セルヲハ理論ニ於テモナク事實ニ於テモ決シテ之レナシ之ヲ譬フレバ馬ト驢馬トハ甚ダ相似タレモ馬ヨリ驢馬ノ生ゼザルニ同シ

第六 療法一般

既ニ前條諸項ニ於テ述ベタルガ如ク傳染病ハ一種固有ノ細菌ニ依テ生ズル者ニシテ其性狀形態モ亦一二ヲ除クノ他盡ク明カトナルヲ以テ近時治療學ハ從テ一變化ヲ來シタリ彼ノ細菌學ノ思想乏シカリシ昔時ニ於テハ病院丹毒、產褥熱等ハ遂ニ免ル可ラザル者ト迄想像サレ之ニ罹ル者ノ不幸ニシテ罹ラザル者ハ寧ロ僥倖ト思惟セシガ如キ有様ナリシモリステル氏ノ消毒法一ト度出デ、是等ノ迷夢ヲ一掃シ罹病死亡共ニ大ニ數ヲ減ジタリ其後各種疾病ニ就テ各其固有病毒ノ發見サル、ニ至テ又臨床醫師ハ之レガ治療法ヲ講究シ殊ニエル、コッホ氏ノ如キハ斯道ニ尠ナカラザル利益ヲ與ヒ血清療法依テ以テ全キヲ得タリ

傳染病ノ治療法中尤モ有効ニシ且ツ必要ナルハ豫防法ニアリ宇宙ニ散在セル病原菌ハ無數ナリ如何ニ之ヲ撲滅セントスルモ到底及ブ可ラズ之ニ於テカ塚ヲ深フシ壁ヲ厚フシテ防禦ノ策出ヅ即チ外界ノ毒ハ滅ス可ラザルヲ以テ之ガ進入ヲ避ントスルニアリ

豫防ノ法トハ何ゾヤ一言ニシ之ヲ云ヘバ公衆衛生ト個人衛生ノ嚴守ニアリ家屋ヲ清潔ニシ通氣ヲ完フシ日光ノ射入ヲ良クシ溝渠ヲ疎通セシメテ下水ノ滯溜ヲ防ギ建築ニ注意シテ井水ヲ不潔ナラシメザル等是レ即チ公衆衛生ノ務ムル所ナリ個人衛生トハ各自攝生ヲ守リ消化機能ヲ健全ニシ身體皮膚ノ清潔ヲ務メ精神ノ安養ヲ得セシムル等之レナリ然レモ此ニツノ者ハ行フニ當テ必ず完備ヲ期セザル可ラズ其主趣ヲ誤テ之ヲ行ハ、却テ行ハザルノ優レルヲアリ床下ノ清潔便所ノ掃除消毒等ニ至テハ往々誤解ノ甚シキ者アリ田舎ト云ハズ既ニ文明市街ニ於テ便所ヲ消毒スルニ當テ糞壺ニハ一滴ノ石灰乳ナクノ外圍ノ壁板戸扉等ニ白斑點々タルヲ見又便所ノ外圍ハ甚ダ清潔ニ掃除サレアルニ拘ハラズ跨床糞壺ノ周圍等ノ少シモ手ヲ觸レラザルヲ目撃スルヲアリ殊更ニ資ヲ投シ人ヲ雇フテ之レガ監視ヲナサシムル事業ニシテ既ニ如此未ダ公衆衛生ノ何物タルヲ辨セズ將タ公衆衛生トハ己レノ爲メニスル者ナルカ人ノ爲ニメスル者ナルカヲモ知ラザ

ル村落ノ住民ニ至テハ其清潔方法ヲ知ラザル寧ロ至當ト云フ可キノ
 ミ夫レ然リ余ガ所謂清潔方法トハ如此者ヲ云フニアラズ外ハ病毒ノ
 叢窟ヲ除キ其潜伏繁殖ニ耐ヘザラシメ内ハ各自々衛シテ其進入ヲ防
 ギ以テ終ニハ撲滅ニ歸セシムルヲ希圖スルニアリ如此ナレバ假令ヒ
 一二病者ノ發生ニ遇フモ其病毒ハ生存ニ處ナク傳染スルニ途ナキヲ
 得ン彼ノ英國ヲ見ヨ外國ニ傳染病ノ流行地アリ其地方ヨリ發セル船
 舶ノ英國港灣ニ入港スルコトアルモ敢テ他外國ノ如ク交通遮斷等ヲ行
 ハズ固ヨリ余ハ之ヲ以テ善事トハ認メズ英國ト雖モ快事トハナサハ
 ルベク商業ノ利益上不得巳斯ル方法ヲ設ケザル者ナルベキモ内公私
 ノ衛生ニ注意シ外ニ向テ毅然トシテ畏レザル態度ヲ示ス所以ノ者ハ
 多少恃ム處ナクンバアラズ余ハ其方法ハ是認セザレモ内ニ完美セル
 衛生事業ノ實行サレツ、アルヲ羨望スルモノナリ翻テ之ヲ現ニ東洋
 諸國ノ如キ衛生事業ノ完備セザル邦國ニ就テ見ンカ下水上水ノ完成
 セル處果シテ幾何カアル家屋道路ノ整頓セル處數フルニ足ルカ然モ
 如此邦國ニアリテ其一般人民ノ智識發達セザル前條ノ如ク清潔法ト

ハ等目ヲ地面ニ印スル者消毒法トハ處ヲ撰バズ消毒藥ヲ撒布スル者
 ナリト誤解スルアルニ至テハ一朝傳染病ノ流行ニ遇ハ、如何ニシテ
 カ枕ヲ高フシテ業ニ安ンズルヲ得ン公衆衛生ハ住民一般ニ相待テ行
 ハザレバ其効ナキコト尙獨リ自ラ火ノ用心ヲ嚴重ニスルモ相隣不注意
 ニノ類焼ノ厄ニ罹ルコトアルガ如シ公衆衛生ノ實行豈ニ警シメザル可
 ケンヤ

常在性ノ病毒ヲ撲滅スルニハ即チ清潔法ヲ最良トシ一地方ニ限局シ
 テ流行スル傳染病ニ付テ豫防セント欲セバ交通遮斷法(Quarantine
 method)ヲ施行スルニ如カズ交通遮斷トハ字ノ現ハスガ如ク凡テ流行地
 ヨリ來ル貨物旅客ニ就テ消毒法ヲ行ヒ一定ノ期日ヲ經ルニ非ラザレ
 バ通過ヲ許サ、ルナリ之ニ海陸ノ區別アリ海上ニ於テ施行スル者ハ
 船舶檢疫法ニシテ此法ハ確實ニ其効ヲ奏ス然レモ陸上ノ遮斷法ハ往
 々有名無實ニ流レ易シ是亦一般人民ノ智識發達セザルニモ因スレモ
 商業上若シクハ生存上大影響ヲ及ボスヲ以テ一理ナシト言ヒ難ク從
 テ其實施ハ甚ダ困難ナリ先ヅ例セバ甲ノ村落ニ某傳染病流行シ乙ノ

村落ニ於テ甲村ト交通遮斷ヲ施行シタリトセンニ例令ヒ交通遮斷セリトテ生存必須ノ物品ヲ供給セザルヲ得ズ其村落境界ニハ衛生委員ナル者アツテ一々身體ヲ検査シ異常アル者ハ越ユルヲ許サズトセン然ルニ此事甚ダ疑ハシ假令ハ腸窒扶斯流行セリトセンニ其境ヲ出ツル者既ニ傳染シ來ルモ一見壯健ノ容貌ヲ有スルトキハ委員ノ關ヲ通過スベキモ一定ノ潜伏期日過ギテ後發病セバ如何罪ノ歸スベキ所ニ苦シムニアラザルカ如何ニ名醫卓越ノ士ト雖モ傳染病ノ潜伏期ノ初メニ於テ既ニ疑ヲ置クハ難カルベシ況ンヤ住民ノ無智ナル委員ノ配賦ナキ間道ヲ通行スル者モ多クアラシク要スルニ陸上遮斷法ハ到底完全ニ行フヲ得ズ

余ハ各傳染病ニ就テノ療法ハ各論ニ於テ述ブルヲ以テ茲ニハ其概要ヲ記スルニ止マル今消毒法ノ二三ヲ畧述セン之レ又一種ノ豫防法ニ屬ス

消毒法

消毒法ヲ記載スルニ先チ之レガ本源タル細菌研究ノ方法ヲ略述セン此事タルヤ固ヨリ専門諸家ノ爲メニスルニアラズシテ日常臨床治療ニ從事サル、醫師ノ爲メニスル者ナレバ務メテ實地ノ應用ニ便セントニ注意シ假令ヒ完美ナル方法器具アリト雖モ到底少數團體若シクハ一箇人ノ經濟ヲ以テ經營シ能ハザル者ハ省キタリ之ヲ了セラレンコトヲ望ム

抑モ今日日進醫學ヲ攻究シ學理ニ訴ヘテ診斷ヲ下スニ至テハ多忙ナル開業醫ト雖モ亦細菌業室ノ設備ナカル可ラズ學理ニ訴ヘザルノ診斷ハ確實ナラズシテ確實ナラザルノ疾病ニ藥ヲ投ズルハ危フシ是ニ於テカ學理研究ニ必要ナル諸種ノ裝置ヲ要スルハ多言ヲ要セザルナリ殊ニ傳染病ノ如キニ至テハ確診ヲ得ザレバ豫後ノ良否ニ大關係ヲ及ボスガ故ニ少クトモ多少ノ裝置ハ希望ニ耐ヘザルナリ今左ニ業室ニ要スル器具ヲ列記シテ參考ニ供ス

一顯微鏡

通常ノ研究用トシテハ六百倍ニテ足レリツァイスヲ探ルモライツヲ探ルモ

顯微鏡

各其好ミニ從テ可ナリ顯微鏡ニテ不染標本ヲ檢セント欲セバ平板反射鏡ヲ用ヒ調光器ハ可成細キ穴ヲ使用スベシ懸滴標本亦同シ且ツ一般ニ顯微鏡ヲ使用スルニ當テハ窓ヨリ稍遠ザカリ輝灼光線ノ直入ヲ防グベシ硝子窓ナレバ窓掛ヲ垂レテ檢スルヲ可ナリトス又染色標本ヲ檢スル場合ニハ不染標本ノ時ニ反シ反射鏡ハ四面ナルヲ用ヒ調光器ハ全ク除キ置クベシ而シテ不染ニテモ染色ニテモ之ヲ見ル前ニ一反弱度ノ接物レンズヲ以テシテ一般ノ狀況ヲ檢シ後強度ノレンズヲ交換フ可シ強度ノレンズニテ見ルトキハ先ヅ螺旋ヲ用ヒズシテ外方ヨリ眺メテナガラ尤モ下方ニテ始メテ蓋硝子ト接セシトスル迄下ゲ後接物レンズヲノゾキナガラ螺旋ヲ廻シ漸次接物レンズヲ上ゲツル標本ノ明視サルハニ至ルベシ殊ニ初學者ニアリテ初メヨリ接物レンズヲ注視シナガラ螺旋ヲ以テ圓筒ヲ下方ニ下ストキハ時トシテ接物レンズノ蓋硝子ニ密接セルヲ知ラズ遠ニ之ヲ破碎スルコアリ故ニ上ノ如クスレバ安全ナリトス顯微鏡ヲ使用シ終ラバ清掃ヲ怠ル可ラズ即チ揉皮又ハ柔カキ綿布ニテヨク硝子面ヲ拭ヒ若シ特別ニ製セル青色硝子筒アラバ之レニテ覆ヒ然ラザルトキハ箱ニ納メ置クベシ金屬類ハ亞爾個保兒ニテ拭フ可ラズ斑點ヲ生シテ美觀ヲ損ス載物硝子板及ビ蓋硝子板ハ亞爾個保兒ト安母尼亞等分ノ液ニテ洗ヒ若シ加奈多坡爾尼誤ニ

方形硝子板及蓋鐘
銅線製又ハ鐵板製載物硝子板蓋
標紙
酒精燈
標本箱
水瓶



テ閉ザタル者ヲ洗ヒ落サント欲セバ「キシロール」又ハ「ククロ」ホルムニテスベシ如此シテ硝子類ハ常ニ清潔ニ保存スルヲ要ス

第一圖 方形硝子板及蓋鐘 硝子板ハ十五仙米平方位ノ者ニシテ標本ヲ載スルニ使用スル者ナリ蓋鐘ハ其上ヲ覆フテ塵芥ノ降下ヲ防グ

銅線製又ハ鐵板製載物硝子板蓋 圖ノ如キ者ニシテ其用途ハ前ノ者ト同シ(第一圖)

標紙 製造年月標本ノ名稱等ヲ記入スルニ用フ

酒精燈 標本箱 圖ノ如キ者ヲ製シ系統ニ從テ裝入セバ後日ノ點檢ニ至便ナリトス(第二圖)

水瓶 普通ノ水ヲ盛リ諸種ノ洗滌ニ供ス

洗手用刷毛手拭、
千倍昇汞、石炭酸
水、ソール液

壓潰管ヲ有セル水瓶 蒸餾水ヲ盛り標本洗滌ニ用フ
洗手用刷毛手拭千倍昇汞水石炭酸水五%ソール液 是レ皆檢者ノ
消毒用ニ供ス

硝子管固定器

硝子管固定器 圖ノ如ク

煮鍋及其蓋

煮鍋及其蓋

諸種ノ器

諸種ノ器 酒精酸類等ノ
貯蓄ニ用フ

色素用器及其容器

色素用器及其容器 圖ノ如キ者ヲ最モ便トス如此ナレバ一々方々ヲ
探スノ煩ナシ一瓶凡ソ五〇〇ヲ容ル(第四圖)

硝子棒及硝子管

硝子棒及硝子管

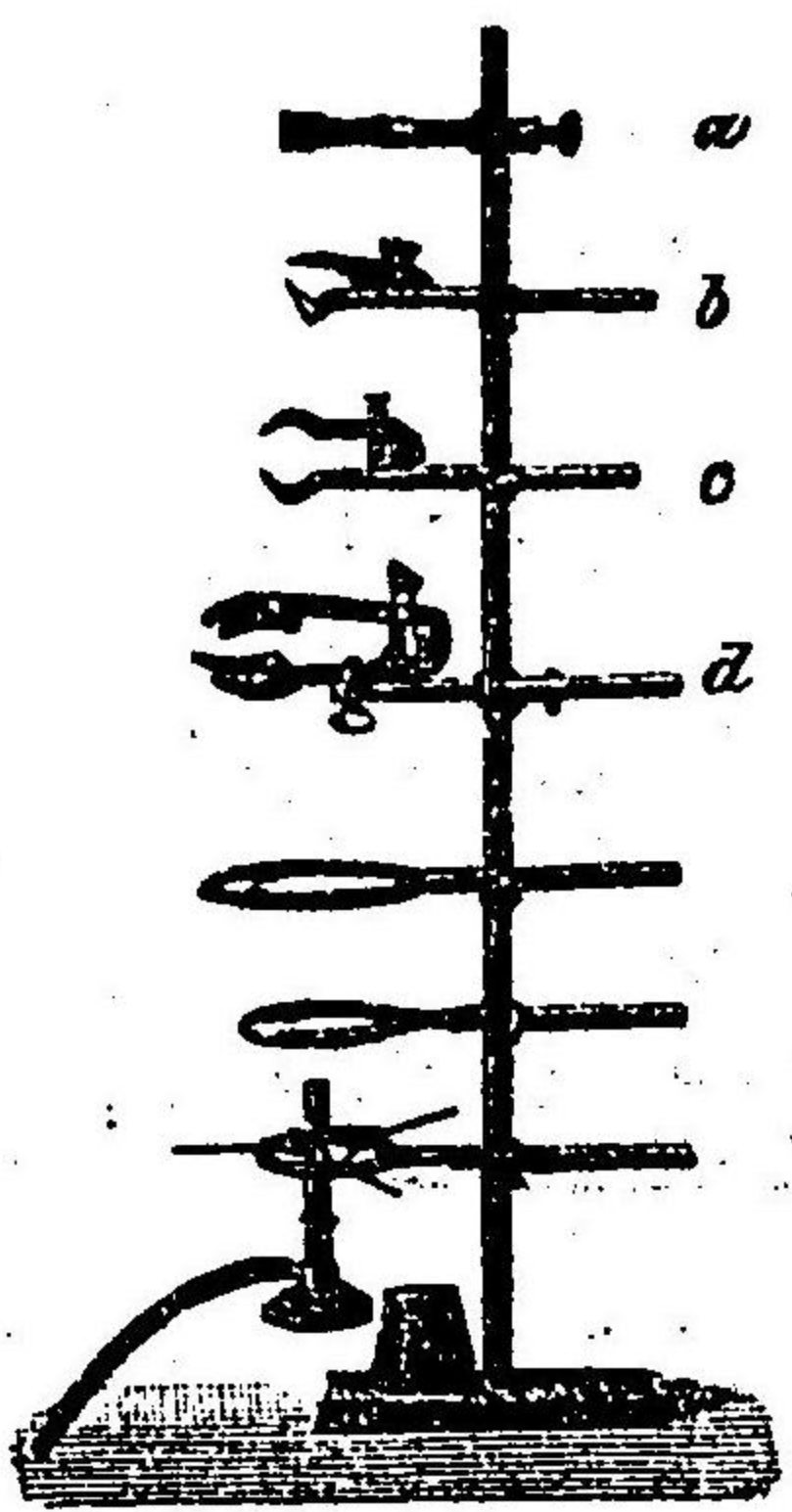
漏斗

漏斗(硝子製)

陶製蒸發皿

陶製蒸發皿 五乃至十六仙米直徑ノ者

第三圖



乳鉢及乳棒

乳鉢及乳棒 大凡十仙米

エルレンマイエル
氏瓶

ノ直徑アル者
エルレンマイエル氏瓶五

煮沸用瓶

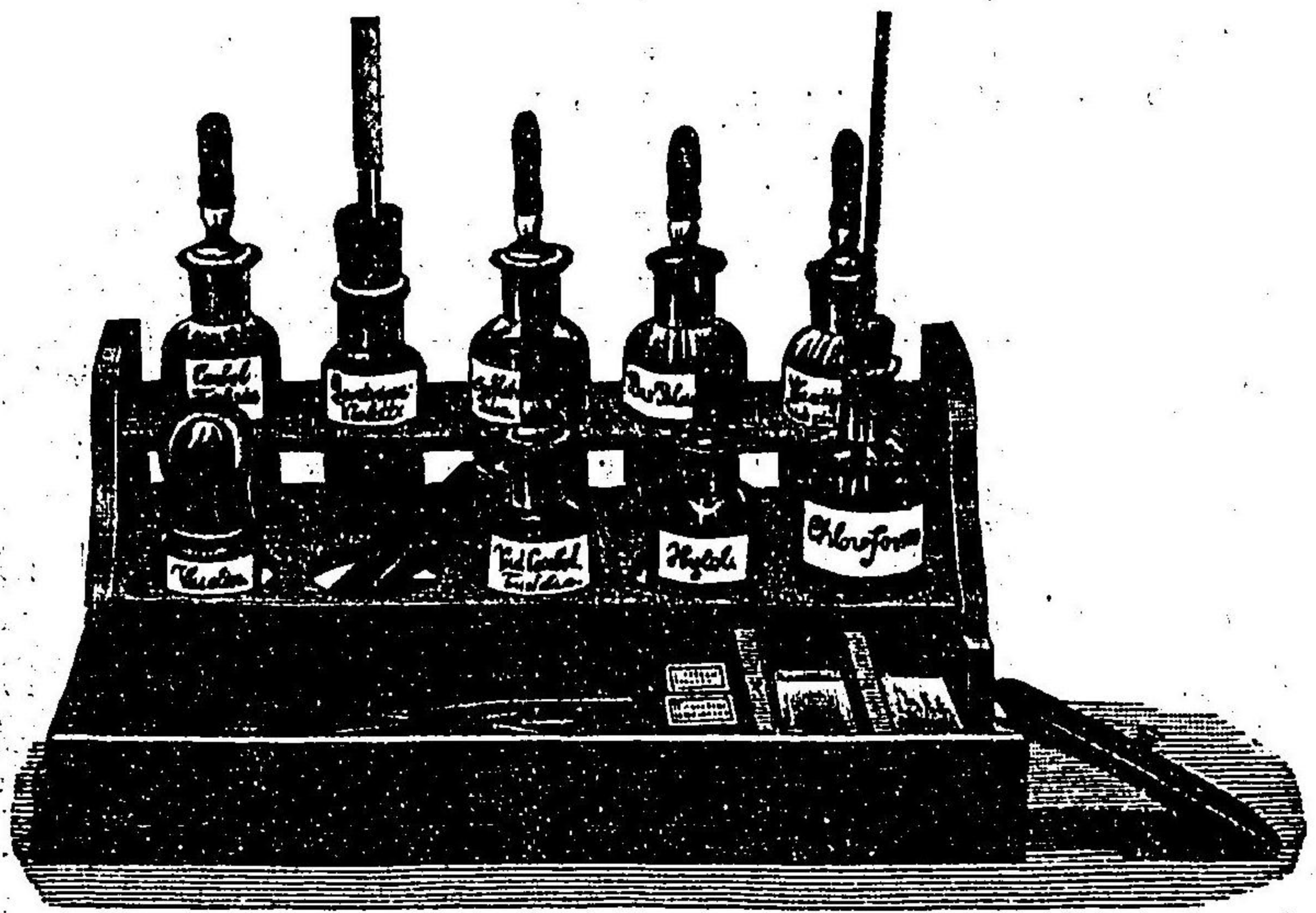
十及百立方仙米ノ内容
アル者各數箇(第五圖)

斗量用瓶

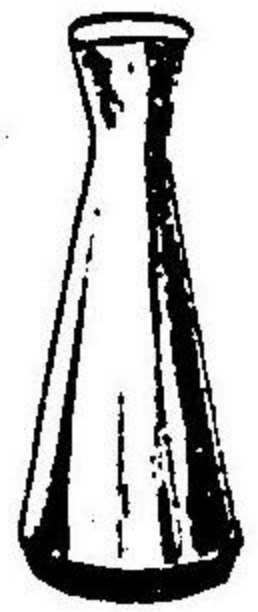
煮沸用瓶 百、三百、五百立
方仙米ノ内容アル者各
數箇

斗量用瓶 細頸ヲ有セル
瓶ニシテ一定ノ處ニ硝
子ヲ摩リ輪狀ノ記標ヲ

第四圖

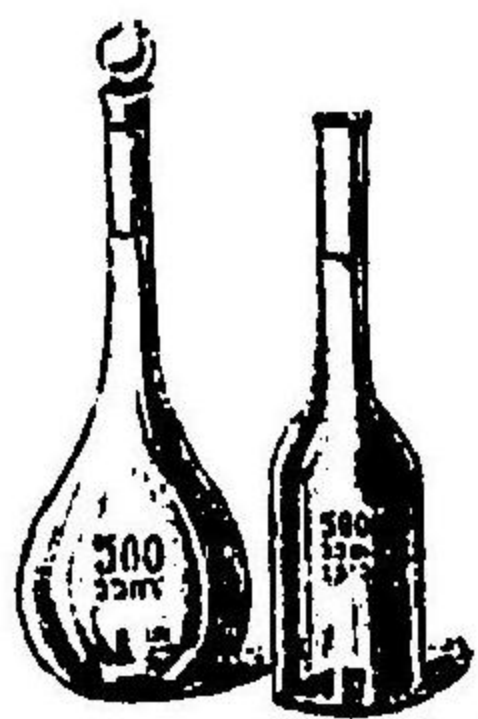


圖五第



附ス尙綿密ニ量ヲ斗ラント欲セバストマ
ン氏ノ瓶ヲ良トス圖中aハ普通ノ斗量瓶
ヲ示シbハストマン氏瓶ヲ示ス(第六圖)

圖六第



「ビュレット」通常使用スル者ニハ此末端ニ護
膜管ヲ附シ之ニ壓潰嘴管ヲ箱入セル者ナ
レモ詳細ノ試験ニ供スルニハ護膜管ニ換

フルニ嘴管ヲ有スル硝子管ヲ附セルヲ良トス而ノ其内容ハ五十仙
米ニシテ少クトモ二本ナカル可ラズ

秤器 普通ノ者及ビ化學用秤器ヲ要ス

寒暖計 固ヨリ攝氏ノ者ニシテ二分一度ヲ劃セル者ヲ用フ可シ

錐子 普通解剖等ニ用フル者及ヒ固定錐子(圖b)コルネット錐子(圖c)等

ヲ要スコルネット錐子ハ標本ヲ染色スル場合ニ多ク用フ(第七圖)

筐 組織片ヲ載セ又ハ細菌培養ノ際塵芥等ヲ載スルニ用フ

「スカルベル」及ビ剪 是レ又組織片ノ細斷ニ供ス

白金針及ビ白金輪 是レ咯痰等ノ検査ニ際シ蓋硝子ニ塗擦スル等ニ

「ビュレット」

秤器

寒暖計

錐子

「スカルベル」

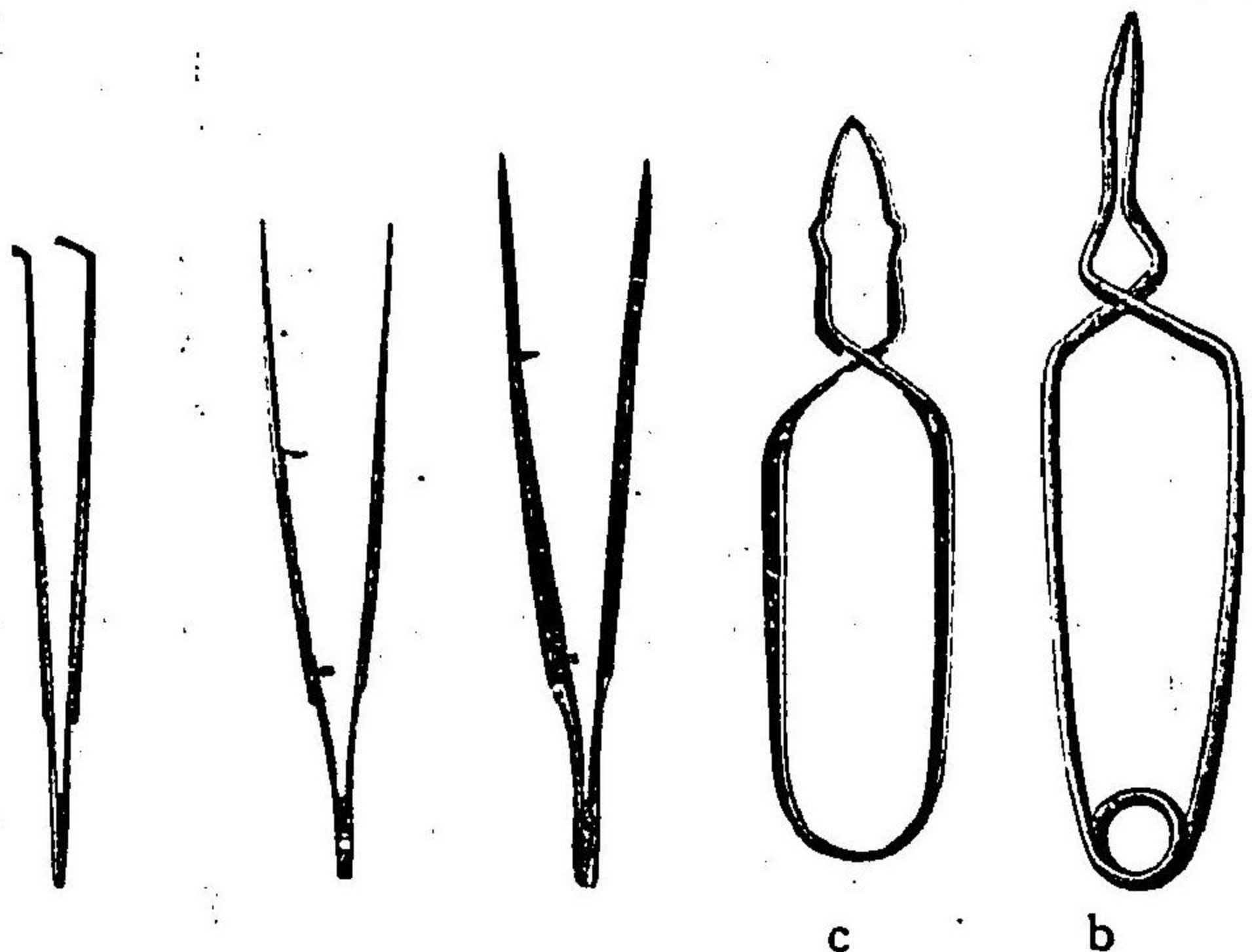
白金針

護膜栓、護膜帽、護
膜管

「パラフィン」

赤色及青色試験紙

圖 七 第



用フ

護膜栓護膜帽護膜管 甲

ハ前圖ニテモ見タル如

ク色素瓶ノ栓塞等ニ用

ヒ乙ハ試験管ニ綿栓セ

ル場合ニ直上ヲ覆ヘテ

空氣ノ流通ヲ防グ等ノ

用ニ供ス

「パラフィン」是レ又瓶口ニ

塗り空氣ノ竄入ヲ防グ

ナリ

赤色及青色試験紙

固ヨリ完全ニアラザルハ

前條述べタルガ如キ理由

ニ據ルモ業室トシテ作業

懸滴検査法

ニ支障ヲ來ササル迄ニハ少クトモ前記諸品ヲ備附ケサルベカラズ以下序ヲ追フテ細究攻究ノ方法ヲ略記セン

懸滴検査法 此検査ハ有機小體ノ生存中ニ於ケル運動其他ノ狀態ヲ見ルヲ主トスル者ニシテ之ニ要スル載物硝子板ハ中央ニ十五密米ノ直徑ト同長ノ深サアル四角ヲ有セリ先ツ検査ヲ行ハントスルニハ前項諸器具ノ條下ニ述ベタル如キ硝子瓶ヲ清潔ニシ載物硝子板ノ四處ノ周圍ニワゼリンヲ塗り次ニ覆蓋硝子板ニ消毒セル白金線ニテ有機小體ヲ含メル液ヲ注意シテ其中央ニ滴シ(若シ純粹培養等ヨリ滴出セル時ノ如ク可檢體液狀ナラザルトキハ初メニ覆蓋硝子ニ蒸溜水ノ一滴ヲ滴シ之ニ白金線ヲ以テ可檢體ヲ入レ静ニ且ツ注意シテ初メト位セル蒸溜水滴ノ大サヨリ擴ガラザル様ニ混ズ)覆蓋硝子板ヲ兩指間ニ摘ミ急ニ之ヲ倒ニシ静ニ載物硝子板上ニ載ス此際液滴ト四角ノ底部ト相接セザル様注意スベシ如此裝置シ終ラバ顯微鏡ニ掛ケ初メ中等ノ弱度ニテ檢シ其液滴ノ周縁ヲ見出シ之ヲ恰モ視野ノ正中ニ來ル如クシテ後強度ノ接物レンズト交換スベシ

染色法

染色法

簡單ニ其順序ヲ列記スレバ左ノ如シ

- 一、可檢物ノ塗布 此時可成注意シテ厚カラザル様又一様ノ厚サニナル様ニスベシ屢々實驗スル如ク此際可檢物ノ多クハ覆蓋硝子板ノ邊縁ニノミ附着スルコトアリ然ルトキハ其部分ノミ層厚クシテ見難キガ故ニ如此ナラザル様注意スベシ
- 二 空氣中ニ於テ乾燥セシム
- 三 火焰中ヲ三回通常セシメ可檢物ヲ覆蓋硝子板ニ固着セシム
- 四 色素ニテ染ム (其詳細ナルコトハ次項ニアリ)
- 五 水ニテ洗フ 茲ニ又注意スヘキコトアリ不注意ナル者ハ強キ水線ヲ可檢物ノ附着セル面ニ灌ギ掛ケルガ故ニ時トシテ翳取ラルト恐レアリ此故ニ先ツ最初裏面ヨリ水ヲ注ギ掛ケ氣長ク洗フ如此スルトモ裏面ニ溢レンシ水ハ表面ニ廻リテ充分餘計ノ色素ヲ洗ヒ落スニ餘リアリ又ハイム氏ハ如此水ニ洗フ間ニ一回五十乃至六十%ノ酒精液中ニ一秒時間入レ直ニ水ニテ洗フコトヲ常用セリ

六

濾過紙ヲ以テ水ヲ拭フ 但シ覆蓋硝子板ハ唯可檢物ノ附着セザル處ノミ濾過紙ニテ拭フ可シ

色素ノ調製

七 覆蓋硝子板ヲ載物硝子板上ニ置ク
 八 顯微鏡下ニテ檢ス若シ目的トセル者ヲ得之ヲ永ク貯ヘント欲セバ
 九 水ヲ乾燥セシム
 十 「キシロールカナダバルサム」ニテ固定シ且ツ標記ス
 色素ノ調製 色素ハ重ニ亞尼林屬ノ者ヲ用フ之レニハ鹽基性ト酸性
 トアリ「メチレン青」格魯兒比奴林青「沙布羅仁」フクシン「ダーリア」ルビ
 「結晶ピオレット」B「メーレン青」ゲンチアナピオレット「ビクトリア
 青」メチール綠「アウラミン」ビスマルク褐色「ウエスウキン」等ハ甲ニ屬シ「フ
 ルオレスレン」エオシン「フロキシシン紅」アウランチア「ニグロシン」酸
 性フクジン「酸性ピオレット」ペンツェブルプリン「トロペオリン」コンゴ
 ー等ハ乙ニ屬ス
 是等ハ皆粉狀ニシテ或ハ瓶或ハ罐ニ貯ヒラレ用ニ望デ使用スル者ナ
 リ又豫メ稠厚ナル亞爾箇保兒液トナシテ貯ヒ置ケバ尤モ便ナリトス
 即チ
 「フクシン」 一五〇 酒精 一〇〇〇
 「メチーレン青」 五〇 同 一〇〇〇
 「ゲンチアナピオレット」 七〇 同 一〇〇〇

媒染劑

レフレル氏液

而ノ是等ノ色素ハ各人ノ好ミニ從テ其選擇ヲ異ニスレ「フクシン」ハ
 虎列拉菌、螺旋蟲、鼠敗血症ノ病菌等ヲ染ムルニ便ニシテ「メチーレン青」
 ハ細胞核等ヲ染ムルニ適スレ「一」ノ不利ナル「ハ」時日ヲ經ルニ從テ
 褪色スルヲ以テ永久ノ標本トナシ難キニアリ
 色素ノ染色力ヲ強ムルニハ亞爾箇保兒液ヲ加フルナリ是レコツホ氏ノ創
 意ニ出テタル所ニシテ氏ノ液ハ濃厚メチーレン青ノ亞爾箇保兒溶液
 ○五立方仙米ヲ一萬倍ノ加里滴液百立方仙米ニ混ジタル者ナリ後レ
 フレレ氏之ヲ改メ濃厚メチーレン青液ノ量ヲ三十立方仙米トナセリ
 今簡單ニレフレル氏液ノ製法ヲ云ハンニ初メ最モ注意シテ水酸化加爾母
 引或ハ那度爾母ヲ取出シテ之ヲ秤リ此者ハ極メテ水分ヲ引キ易キ者ナレバ

チール氏液

必ズシモ都合ヨキ量ヲ取出ス可ハズ故ニ幾何ニテモ取出シタル丈ケニ
テ比例ヲ作ルベシ假令ハ三、七、五、アリタリトスレバ普ク煮沸シテ全ク中性
ナル蒸留水三十七立方仙迷ヲ加ヒ此液(一〇%)ヲ液量計ニ五立方仙迷取
リ之ニ中性蒸留水四十五立方仙迷ヲ加フ然ルトキハ一%ノ液トナルナリ
此ノ如クシ全液ヲ皆此割合トナシ此液一立方仙迷ヲ又液量計ニ入レ之ニ
九十九立方仙迷ノ中性蒸留水ヲ加フルトキハ即チ一萬倍ノ加里濃液ヲ得
此ニ於テ之ニ濃厚メチーレン青ノ亞爾個保兒液三十立方仙迷ヲ加フルナ
リ此液ハ一ヶ月間ハ其効ヲ持續ス

石炭酸モ亦染色力ヲ強ムル働キアリチール氏ノ石炭酸フクシン液ト
ハ左ノ如シ

「フクシン」

一〇

亞爾個保兒

一〇立方仙米

溶解石炭酸

五、五立方仙米

蒸留水

八四、五立方仙米

此液ヲ二十四時間其儘放置シタル後使用ス此液ニテ細菌ヲ染ムルト
キハ染色甚ダ速カナルヲ以テ尋常液ノ如ク長時間浸シ置ク可ラズ若
シ同時ニ他ノ作業ニ從事シ多少長時間染色シ置ク必要アルトキハ之

石炭酸メチーレン青液

ヲ稀釋スベシ即チ若シ二倍ノ水ヲ加フルトキハ殆ンド二十秒時間ヲ
要シ又十倍若クハ二十倍ノ水ヲ加フルトキハ五分乃至十五分間液中
ニ浸シ置クモ可ナリ

キニー氏ノ實用スル石炭酸メチーレン青液トハ

「メチーレン青」

一、五

亞爾個保兒

一〇〇

右ノ混和液ヲ乳鉢中ニテ靜カニ攪キ混ゼナガラ注意シテ徐々ニ

五%石炭酸液

一〇〇〇

ヲ加ヒテ製スルナリ

右ハ一般ニ使用スル染色液ヲ記載シタルニ過ギザレモ各細菌ニ固有
セル者ハ其條下ニ詳論セン

培養基製造法

第一肉汁

之レニ要スル器具ハ計量器、イマイル氏有蓋鍋、ペプトン、食鹽、秤器、攪拌棒、蒸
沸装置、石棉板、成規濾汁、ピウレンツト、ラクムス紙、漏斗、玻璃瓶、試験管、蒸氣沸
鍋、鷄卵、等ナリ

培養基製造法
肉汁

以上ノ器具ヲ以テ着手スル順序ヲ記載スレバ

第一之ニ用フル肉ノ種類ハ敢テ制限アルニアラズ、牛、馬、兔、モルモット、鳥、等ノ種類ハ何レヲ用フルモ不可ナルヲナシト雖モ通例初メノ一種類ヲ用フ是レ求メ易キノ利アレバナリ、渾テ肉ハ何肉ヲ問ハズ新鮮ナラザル可ラズ、若シ凍ルカ又ハ腐敗ニ傾ケルトキハ除ク可ラザル混濁ヲ生ズル者ナリ、器具ハ固ヨリ清潔ナラザル可ラザルハ前條數々述ベタルガ如シ先ヅ肉ノ中ヨリ骨、髓、脂肪、等ヲ可成丁寧ニ取去リ之ヲ細挫シテ目方ニ掛ケ後大ナル玻璃器中ニ入レ之ニ倍量ノ蒸溜水ヲ加ヘ能ク混和シテ半時間乃至一時間煮沸シ後全ク冷却スルニ至テ濾過ス

第二此濾過セル肉汁千立方仙米ヲイマイル氏鍋ニ入レ之ニ乾燥セル一ペプトン十瓦食鹽五瓦トヲ加フ

第三之ヲ蒸氣装置ヲ以テ沸騰スル迄煮沸ス

第四之ニ成規那止倫濾液或ハ加里濾液少許ヲ加ヘテ中性ニス

第五之ニ成規ノ曹達液十方仙米ヲ加ヘテ亞爾加里性トナス

第六此液ヲ又蒸氣装置ニ依テ二時間煮沸ス

第七後濕シタル漏斗ヲ以テ之ヲ濾ス

第八液ヲ再ビ計リ若シ初メノ量ヨリ不足セシトキハ蒸溜水ヲ加ヘテ原量ノ如クス

第九精細ニ混濁ノ有無ヲ檢ス

第十若シ全ク澄明トナレバ之ヲ蒸氣装置中ニ一時間入レテ消毒ス

「ゲラチン」培養基

第一「ゲラチン」培養液

之ニ要スル器具ハ肉汁ノ條下ニ於テ掲ゲタル者ニ同シ、唯夫等ノ他ニ「ゲラチン」重煎湯、溫暖装置ヲ有スル漏斗、等ヲ要スル

其着手スル順序ハ左ノ如シ

第一肉汁千立方仙迷ヲイマイル氏鍋ニ取リ

第二之ニ一ペプトン二〇〇食鹽一五〇「ゲラチン」二〇〇ヲ加フ

第三之ノ混合液ヲ重煎湯ニ掛ケテ漸次温メ且ツ時々攪拌シテ溶解スルニ至ル

第四成規ノ那止倫濾液或ハ加里濾液ヲ加ヘテ中性トナス

第五半時間乃至一時間蒸氣裝置ニテ煮沸ス

第六再ビ中性反應ヲ驗シ若シ中性ナラザルハ又成規ノ加里或ハ那止倫瀉液ヲ加フ

第七之ニ成規ノ曹達液十立方仙迷ヲ加ヘテ亞爾加里性トナス

第八此液ヲ又半時間乃至一時間蒸氣裝置ヲ以テ煮沸ス

第九後之ヲ濾過ス若シ少シニテモ混濁スルトキハ再三濾過スベシ

第十若シ全ク透明トナルトキハ之ヲ試驗管ニ分配ス

第十一此各試驗管ヲ蒸氣裝置中ニ入レ十五分間沸騰點ニ達シテヨリ放置シ以テ消毒ス

寒天培養基

第三 寒天培養基

之ニ要スル器具ハ「ゲラチン」ヲ時用ロシ者ノ他唯寒天ヲ要スルノミ着手ノ順序ハ

第一肉汁千立方仙迷ヲ「イマイル」氏鍋ニ取り之ニ蒸餾水二〇〇、〇細斷セル寒天一、二、五ヲ加ヘ石綿板ノ上ニ置キ三十分乃至四十五分間煮沸シ次ニ「ペプトン」二〇、〇食鹽五、〇ヲ加フ

第二成規那士倫或ハ加里瀉液ヲ加ヘテ中性トナシ之ヲ煮沸シ後再ビ中性反應ヲ確メ之ニ成規ノ曹達液十立方仙迷ヲ加ヘテ亞爾加里性トナシ後再ビ十五分間煮沸ス

第三此液ヲ溫暖裝置ヲ有セル漏斗ヲ以テ濾過シ其液透明ナラバ之ヲ試驗管ニ分配シ蒸氣裝置ヲ以テ毎日一時間宛消毒ス

第四上記ノ他尙此液ニ砂糖又ハ「虞里設林」ヲ加フル「ア」即チ砂糖ナレバ一、五%ノ割合「虞里設林」ナレバ四乃至五%ノ割合ニ加フ其加フルヤ培養基ヲ濾過シテ試驗管ニ移ス際ニ於テス此等ノ者ヲ加ヘタル培養基ハ單純ナル寒天培養基ノミニシテ充分ニ發育セサル微菌ノ培養ニ供ス彼ノ結核細菌ノ如キハ「虞里設林」寒天培養基ニ尤モヨク發育スル者ナリ

以上ノ諸培養基ハ皆肉汁ヲ基礎トナシテ作りタル者ナレバ此肉汁ノ代リニ肉越幾斯「肉」ペプトン「尿」牛乳等モ使用シ得ル者ナリ就中肉越幾斯ハ尤モ肉汁ニ近似セル者ナルガ故ニ之ヲ使用スルハ便ナレバ越幾斯中ニ存セル各種ノ細菌ヲ盡ク撲滅シタル後ナラザレバ固ヨリ使用

血清培養基

ス可ラズ

第四 血清培養基

此培養基ハ諸種ノ目的ニ必要ニ其原料タル血清ハ重ニ牛ヨリ採ルモ特別ノ目的ニ供スル者ハ人間ヨリ採ル先ツ血液ヲ採ルニ之ニ使用スル共口ノ圓柱玻璃瓶ヲ善ク煮沸消毒シ後依的兒ト酒精トヲ以テ洗滌シ之ヲ乾燥セシメ動物ノ頸部ノ毛ヲ剪リ昇永水酒精等ヲ以テ清拭消毒シ後頸動脈ヲ開ク而ノ直ニ流出スル血液ハ毛髮等ノ不潔物混スルヲ以テ採取セズ暫ク流出セシメタル後初メテ採取スルナリ人間ヨリ採取スルニハブム氏法ニ從テ胎盤ノ尙未ダ子宮ニ附着セル間ニ其臍帶ヨリ靜脈血十五乃至二十立方仙米採ルナリ

動物ノ血液ヲ得タルキハ成ル可ク寒冷ニ靜ナル處ニ置キ凝固初マルキハ玻璃棒ヲ以テ硝子瓶内壁ニ觸レシメ以テ其凝固ヲ助クベシ如此シテ凝固終ルトキハ其上ニ透明ノ血漿ヲ生ズベシ即チ一乃至一五「リートル」ノ血液ヨリ百乃至二百立方仙米ノ血漿ヲ得

平板培養法

平板培養法

又レフレル氏ノ質扶的里細菌ヲ培養スルニハ葡萄糖「ペプトン」肉汁ヲ以テ製ス即チ動物血清三分肉汁一分ヲ混シ之ニ「ペプトン」二%食鹽〇、五%葡萄糖一%ノ割合ニ加ヘ之ヲ亞爾加里性トナシテ後濾過シ次ニ消毒スル「前ニ述ベタル各項ニ同シ

之ニ用フル硝子板ハ厚サ一密透巾ハ五長一三仙迷ノ者ヲ普通トス二重皿ニハ大小二種有リ大ナル者ハ通常平板上ニナセル培養ヲ著フルニ用フル者ナリ其蓋ニハ把手アリ此器中ニハ水又ハ昇永水ヲ浸セル紙ヲ入レ以テ其中ノ空氣ヲ濕潤ナラシム小ナル二重皿ハ其直徑八乃至十仙迷ニシテ所謂培養皿ト稱スル者ナリ又俗ニ「パトリー」氏皿トモ云ヘ正シカラズ「パトリー」ノ唱道セル皿ハ其高サ一五仙迷ニシテ今日ハ實用ニ適セザル者ナリ今日用フル者ハ其周壁少クトモ一仙迷ヨリ低クカラザル可ラズ而ソ此等ノ硝子板又ハ小二重皿ヲ大ナル二重皿ノ中ニ入レ置クニハ其面ニ塗布セル培養基面ノ平等ナラン「ト要スルガ故ニ水平標準器ヲ具テ其高低ヲ正フス

假令バ全「ゲラチン」培養基ヲ以テ平板培養スル法ヲ述ブレバ先ツ硝子板ヲ水平ニ置キ「ゲラチン」培養基ヲ温湯中ニ入レテ溶カシ左ノ手ニテ

濕潤器(大二重皿)ノ蓋ヲ半バ開キ下ノ皿ト上ノ皿トノ面ハ常ニ相向ハシメ決シテ下ノ皿ヲ露出スルガ如クニ蓋ヲ取ル可ラス是レ此際空氣中ノ有毒細菌培養基上ニ附着スルノ恐アルガ故ナリ而シテ右ノ手ニ「ゲラチン」培養基ヲ入レタル試験管ヲ取り左ノ手ノ環指ト小指ノ間ニテ綿栓ヲ除キ半バ開キタル皿蓋ノ間ヨリ入レ其内ニ併置シアル硝子板ニ可成平等ニ注クベシ而シテ後濕潤器ノ皿蓋ヲ覆ヒ暫クシテ冷却凝固スルヲ待チ又前ノ如クニシテ皿蓋ヲ開キ移植スベキ物質ヲ入レタル試験管ヨリ前ニ平等ニ注ギタル「ゲラチン」面ニ又平等ニ注グベシ後再ビ皿蓋ヲ覆ヒ之ニ年月種類等ヲ標記シ置クベシ小ナル二重皿ニ移植スルモ之ト同様ナリ唯之レハ其蓋ヲ開ク「濕潤器」ノ蓋ヲ開クガ如クシ直ニ其中ニ培養基ヲ注湯スルノ異ナルノミ而シテ之レニ移植シ終ラバ其蓋上ニ標記シテ之ヲ濕潤器中ニ入ル、ナリ如此培養セルトキハ各種細菌ニ仍テ室内温度ニ諸種ノ注意ヲ要スルハ勿論ニシテ或ル者ハ通常ノ室内温度ニテ充分ニ發育シ或ル者ニアツテハ特別ニ孵卵器中ニ入レザル可ラザル者モアリ今盡ク擧テ云フ可ラズ

通常ノ培養法

茲ニ附記スベキハ通常ノ培養法斜面積養法及ビ廻轉培養法等ナリ
 通常ノ培養法 左手ニ培養基ヲ入レタル試験管ヲ取り右手ニ消毒セル白金線ヲ以テ移植スベキ細菌ヲ採リ試験管ノ綿栓ヲ抜キ恰モ前ニ二重皿ノ蓋ヲ開クト同様ニ綿栓ヲ以テ試験管ノ上ヲ覆ヒ他細菌ノ落下ヲ防ギ白金線ヲ試験管中ニ入レ培養基ノ正中ニ一仙米許押入スベシ或ハ又其上ニ浮游セル水液ニ平等ニ混スルモ可ナリ

斜面積養法

斜面積養法 之レハ培養基ノ凝固スル際試験管ヲ斜ニナシ置キタル者ニシテ通常ノ培養法ヨリ細菌ノ繁殖面ヲ廣クナシタルナリ之ニ移植スルモ前ト同ジク白金線ニ移植スベキ物質ヲ取り之ヲ針面ノ基底ニ瀦溜セル水滴中ニ移シ后此試験管ヲ倒ニシ細菌ヲ含メル水滴ヲシテ培養基面ニ平等ニ流レシムルナリ

廻轉培養法

廻轉培養法 之ノ者ハ前二者ヨリ尙一層廣潤ナル繁殖面ヲ得ントスル者ニシテ培養基ヲ溶解セシメテ之ニ移植シ能ク混和セル後冷水中ニ試験管ヲ入レ之ヲ廻轉シナガラ凝固セシムルナリ然ルトキハ培養基ハ試験管ノ四壁ニ附着シ後日細菌ノ繁殖セル際廣ク諸種ノ状態ヲ見

動物試驗

ルニ便ナリ

動物試驗

動物試驗病毒ノ害力及ヒ之ニ依テ起ス症狀等ヲ研究スル爲メニ動物ニ就テ試驗スルコアリ之レ診斷上ニモ又治療上ニモ必要ノコニ學ニ篤キ者ノ必ズ缺ク可ラザル研究ナリトス之ノ目的ニ使用スル動物ハ鼠、二十日鼠、南京兔、海豚、鳩、鷄等ノ温血動物ナレモ屢々又冷血動物モ用ニ供スルコアリ大ナル試驗所病院ニアリテハ是等ノ動物ハ通常飼養シ置ク者ナレモ一個人ノ學術的研究ニ其煩ニ耐ヘザルヲ以テ用ニ臨テ求ムルヲ便ナリトス

動物試驗ニ要スル器具ハ種々アレモ一般ヲ示セバ左ノ如シ

大小圓及刀、錐子、鉗、白金針、麻醉藥、動物ヲ固定スルニ用フル、鑿刺、昇汞水、蒸餾水、酒精、酒精燈、注射器、乳鉢、ビベット、

等ナリトス之ヲ以テ動物ニ接種スルニ固形物ノ儘ヲ以テスルト流動物トナシテ注射スルトノ別アリ二者就レテ採ルモ先ツ準備裝置ヲナシハ一様ナリ即チ動物例令バ兔ノ如キ稍々大ナル動物ニアリテハ敢

テ固定臺ヲ用フルヲ要セズ(鼠等ハ之ヲ要ス)助手ヲノ動物ノ頭部及下肢ヲ握テ固定セシメ臀部ノ腰椎ニ近寄りタル所ニ於テ方三仙米許ノ毛ヲ剪リ要スレバ尙ホ剃ルニ如クハナキモ注意シテ尤モ短ク毛ヲ剪ルハ剃ルノ必要ナシ次ニ昇汞水ニテ能ク拭ヒ尙酒精ヲ以テ洗テ能ク消毒シ之ヨリ若シ固形物例令バ蘆芥ノ如キ者ヲ皮下ニ入レントスルトキハ其消毒セル部ニ一仙米許ノ表皮切開ヲ施シ錐子ヲ以テ其皮端ヲ摘ミ鈍器ヲ押入シテ深サ二仙米許リ皮下結締織ヲ分チ篋ニテ接種セントスル物質ヲ取り之ヲ創口ヨリ入レ可成深部ニ押入ス此皮下結締織ヲ分ツ際ニ靜脈ヲ損傷セザル様注意スベシ然ラザレバ創面ニ血溢レ作業大ニ困難ナリ如此接種終ラバ創口ハコロヂユムニテ封鎖スベシ又流動物ヲ注射セント欲セバ外皮ヲ消毒セル後動物ノ大小ニ應ジ〇、五乃至三、〇ヲ注射シ創孔ハ同ジクコロヂユムニテ封シ置クベシ如此接種セル動物ハ毎日創面ノ觀察動作ノ異常、食餌ノ分量等ニ注意スベシ而シテ異常アラバ一々手帳ニ認メ置クベシ而シテ若シ動物斃ルトキハ解屍臺ニ上セ仰臥ノ位置トナシ四肢ヲ固定シ式ノ如ク頭部ヨ

リ恥骨縫際ニ迄切開シ皮膚筋肉ハ共ニ外方ニ翻轉シ次ニ諸部ノ腺特ニ鼠蹊腺ヲ檢シテ多少腫脹ノ形跡アラバ之ヲ摘出シテ染色標本ヲ作ル次ニ又血管ノ状態ヲ檢シ股動脈或ハ腋窩動脈ヨリ血液ヲ取リテ之レヨリモ標本ヲ作ル次ニ肺肝及ビ腹腔ヨリ液ヲ取リ盡ク平板培養基ニ種ヘ膀胱ノ内容ハストロウシヤイン氏ノ注射器ヲ以テ取リテ二重皿ノ培養基ニ種フ又腸内容ノ検査ヲ要スレバ一定ノ處ニテ重復結紮ヲ行ヒ其中間ヲ切開シテ取ルベシ腹部ノ検査終ラバ胸部ノ剖檢ヲナス即チ劔狀突起ノ部ヲ攝子ニテ摘ミ肋軟骨ニ添テ切り開キ先ツ心臟ノ右房ヲ開テ血液ヲ取り之ヲ覆蓋硝子ニ塗り染色標本ヲ作り又其血液ヲ培養基ニ種テ培養検査ヲ行フ以上ノ他諸臟器ニ就テ微菌検査ヲ行ハント欲セバ之ヲ酒精中ニ浸シ後其切片ヨリ染色検査ヲ行フベシ以上細菌培養法ノ一斑ヲ述ベタリ尙ホ精細ノコトヲ知ラント欲セバ專門書ニ就テ研究スベシ余ガ茲ニ述ベタル者ハ實地醫家ガ臨床診斷ノ一助トシテ行フベキ方法ヲ述ベタルノミ精細ノ學理諸家論說等ヲ羅列スルハ固ヨリ本章ノ主趣ニ非ラザルナリ

終リニ消毒法ニ就テ一言セン抑モ消毒ノコトタル之ヲ等閑ニスルト之ヲ勵行スルトハ公衆ニ及ボス影響甚タ大ニシテ之ヲ大ニシテハ國家經濟ニ至大ノ關係ヲ有シ之ヲ小ニシテハ個人ノ生命保安ニ關ス加之傳染病ヲシテ長ク其害毒ヲ逞フセシムルハ文明國トシテ恥ヅ可キコトナリトス天下何レノ處ニカ病毒ナカラシ其未開野蠻ノ地方ヨリ恐ル可キ病毒ノ輸入サル、コトアルハ交通頻繁ノ今日勢ヒ免ル可カラザルノ數ナリト雖モ其病毒ヲシテ遂ニ内地ニ入ラシメズ或ハ假令ヒ潜伏期ニアリシ者ノ上陸後發病シタリトスルモ直ニ撲滅シテ害ヲ四方ニ流サシメザルガ如キハ眞ニ所謂文明國ノ謂ヒニシテ衛生機關ノ完備ト人智ノ發達ト共ニ相待テ其効ヲ奏スベシ然リ而シテ吾人臨床ニ從事スルノ徒亦日新ノ學ヲ講究シ診斷ヲ確實ニシ豫防ヲ嚴ニスルヲ得バ庶幾クハ國利民福得テ求ムベカラシカ彼ノ病ヲ診シテ鑑別スルヲ得ズ施スベキ消毒ヲ等閑ニ附シ遂ニ嚙臍ノ侮ヲ遺スガ如キハ抑モ責任ヲ知ラザル甚シキ者ニシテ其罪愚民ノ知ラズシテ犯スニ優ル萬々ナリ戒シメザル可ケンヤ勉メザル可ケンヤ

消毒ノ一タル一ノ公共事業ニシテ其施行方法ノ如キ中央政府ニ於テ一定ノ法規アリ各條皆學理ニ基キ實地ニ適合セルヲ以テ余ハ茲ニ其沿革諸説ヲ空書スルヲ止メ讀者ノ便ニ供センガ爲メ左ニ明治三十年五月内務省令第十三號ヲ以テ公布サレタル清潔方法消毒方法ヲ掲載セントス蓋シ吾人ハ多ク事ニ實地ニ當ルノ徒ナルヲ以テ中央政府所定ノ法文ニ據リ作業ヲナスノ責アレバナリ

清潔方法消毒方法

明治三十年五月
内務省令第十三號

傳染病豫防法第六條ニ依リ清潔方法消毒方法左ノ通定ム

第一章 清潔方法

第一條 清潔方法ノ要項左ノ如シ

- 一 傳染病患者アリタル家ニ於テハ殊ニ患者ノ居室其他病毒汚染ノ疑アル場所ニ注意シ消毒方法ノ施行ヲ了リタル後掃除ヲ行ヒ其塵芥ハ之ヲ焼却スベシ
- 二 家屋掃除ノ際床下ノ塵芥其ノ他不潔物ハ之ヲ取除ケ焼却スベシ

シ

三 傳染病患者アリタル家ノ井戸流臺所流便所又ハ芥留ノ掃除ヲ要スルトキハ消毒方法ノ施行ヲ了リタル後之ヲ行フ可シ但必要ノ場合ニハ修理改造及井戸浚ヲナスベシ

四 傳染病豫防法第五條第二項(當該官吏ハ必要ト認ムルトキハ其近隣又ハ患者ト交通ヲナシタル家ニモ消毒方法及ヒ消毒方)ノ場合ニ於テハ前各號ヲ準用スベシ

第二條 傳染病流行ニ際シ溝渠ヲ攪拌スルハ却テ病毒蔓延ノ媒介ヲ爲スノ虞ナシトセズ必要ノ場合ニハ消毒藥(生石灰末若クハ石灰)ヲ投シタル後浚瀝スベシ

第三條 傳染病ノ流行前又ハ流行後ニ於テ清潔方法ヲ行ヒ家宅ノ掃除溝渠ノ浚瀝ヲ爲ス場合ニハ濫リニ消毒藥ヲ撒布ス可ラズ

第四條 溝渠ヲ浚ヒタル汚泥塵芥ハ直ニ一定ノ運搬器ニ入レ健康上有害ナラザル様一定ノ場所ニ棄ツベシ汚泥ヲ路傍ニ散逸セシメ又ハ之ヲ堆積スベカラズ

第二章 消毒方法

第五條 消毒方法ハ左ノ四種トス

一 焼却

二 蒸氣消毒

三 煮沸消毒

四 藥物消毒

第六條 焼却ニ適スルモノハ左ノ如シ

一 傳染物患者若クハ死體ニ用ヒタル被服、臥具、布片、便器、其他ノ器具ニシテ甚シク病毒ニ汚染シ消毒後再ヒ用ニ供スル目的ナキモノ

二 傳染病患者ノ吐瀉物、其他ノ排泄物等

第七條 蒸氣消毒ニ適スルモノハ左ノ如シ

一 衣服、臥具、片布等總テ絹布、綿布、麻布、毛織物類

二 硝子器、陶器、磁器、其他鑲製若クハ木製品、鐵ニシテ涼熱ニ堪フルモノ

第八條 蒸氣消毒ヲ施行スルトキハ左ノ各項ニ注意スルヲ要ス

一 革、鐵、革製品、漆器、其他ノ塗物類、護謨製品、護謨附品、糊附品、毛皮、象牙、龜甲、角ノ類ハ物品ヲ損スルヲ以テ蒸氣消毒ヲ避クベシ

二 被服類ニ蒸氣消毒ヲ施スニハ豫メ袖中又ハ衣囊中ヲ檢索シ若シ彈丸、火藥等爆發又ハ發火シ易キ物品アルトキハ之ヲ取出スベシ又消毒中他物ニ染色ノ恐アルモノ等ハ蒸氣消毒ヲ避クベシ

三 蒸氣消毒ハ流通蒸氣ヲ用ヒ成ルベク消毒器中ノ空氣ヲ驅逐シ一時間以上攝氏百度以上ノ濕熱ニ觸レシムベシ

第九條 煮沸消毒ニ適スルモノハ蒸氣消毒ニ適スルモノニ同シ

煮沸消毒ハ沸騰後一日間以上煮沸スベシ

第十條 藥物消毒ニ供スル藥劑並其用法ハ左ノ如シ

一 石炭酸水(二十倍) 結晶石炭酸五分、鹽酸一分、水九十四分

石炭酸水ヲ製スルニハ石炭酸水五分ニ凡水一分ヲ加ヘ攪拌又ハ振盪シツ、徐々ニ定量ノ水ヲ注ギ後鹽酸一分ヲ加フ可シ温湯ヲ用フレバ其ノ溶解殊ニ速カナリトス但使用ノ際ハ毎回振

盪スルヲ要ス
 石炭酸水ハ各種物件ノ消毒ニ適ス但使用ノ際ハ左ノ諸件ニ注意スベシ
 一吐瀉物其他排泄物ニハ同容量ヲ加ヘ能ク攪拌スベシ
 三器具室内等ヲ消毒スルニハ擦拭又ハ撒布スベシ
 三手足等ヲ消毒スルニハ洗滌シタル後更ニ淨水ヲ以テ洗滌スベシ
 四衣類等ヲ消毒スルニハ鹽酸ヲ加ヘザル者ヲ用ヒ十二時間以上浸漬シ其後淨水ヲ以テ更ニ洗滌スベシ
 二昇汞水(千倍)昇汞一分、鹽酸十分、水九百八十九分
 昇汞水ヲ製スルニハ昇汞ヲ定量ノ水ニ溶解シ後鹽酸ヲ加フ可シ
 昇汞水ハ猛毒ニシテ無色無臭ナルカ爲メ危險ヲ招キ易キノ虞アリ故ニ貯藏使用ノ際充分ニ注意ヲ加ヒ又其危險ヲ防ガン爲メ凡十萬一ノフロキシソラ加ヘテ著色シ一見識別シ易カラシム

ルヲ要ス但金屬製ノ器ニ貯藏スベカラズ
 昇汞水ハ陶器硝子器又ハ木製器具ノ消毒ニ用フ可シ飲食器玩具壘敷物ノ消毒飲料水ニ滲透スベキ場所ノ消毒及金屬製品糞便吐瀉物ノ消毒ニ用フベカラズ
 三
 生石灰少量ノ水ヲ加シテ攪拌スル者
 生石灰末生石灰ニ少許ノ水ヲ加ヘ粉末ト爲シタルモノ
 生石灰末ハ用ニ臨ミテ之ヲ製シ吐瀉物其他ノ排泄物溝渠芥溜床下等ノ消毒ニ用フベシ吐瀉物其他ノ排泄物ヲ消毒スルニハ少クモ其容量五十分ノ一ヲ投シ能ク攪拌スベシ溝渠芥溜ニ對スル量ハ之ニ準シ床下ニ在テハ其全面ニ撒布スベシ
 石灰乳(十倍)生石灰一分、水九分
 石灰乳ヲ製スルニハ一分ノ生石灰ニ九分ノ水ヲ徐々ニ加ヘ能ク攪拌スベシ其ノ用量ハ生石灰末ノ五倍トス但石灰乳ハ用ニ臨ミテ之ヲ製シ使用ノ際ニハ毎回攪拌スルヲ要ス普通石灰ヲ生石灰末石灰乳ニ代用スル場合ニハ倍量ヲ用フ可シ

木灰ハ生石灰石灰等ヲ得ルコト能ハサル場合ニ於テ虎列拉病
患者ノ吐瀉物赤痢病患者腸窒扶斯病患者ノ排泄物ノ消毒ニ代
用スルヲ得其用量ハ吐瀉物排泄物ノ五分一トス灰汁トシテ
使用スルニハ木灰一分ニ水四分ヲ加ヘ之ヲ煮沸シテ製スヘシ
其ノ用量ハ吐瀉物排泄物ノ同容量トス但石炭灰葉灰ハ木灰ト
同一ノ効ナシトス

四

格魯兒石灰水(二十倍)格魯兒石灰五分
水九十五分

格魯兒石灰水ノ應用并用量ハ石灰乳ニ同シ但用ニ臨ミテ製ス
ベシ

第十一條 消毒方法ノ應用ハ左ノ如シ

第一 患者

傳染病患者治愈シタルトキハ全身入浴ヲ行ヒ衣服ヲ更メシム
ヘシ場合ニヨリテハ温濕布ヲ以テ拭淨シ入浴ニ代ユルモ妨ケ
ナシ

第二 死體

傳染病ノ死體ヲ棺ニ斂ムルニハ其被服ニ昇汞水若クハ石炭酸
水ヲ充分ニ撒布シ又ハ昇汞水若クハ石炭酸水ニ浸漬シタル布
ヲ以テ包ミ又ハ石灰若クハ木灰ヲ以テ填ツベシ

第三

看病人、病家ノ家人其他病毒ニ接觸シタル者
看病人、病家ノ家人其他消毒方法ノ施行又ハ患者、死體、排泄物
ノ運搬等ノ爲病毒ニ觸接シタル者ハ時々若クハ其都度手足及
衣服ヲ消毒シ入浴スベシ

第四

患者、死體等ノ運搬器
傳染病ノ患者、死體等ヲ運搬シタル籠籠、釣臺ノ類ハ使用後毎回
昇汞水若クハ石炭酸水ヲ以テ擦拭スベシ

第五

便所、芥溜溝渠等
傳染病患者ノ吐瀉物其他排泄物ノ入りタル便所ノ糞池、肥料溜
ニハ生石灰末、灰石灰乳若クハ格魯兒石灰水ヲ澆キ能ク攪拌ス
ベシ但シ便所ハ石炭酸水ヲ以テ消毒シタル後直ニ使用シ糞便
ハ一週間ノ後肥料ニ供セシムルコトヲ得

消毒スヘシ
 病毒ニ汚染シタル土地ニハ石灰乳若クハ格魯兒石灰水ヲ灌キ
 其塵芥ハ燒却スヘシ
 病毒ノ混入シタル芥溜ニハ石灰乳若クハ格魯兒石灰水ヲ灌キ
 病毒ノ混入シタル溝渠ニハ生石灰末石灰乳若クハ格魯兒石灰
 水ヲ灌クベシ

第六 衣服、器具、敷物等

傳染病患者ノ着用セル衣服、臥具、并病室ニアル諸器具又ハ看病
 人及患者ニ接シタル家人ノ衣類其ノ他病毒汚染ノ虞アルモノ
 ハ各物件ノ種類ニ從ヒ消毒方法ヲ施行スベシ
 第八條第一ニ掲ケタル物品ノ類ハ曹達石鹼、毛皮ニハ避クベシ
 第五條ニ掲ケタル各消毒法ヲ施行スルコト能ハザル者ハ日ニ曝
 シ若クハ大氣中ニ乾燥セシムベシ

第七 患者ノ居室

石炭酸水若クハ昇汞水ヲ以テ室内各部ヲ拭淨スベシ消毒後ハ
 日光ノ射入空氣ノ流通ヲ良クシ乾燥セシムルヲ要ス

第八 瀉車

傳染病患者若クハ死體アリタル瀉車内ノ消毒ハ第七ニ準スベ
 シ傳染病患者ノ吐瀉物其ノ他排泄物ニ對シテハ消毒藥ヲ混シ
 適宜處置スベシ

車室ニ附屬スル便所ハ石炭酸水ヲ以テ消毒スベシ

第九 船舶

傳染病患者若クハ死體アリタル船室内ノ消毒ハ第七第八ニ準
 スベシ其ノ他ノ場所ニ對シテハ消毒藥ノ撒布、擦拭等適宜處置
 スベシ
 船底水ニハ其容量ニ百分一、生石灰末ヲ加ヘ二十四時間ヲ經タ
 ル後汲出サシムベシ

總論終

傳染病篇各論

第一章 麻疹 masen

原因

原因 固有ノ病毒ハ吾人未ダ之ヲ知ラズ然レモ其決シテ特發スル
 一ナク且ツ短時間内ニ一患者ヨリ病毒ノ傳播スルヲ見レバ極メテ揮
 發性ノ者ナルコトハ明カナリ未タ一回モ本病ヲ經過セサル者ノ本病患
 者ト同棲セル爲メ全家ニ傳染セル例ハ少ナカラズ患者ノ鼻粘液唾液
 涙液及ヒ血液等ヲ健體ニ接種スルニ其成績皆陽性ナリ之ヲ以テ見ル
 時ハ本症ハ管ニ發疹期ノミナラズ既ニ其初期即チ前驅期ニ於テ傳染
 性ヲ有スルヤ明ナリ其脫皮期ニ於ケル傳染性ハ目下尙疑ハシ而シテ病
 毒ハ肺ヨリ浸入スル者ニシテ呼吸器系統ハ少クトモ其占位スル最初
 ノ場所ナリ又此病毒ノ生活時限及ヒ抵抗力ハ左程大ナル者ニアラザ
 ル可シ如何トナレバ大都府ト雖モ其流行ハ短クシテ大抵四ヶ月及ヒ
 六ヶ月ナレバナリ

個人的素因

個人的素因 凡テ人間ハ幼ト老トヲ問ハズ此素因ヲ有セリ

流行ハ秋夏ニ多シ

病理解剖

劇場換氣不充分ナル場所及ビ小兒ノ多キ學校等ハ本病ノ蔓延スルモ
 容易ナリ初生兒ニアツテハ已ニ胎内ニ於テ之ヲ感受シ發疹ヲ有シナ
 ガラ生ルコトモアリ又産出後幾何ナラズシテ罹ルコトモアリ多分胎盤
 血液ノ媒介ニ由テ受クル者ナラン本病ハ一回之ニ罹レバ終生免疫質
 ヲ得ルヲ通例トスレモ例外ハ固ヨリ少ナカラズ潜伏期ハ諸醫ノ
 經驗上十日ヲ算シ前驅期ヨリ發疹期迄ハ十四日ヲ算ス

本病ハ秋夏ハ冬春ニ比スレハ流行少シ

病理解剖

皮膚ノ發疹トハ必竟濾泡口側ニアル細小血管并ニ乳
 頭集簇ノ充血セルニ外ナラズシテ其充血セル部分ニハ少量ノ滲出液
 アルヲ以テ斑ハ多少皮膚面ヨリ高キカ如ク見ユ此斑ハ死後ニハ消失
 スルモ皮下出血ノアリシ部分出血性麻疹ノ場合ハ然ラズ若シ危險ノ
 併發并ニ後發病ナキトキハ本病ハ單ニ一ノ脈衝ナルノミニ止マル者
 ナリ

症候

其潜伏期ニ於テハ多クハ症狀ヲ呈セズ漸ク其末期ニ至テ初
 メテ倦怠頭痛及ビ多少ノ熱感等ヲ生ズ第二期即チ前驅期ノ初メニハ

短時間内ニ體温昇騰シテ三十九度乃至四十度ニ及ブ其固有ナル症狀ハ身體打撃ノ感不眠數脈等アリテ發熱之ニ伴フ小兒ハ屢々熱ノ爲メニ人事不省ニ陥ルコアルモ又直ニ恢復ス熱ト共ニ鼻眼喉結膜等ノ加答兒口蓋及ビ咽頭ノ腫脹又屢々扁桃腺喉頭氣管氣管枝等ノ腫脹ヲ來ス爲メニ或ハ嚥下ニ疼痛ヲ覺ビ或ハ鈍キ吹聲的咳嗽及ビ咯痰等アリ軟口蓋ニハ屢々暗紅色ノ點或ハ小斑ヲ生スルコアリ熱四十度ニ達スレバ二日以内ニ又平熱ニ下ル假令ヒ場合ニヨリ全ク下ラザルコアルモ朝夕ケハ下リ夕ハ多少ノ昇降ヲナス者ナリ如此時期ハ三乃至五日持續ス發疹期ニ於テハ熱ハ四十度或ハ尙高ク上リ同時ニ一般症狀害ナレ一時輕快ニ傾キシ諸粘膜ノ焮衝再ビ勢ヲ逞フス發疹ノ生スルハ先ッ顔面殊ニ額顙等ニ初マリ次デ後頸部胸四肢等ニ蔓延ス二十四乃至三十六時間内ニ此疹及ビ熱ハ其項上ニ達ス之レ則チ疹ノ極盛時期ナリ此期ニ至レバ顔面ハ腫脹シ眼圍殊ニ著シ且ツ其他ノ焮衝モ亦其極度ニ達ス皮膚ノ發疹ハ帶黃紅色或ハ紅色後ニハ多クハ暗紅色乃至青紅色トナル而シテ初メハ指壓ニ仍テ褪色スレモ時ヲ經ルニ從テ血色素

ノ溢出ニ仍テ指壓スルモ褪色セズ此斑ノ大サハ殆ンド豆大ニシテ形ハ時トシテ丸ク時トシテハ角形不整ナリ但シ常ニ其邊緣ハ健康皮膚ト認識シ得近ク相隣接セル者ハ互ニ混流シ遂ニハ時トシテ大ナル一斑ヲ形成スルコアリ然レモ決シテ猩紅熱ノ如キ大斑ニ達スルニ至ラズ斑間ノ皮膚ハ敢テ他ト變スルコナシ斑ハ或ハ滑平ナルコアリ或ハ其中心ニ於テ溼潤ノ爲メニ結節ヲ形成スルコアリ上皮ハ漿液ノ爲メニ浮上シ水泡ヲ形成ス而シテ多少ノ痛感及ビ灼燒ノ感ヲ訴フ尤モ終ノ疹ノ發シテヨリ二日後漸次古キ斑ヨリ褪色ヲ初メ其跡ニ色素ヲ留ム疹ノ蔓延中ハ殆ント常ニ四十度四十度半四十一度等ノ高熱ヲ發シ發疹ノ極盛期ヲ過クレバ又直ニ下降ス此熱ノ下降ト共ニ一般症狀ノ障害及焮衝ハ漸次軟快ス尤モ終ニ退クハ口蓋ノ腫脹及ビ氣管枝炎ナリトス之レヨリ二三日ヲ經レバ即チ無熱ノ表皮剝脫期至ル其持續ハ殆ント八日或ハ尙長キコアリ漿液ノ滲浸ノ爲メ浮上セル上皮ハ其部ニ於テ糠狀剝脫ヲ營ム其尤モ旺ナルハ身體中衣服ヲ以テ被ハレザル部分ナリトス以上ノ他ノ症狀ハ漸次快復ニ趣キ遂ニ患者

不定型

出血性發疹

無疹性麻疹

ハ治癒ス。不定型一發疹時トノ發疹ハ第一着ニ胸或ハ四肢ニ生スルヲアリ、又々稀レニハ發疹甚タ齒微ナルアリ、發疹期ニ於テ生シ直ニ消失スル者アリ、又一時消失シ直ニ再ヒ發スルヲモアリ、以前ハ如此型ハ其發疹ノ外部ニ消失スルヤ、内部ノ器臟ヲ犯ス者トナシ、家族及醫師ノ恐レタル所ナリ如此想像ハ諸種ノ經驗ノ後、稍事實ニ近ツキタルガ如シ蓋シ發疹消失後ニ、加答兒性肺炎等ヲ繼發スル者アレバナリ、然リト雖モ、是レ敢テ褪色ノ結果ニアラスシテ、却テ其原因ナリ、如何トナレバ、肺炎ノ發スルヤ高熱ヲ伴フガ故ニ血液巡行ヲ變シ、從テ皮膚ノ血行ニ變化ヲ生ズレバナリ、故ニ此繼發病若シ、經過短キハ、再ヒ、以前ノ麻疹ヲ生ズ、又、或時ハ他ノ諸症狀盡ク具備シ正ニ麻疹ヲ患フルニモ拘ハラズ、全ク發疹ヲ缺クヲアリ如此ヲ無疹性麻疹ト云フ、之ニ反シテ喉衝大ニ輕ク或ハ殆ンド微知スベカラサルモ發疹甚ダ旺盛ナルヲアリ、此他尙出血性發疹アルヲアリ、但シ、單純ノ發疹ト雖モ、時トシテ一二出血スルヲアリ、之ト混同スベカラズ、一ハ、全ク良性ニシテ、一ハ、全ク惡性

發疹性麻疹

ナリ、此出血性發熱ハ血管壁菲薄ニシテ破裂シ易キ人ニ來ル者ニシテ、表皮ノ出血ト同時ニ、他ノ出血管ヘハ胃鼻腸肺出血等ヲ來ス者ニシテ、如此患者ハ容易ク虛脫ニ陥リ易シ。又一種發疹性麻疹ト稱スル者ハ、時トシテ出血性發疹ナクシテ却テ腸ノ症狀及ビ脾腫大ノミヲ呈スルヲアリ如此際ニ於テハ麻疹毒ニ感染スルト、同時ニ他ノ病毒ニ犯サレタル者ト想像スルモ可ナリ、併發病及後發病 麻疹ト共ニ尋麻疹紅斑匍行疹糠秕疹等ノ來ルヲアリ、若シ、患者ニノ濕疹或ハ痒疹ニ罹リタル後ニ麻疹ヲ患フルハ、麻疹ノ發生ト同時ニ、先キノ諸症ハ消失シ快復期ニ至テ再、發生ス、又眼瞼結膜炎ト共ニ紅彩炎ヲ發ス尤モ惡性ナル場合ニ於テハ眼球炎ヲ發シ又鼻血ヲ生スルヲアリ、口内炎狼瘡口腔粘膜炎及ビ敗血病等ハ幸ニモ稀レナリ、咽頭ヨリ屢々喉衝ハ歐氏管ニ移行シ次テ耳内ニ及ボシ、内耳炎ヲ生ジ、時トシテハ之レヨリ鼓膜穿孔ヲ發スルヲアリ、喉頭ノ喉衝殊ニ小兒ニ於テハ空間狹隘ノ爲メ容易ク恐ルベキ病狀ヲ

發スルヲアリ、即チ閉鎖、笛聲呼吸音、吐音、咳嗽、吸時胸部陷沒、血液滯滯等ヲ起シ、恰モ質扶的里ノ如キ症狀ヲ呈ス。

氣管枝炎ハ流行ノ種類ニモ據レ、モ多クハ小氣管枝ニ移行ス、然ルトキハ高熱稽留シ、且ツ甚シキ呼吸困難ヲ來シ、聽診上瀾蔓セル水泡音ヲ聞ク者ナリ、而シテ後全肺ニ焮衝ヲ誘起シ、危篤ニ陥ルヲアリ。

義膜性肺炎ハ非常ニ稀レナリ。

麻疹以前ニ肺結核ヲ患ヒシ者ハ、麻疹恢復ノ後急ニ病勢ヲ進ム、殊ニ遺傳アル小兒ニシテ未タ其確徵ナキ小兒ノ如キハ、麻疹ノ治後ニ結核ヲ發スルヲアリ、之レ必竟結核微菌ノ適當ナル培養基ヲ得シニ據ル。

發熱間ニハ時トシテ蛋白尿ヲ見ルヲアリ、但シ之レフライト氏病ニ源因スルニアラズ、彼ノ猩紅熱ニアリテハ、麻疹ニ比スレハ屢々如此蛋白尿ヲ出ス者ナリ。

腸加答兒赤痢水脈腺炎等ヲ時トシテ發スルヲアリ。

以上ノ諸症ハ熱ノ昇騰時ニ發シ、下降ノ際ニハ又漸次輕快ヲ告グル者ナリ。

診斷

第一ニ重キヲ置クハ發疹ノ存在、焮衝症狀及ビ其盛時ニ於ケル高熱ナリ。

發疹ハ發疹室扶斯ト誤ルヲアリ、然レモ發疹室扶斯ニアリテハ殆ント常ニ皮下出血ヲ伴ヒ、且ツ唯僅ニ顔面ニ於テ發スルヲ多シトス。

熱ハ又極盛時ヲ越ヘテ尙長ク存在ス、又室扶斯ニアリテハ脾肥大ヲ觸知シ、麻疹ニアリテハ時トシテ觸ル、トアレモ稀レナル者トス。

又發疹ハ藥物中毒ノ發疹ト誤ルヲナシトセズ、(假令バ)コバイバ、アンドン、ピリヒニン等併シ此場合ニ於テハ藥物ノ使用ヲ廢スレバ速ニ消失スルガ故ニ明ニ區別シ得。

又發疹ハ梅毒期ノ疹ト誤ルヲアリ、然レモ梅毒ニハ其他固有ノ症狀ヲ有スルガ故ニ是又誤ルハ少シ。

故ニ病ノ初メニ於テ尙疹ノ發セザルトキハ唯注意シテ其經過ヲ看ルベシ、時トシテハ粘膜ノ腫脹ヲ見テ直ニ此病ニ疑ヲ置テ可ナルヲアリ。

豫後 繼發病ナキトキハ豫後常ニ良ナリ、頑固ナル高熱、遠常ナル發疹、廣濶ナル粘膜焮衝、數多ノ繼發病等ハ常ニ豫後ヲ不良ナラシム、小兒

殊ニ弱キ小兒老人慢性病ヲ患フル者重病ノ恢復期ニアル者妊娠産褥ニアル婦人等ハ殊ニ危シ

數年發病セザリシ地方ニ發スルトキハ通常惡性ナリ。

療法 豫防法 本病ハ稀レニ惡性ノ經過ヲ取ル者ナキニ非ザルモ概シテ良性ニシテ且ツ個人的素因ハ各人ニ具備スル者トスレバ本病

ノ豫防法ハ他ノ疾病ニ於ケル如ク絶對的ニ峻拒セズ却テ良性麻疹ノ流行時ニ際シ未ダ本病ヲ經過セザル者ヲシテ之ニ罹ラシムルノ得策

ナルヲ覺フ但シ虛弱ノ小兒殊ニ癩癩疾ヲ有セル者ハ決シテ如此キ輕舉ヲナス可ラズ偶々本病ニ繼テ結核ヲ隱起スルコトアレバナリ

種痘ニ依テ痘瘡ヲ免レ得ルガ如ク本病ノ病毒ヲ接種シテ豫防セント欲スル方法ハ其成績未タ明カナラズ

既ニ本病ニ罹レル者ニアリテハ直ニ臥床ニ就カシメ發熱發疹咳嗽及

ビ剝皮ノ大部分剝離スルニ至ル迄ハ病床ヲ離レシム可ラズ剝皮ノ大部終ラバ十五乃至十六度ノ溫度ヲ有スル室内ヲ逍遙セシムルハ可ナレモ全ク剝皮終ルニアラザレバ決メテ外出セシム可ラズ病室ハ注意シ

テ空氣ノ流通ヲヨクシ患者ノ顔ハ窓ト對セシメ壁ト向ハシメテ其羞明ヲ防ギ或ハ場合ニヨリ窓掛ヲ垂レテ光線ノ射入ヲ防グモヨシ室内溫度ハ可成溫暖ナラシメ以テ喉頭氣管等ノ刺戟ナカラシメ飲料ハ冷水ヲ禁ジ温キ牛乳ニ少量ノ食鹽ヲ投シテ吞マシムルヲ良シトス食物ハ流動性ノ物ヲ供シソツプニ卵黃ヲ加テ取ラシムル等ハ尤モ佳ナレモ卵黃ヲ好マザル者ハ之ヲ除クモ可ナリ

以上ハ單ニ一般看護上ノ注意ニ止マルモ大抵ノ患者ハ如此シテ治療スル者ナリ然レモ一般症狀激烈ニシテ高熱等ヲ發スルニ至レバ茲ニ初メテ所謂治療ヲ要ス即チ如此キ場合ニ於テハ冷水ヲ以テ全身ヲ摩擦スルカ又ハ列氏二十二度乃至二十六度ノ冷水浴ニ十分間入ラシムルヲ良トスレモ此法實際ニハ頗ル困難ナリトス高熱續キ弛張著シカラザルトキハ大人ニアリテハ安知必林若クハ鹽酸規那ノ多量ヲ與ヘ傍ラ冷水浴ヲ施スヲ良トスレモ小兒ニアリテハ單ニ冷水浴ノミニテ足レリトス喉頭又ハ氣管枝ニ激シキ加答兒ヲ起ストキハ相當セル藥品ヲ投ズルノ他尙ホ胸部ニブリースニツツ氏冷霧法ヲ施シ咳嗽激シキ

時ハ頸部ニモ之ヲ施スベシ
藥品トシテハ

重曹〇、五 吐酒石〇、〇一 餛水一〇〇、〇 單舍一五、〇

右毎二時間一小兒匙

杏仁水一、〇一五 茴香水 單舍各三〇、〇

右毎二時一茶匙宛

磷酸コデイン〇、〇五—〇、二 餛水 五、〇 單舍適宜

右一〇〇、〇ヲ製シ毎二時一食匙宛

若シ氣管ニ粘液ノ滯溜著シキカ又ハ義膜等ヲ發スルトキハ吐劑モ必
要ナリ其他中耳炎ヲ發スルカ眼瞼ノ痲衝激シキ時及ビ腎臟炎甚々稀
レナルモ結核等ヲ發スルトキハ各當該病症ニ應シテ治療ヲ施スベシ
之ヲ要スルニ本病ノ輕キトキハ單ニ看護ニ注意スレバ足り重クシテ
併發諸病ヲ發スルモ全ク對症療法ニシテ本症ニ對シテ特殊ノ療法ト
稱スベキナシ

第二章 猩紅熱 *Scharlach, Scarlatina*

猩紅熱ハ、麻疹ト等シク急性ニシテ觸接傳染ノ疾病ニ屬ス通例人間ノ
生活間ニ一度之ニ犯サルレバ、又發セザル者トス。
病毒ハ未タ確カナラサレモ外皮ニ存スル者ノ如シ然レモ局處ノ病狀
ヨリ次テ高熱ヲ起シ一般症狀ヲ害スルヲ見レバ或ハ血液中ニ微菌或
ハ其產出物ノ存スル爲ナランカ

ジクンハムガ本病ニ就テ其症狀ヲ詳記セル迄ハ本病ハ麻疹ト誤診セ
ラレタリ此病ハ限地的ニモ又流行性ニモ來リ又散在性ニモ來ル。
繼發病ハ此病ノ第一期ニ來ルモアリ又第二期ニ來ルモアリ而シテ其犯、
サル、ハ一二ノ器臟ニ止マラズ、諸種ノ器臟犯サレ、殆ント種類ノ異ナ
ルニ從テ、各ノ器臟ヲ犯ス者ナリ。
其病勢ノ如キハ、重キハ數時間内ニ倒レ、或ハ症狀輕クノ患者モ知ラサ
ル間ニ、經過スルガ如キ者モアリ又初メハ輕クシテ、漸次重キモアリ故
ニ人猩紅熱ヲ以テ恐ルヘキ傳染病ノ一ニ數フ

原因

病毒ニ付テハ、麻疹ニ於ケルガ如ク、唯其一二性質ヲ知レルニ止マル此者ハ決シテ特發スル者ニアラスシテ常ニ直接ニ或ハ間接ニ人ノ觸接ニ依リテ傳播ス、患者ガ此病毒ノ傳播者ナルコトハ、屢々諸種ノ實驗ニヨツテ確證スル處ニシテ、其消毒ノ勵行交通遮斷等ハ能ク此病ノ傳染ヲ止ムルニ足ル者ナリ。

患者ニ接シ或ハ患者ノ近傍ニ居住スル等ハ病毒ヲ感染スルノ道ナリ之ヲ以テ見ルモ本病ノ病毒ハ空氣中ヲ飛行シテ傳播スル程ノ輕量ノ者タルヲ知ルベシ、

病毒ノ生活及ビ耐力ハ麻疹ノ病素ニ比スレハ優ニ大ナリ之ニ付テ多クノ實驗アリ、假令バ或ル健康ノ人一年前ニ此病ヲ患ヘシ者ノ、住居セル家ヲヨク空氣ヲ流通セシメテ後住居セシニ、其後又同病ニ犯サレタルコトアリ、其他醫師產婆等ノ自簡ハ感染セザレモ、病人ヨリ、病毒ヲ他人ニ運搬スルコトアリ、衣服洗濯物、郵便物等ハ時トシテ非常ノ遠隔ノ地ニ此病ヲ運搬スルコトアリト云ヒリ

犬猫等ノ動物若シ此病毒ニ感染シ易キ者トスレバ之レ又善良ナル運

搬者ナリ、此病ニ向テ血液或ハ水泡ノ内容液ヲ接種スルコトハ、今日多ク行ハレズ、之レ豫防セント欲シテ施行セル成績ハ豫期セル所ヨリ却テ猛勢ノ疾病ニ罹ル者多キガ故ナリ、但シ此成績モ各人皆一致セルニアラズ、且ツ接種其者ノ効力如何モ尙疑ノ中ニアリ而シテ其病素ハ或ハ血液中ニ含有サル、者ナランカ彼ノ胎兒ガ此病ヲ以テ分娩サル、コトアルガ如キハ之等ノ好例トナスニ足ルベキナリ

其他諸種ノ分泌物モ、亦病素ヲ含有スルナラン、

其傳染ノ強度ハ病期ノ何レニアリヤ未タ公開セル疑問ニ屬ス或ル小兒此病ニ罹リ、未タ前驅期ナリシトキ其妹ヲ分離セシメシニ、遂ニ同病ニ罹ルヲ免レタルコトアリ、

傳染ノ能力ハ其病勢ノ極盛ニ於テ尤モ強ク、漸次皮膚剝脫期ニ及ブニ隨テ減少スル者ノ如シ、然レモ其傳染能力ハ尙長時間持續シ、其浮腫ノ時期ニ於テモ尙之ヲ有ス、

猩紅熱ノ個人的素因ハ麻疹ニ於ケルヨリ大ニ弱ク、乳兒及ビ老人ハ犯サレ難ク、二歳ヨリ七歳迄ハ尤モ感染シ易ク、此以後ニ於テハ又漸次減

少ス、然レレ之レ決シテ不變ノ定型ニアラズ、患者ト接セル者ニシテ、一時不感性ノ如ク見ユルモ後ニ至テ發スル者アリ、又或時ハ全學校盡ク犯サル、トナキニ非レモ、多クハ其一ニ止マル者トス、又屬々患者ニ接スル職ニアル者ハ、犯サレ易シ、其他多人数集合スル處、即チ學校、監獄等モ感染シ易ク、貧富ニハ關係ナキガ如シ、月經、妊娠、人種性等ニハ一定ノ關係ナシ之ニ反シテ、產婦、傷者、手術ヲ受ケタル者等ハ犯サレ易キニ似タリ、又地水、用水、土質等ニモ一定ノ關係ナク、高地ト雖モ往々侵畧ヲ免レズ、多クノ流行ハ秋季ニ多シ、潜伏期ハ四日乃至七日間ニシテ稀レニハ之レヨリ長キモ短キモアリ、

病理解剖

本病ノ發疹ハ屍體ニ於テハ既ニ見得ス、若シ紫斑及水泡ヲ作ルキハ單一ニ皮膚ノ缺所ヲ生スルニ過ズ、口腔粘膜ハ本病ノ輕重ニ應シテ或ハ炎症的、實質的、膿性、實質的、里性、敗血性等ノ諸病ニ羅ル屍體ニ就テハ本病ハ想像的ノ診斷ヲ下シ得ルニ過キス、
症候 潜伏期ハ通常一ノ訴フルトナク、或ハ訴フルコアルモ甚タ輕度ニメ之ヲ觀過スルコト多シ、

前驅期 體温ハ少時間内ニ速カニ昇リテ、四十度或ハ其以上ニ至リ、熱速カニ昇ルキハ惡寒戰慄ヲ生シ、小兒ニ在リテハ卒倒スルコト少カラズ、脈ハ青年ニ於テハ百四十乃至百六十二至ル、

一般症狀ハ甚タシク害サレ、爲メニ患者ハ速カニ病床ニ就ク、劇烈ナル疼痛、四肢倦怠、食慾缺損等アリ、又稀レニ嘔クコトアリ、舌ハ濃厚ナル白苔ヲ蒙リ、睡眠不安、屢々恐夢ノ爲ニ襲ハル、重症ノ場合ニ於テハ、爲メニ嚔語ヲ發シ、昏迷ニ陥ルコト稀ナラズ、患者ハ速ニ嚔下困難ヲ訴ヘ、視診スレバ、口蓋及扁桃腺ノ粘膜ハ發赤腫脹シ、處ニ血管充血シテ殆モ斑狀ヲ呈ス、所謂粘膜發疹是ナリ、次ノ廿四時間ニ於テ總テ之等ノ症狀ハ増悪シ、熱ハ持續的ニ高ク朝ト雖モ退カス、殊ニ小兒ニ於テハ扁桃腺ノ腫脹著シク、爲ニ呼吸及食事ニ困難ナリ、二日或ハ稀ニハ三日目ニ於テ發疹ヲ生ズ、所謂發疹期之ナリ、此發疹ハ三日乃至五日或ハ尙之ヨリ永ク持續ス、無數ノ小ナル丸キ赤キ小點ハ全顔面及頸部ニ發シ、殊ニ頰及額ニ著シク、頰ハ生セズ、其大サ大ナルモノト雖モ針頭大ヲ越ヘズ、此充血セル發赤部ハ壓ニ依テ褪色ス、此發疹ハ速カニ胴及四肢ニ擴カリ、手及足背

發疹期

ニ於テハ、他部ニ於ケルヨリ發疹大ナリ、此發疹ハ、血管擴張神經ノ刺戟ヨリ生ゼル直接ノ結果カ、或ハ、皮膚ニ局在セル病毒ニ依リテ血管縮小神經ノ麻痺ノ爲ニ生スルモノカ固ヨリ確言シ得ズト雖モ兩者必ズ其一ニ居ラン、多分ハ又病毒ノ新陳代謝ニ由テ生スル毒産物ノ爲メニ、血管運動神經中樞ノ刺戟モ與テ力アラシカ、乳頭部ノ血管ハ著シク擴張シ血液運行ハ緩徐トナリ、爲メニ血球ノ滲透ヲ容易ナラシム、重症ナル場合ニ於テハ此滲透甚タ多クシテ、腎臟疾病ニ於ケルカ如ク、皮膚水腫ヲ生スルコトアリ。

枕ノ間ニ在ル皮膚ハ或ハ變化ナキカ、或ハ多少發赤ス、故ニ本病ノ發疹ハ例令混同スルコトナキモ、一樣ニ播波シ所謂猩紅熱紅ト稱スル程ナリ唯極メテ近寄ツテ之ヲ見レバ、一々ノ區別ヲ漸クニ見得ベシ紅斑ハ丸ク或ハ楕圓形ナリ、手掌ト足趾ハ多クハ發疹ヲ生セズトニ致レバ、多少暗赤色ヲ帶ブ、如何トナレバ熱ノ高マル爲ニ皮膚ニ於ケル血液運行盛ニナルガ故ナリ、疹ヲ生ジテ後廿四時間乃至卅六時間内ニ於テ病ノ頂上ニ達ス、此狀態ヲ以テ、二乃至六日ヲ持續シ之ヨリ斑ハ漸次褪色ヲ初

メ、極盛期ノ間ニハ、熱ハ稽留シ、常ニ四十度四十度五分四十一度ノ間ヲ昇降ス如斯シテ其熱ノ昇降ハ或ハナキカ、或ハ甚タ僅カナリ、而シテ脈搏ハ高ク一種ノ本病ニ固有ナル性質ヲ現ハス、嚙下ニ疼痛ヲ覺ヒ舌ハ白苔ヲ脱シ暗紅色トナリ、乳頭ハ甚タ大トナリ所謂猫舌ト形容ス此時ニ於テ神經症狀縱令バ、譫語等甚タ盛ニノ通常ノ本病々毒ノ有毒ナル新陳代謝ノ産物ニ由リテ此ノ如キ腦症ヲ起シ得ルトハ考ヘラレザル程ナリ、患者ハ屢々含蛋白尿ヲ漏シ、其量甚タ少シ、而シテ腎臟部ニハ疼痛モナク、顯微的検査上、圓柱モナク、尿ノ化學的試験ニ於テ、血液モナク、一ノ急性腎臟炎ノ徵候ヲ備フルコトナシ、發疹ノ褪色スル後ハ、其他ノ局所及一般病狀ハ消散ス、熱ハ甚タ徐々ニ下リ、朝夕ニ於テ日々僅カノ降下ヲ表示ニ由テ知ラル、如ク降り、遂ニ平温ニ復ス、頸部ノ症狀及他ノ障害ハ、漸次ニ輕症トナリ、遂ニ全ク快復ス、一、二日或ハ一、二週ノ後、時ハ甚タ不定ナリ、始メテ表皮剝脱ス、其順序ハ、初メ發疹ヲ生セル順序ニ同ジ厚キ表皮ヲ有スル部分、手掌、足趾等ハ、剝皮大ニシテ屢々全形ヲナスコトアリ、故ニ手套狀或ハ指狀等ト形容ス、術語ヲ以テ言ヘハ膜狀剝皮ト

變態

稱ス之ニ反シテ菲薄ナル皮膚ヲ有スル部分、縦令ハ顔等ニ於テハ小片トナリテ、剝脱ス、即チ糠枇狀ト形容ス

發疹及剝皮ノ強度ハ通常併行ナルモノナレモ、時トシテハ發疹僅カニシテ、剝皮ノ非常ニ多量ナルコトアリ、或ハ之ニ反スルコトアリ、加之全ク發疹ナクシテ、快復期ニ及ンデ剝皮ノミ認ラル、モノアリ蓋シ之レ發病ノ當時診查ノ綿密ヲ缺キタルモノカ、疑ハシ、一ニノ場所ニ於テハ、褪色ト同時ニ糠枇狀ニ剝皮シ、後ニ至テハ膜狀ニ剝脱スルコトアリ、或ハ之ニ反スルコトアリ、重症ナル場合ニ於テハ、剝皮ト共ニ、爪及毛ノ剝脱スルコトアリ、剝皮ハ其ノ時間不定ニシテ、或ハ數日ニシテ終リ、或ハ數週ニシテ終ル、且ツ永キ間知覺過敏冷感等ヲ殘ス、

變態 發疹 屢々發疹僅少ニシテ、或ハ體ノ數部ニ生ズルノミニシテ、時トノ誤テ觀過スルコトアリ、又最初顔面頸部ニ生スル代リニ、四肢ニ初メテ來ルコトアリ、通常ハ、斑ハ、滑澤ニシテ、麻疹ノ疹ヨリハ、隆起甚ダ幽微ナリ、不全猩紅熱トハ、通常ノ發疹中ニ浸潤強キカ爲メニ、隆起ヲ増シタルモノヲ云ヒ、其斑ノ中央ニ於テ、小結節ヲ形成シ、或ハ水泡ヲ形成スルコトアリ、又血漿ノ浸潤ニ由テ、隆起ヲ増スモノアリ、之等ニヨリテ種々ノ名稱ヲ附ス、乳嚙性猩紅熱 (Scarlatina papulosa 粟粒猩紅熱 (Scamillaris) 等ト稱ス甲ハ即チ小結節ヲ生ズル者ニ、乙ハ水泡ヲ形成スル者ナリ之等ノ變態ハ皮膚ノ強ク發汗スル部ニ生ス、又鮮紅色ノ傍ラニ暗紅色ノモトノ混ジ其配置ノ甚ダ不整ナルコトアリ、此ノ如キ種類ヲ、變形猩紅熱 (Scarlatina variegata) トイフ、豫后不良ナル場合ニハ、屢々皮下出血及粘膜下出血及内臟ノ出血等ヲ見ルコトアリ、敗血性出血性、猩紅熱ト名ク患者若シ、以前ニ鮮屑疹或ハ濕疹或ハ其他ノ皮膚病ヲ患フルルハ、之等ハ極成期ニ於テ消失シ治療后再ビ現ハル

經過ノ變態

二經過ノ變態 一ニノ場合ニ於テハ、發疹ハ全クナキコトアリ、或ハ之ニ反シテ一見本病ナルヲ知ルガ如ク發疹著シキモノアリ、又發疹ナキ場合ニハ、頸部ノ疼痛、猫舌、蛋白尿及熱等ヲ以テ、之レガ主徴トス、如斯者ヲ稱シテ無疹性猩紅熱 (B. Sinexanthematica) トイフ、如此ク診斷ニ困難ナルルハ、后ニ至テ剝皮及皮屑水腫等ニ依テ始メテ本病ヲ證明シ得ルコトアリ、熱ハ通常甚ダ高キモノナレドモ、併發病ヲ兼ヌルルハ、一時潜伏

スルカ或ハ甚ダ低キヲアリ、頸部ノ疼痛ハ常ニ訴フル所ニシテ、其強度ニ種アリ、多クハ發疹及頸部疼痛ノ生ズル前僅少ノ時間ニ於テ死ス、此場合ニ於テハ、本病ニ罹レル諸種ノ確徵ヲ得テ後ニ計算セザレハ統計ヲ誤ルヲアリ、如何トナレハ一ノ徵候モ生セザル場合アレハナリ又或時ハ恰モ窒扶斯狀ヲ呈シ、殆ンド窒扶スト同様ノ經過ヲ執ルヲアリ、此場合ニ於テハ脾ノ腫大バリエル氏ノ叢腺及淋巴濾泡ノ腫脹ヲ解剖ノ際目撃スルカ故ニ本病ト同時ニ窒扶斯ニ罹レルモノナルカ否ヤハ未ダ決定セズ、出血性ノモノハ、多ク譫妄嗜眠等ノ腦症ヲ伴フ、而メテ多クハ心臟衰弱ノ爲メニ倒ル、其他敗血性ノモノハ之ヲ見ルヲ甚ダ稀ナリ、

併發病及後發病 咽喉諸臟ニ於テハ輕症ニ在テハ扁桃腺ノ焮衝アリ、重症ニ於テハ實質的口内炎ニ移行スルヲ稀ナラズ若シ其口内炎高度ナルキハ化膿シ初期ニ於テ之ヲ切開セザルキハ腺ノ大部ハ化膿ス若シ焮衝筋粘膜下組織ニ移行スルキハ滲潤ヲ起シ血液運行ヲ妨グ、營養ヲ害シ、尤モ重症ニ於テハ局所ノ壞疽ヲ起シ、粘腺膜ノ大部ハ排出ナル、若シ此壞疽ノ所ヨリ腐敗性ノ物質血液ニ入ルキハ、患者ハ速

ニ敗血性ノ症狀ヲ呈シテ倒ル、若シ壞疽ノ部分小ナルキハ、全ク治癒スルヲ屢々アリ、化膿セル部分ニハ時トシテ大血管ノ露出シ、不快ナル出血ヲナスヲアリ、多クノ患者ニハ此焮衝ノ爲メニ生ゼル營養障害ハ粘液膜表面ノ壞疽ノミナルモノアリ、而シテ其部ニハ灰白色乃至黄色ノ多少厚キ苔ヲ蒙ル、此苔ヲ剝カント欲スルキハ、實質ヲ損スル者ニシテ通例ノ咽喉實質的里ト區別シ能ハズ、素ヨリ本病ト實質的里トハ同時ニカ、ルヲ屢々アリ、猩紅熱實質的里ハ甲介ヲ通シテ鼻ニ移行シ、鼻實質的里性潰瘍軟骨膜炎等ヲ生スルヲ稀ナラズ、又咽頭ノ焮衝引テ歐氏管ニ波及シ、中耳ヲ胃スヲアリ、中耳炎鼓膜穿孔、顱顱骨ノ骨疽、耳聾等屢々ニシテ、腦膜炎ヲ起スハ稀ナリ、口内炎ハ通例其焮衝ノ度ニ依テ、淋巴腺及ヒ唾腺液ノ腫脹ヲ伴ヒ、屢々大ナル腫物ヲ形成ス、然レモ此ノ如キ腫瘍ハ化膿スルヲナクシテ消散スルヲ常トスレモ時トノ膿瘍ヲ形成シ、然ル後ニ多クハ頸部ノ結締織ニ焮衝ヲ波及シ、生命ヲ危クスルヲアリ、通例本病ノ併發ハ腎臟病ナリ、此者ハ屢々既ニ潜伏期ニ於テ生ジ、尿ニ蛋白ヲ混ジ、又少時ニシテ消失ス、是レニ反シテ脫皮期ニ於テ生スル

ライト氏病ハ腎臟部ノ疼痛高熱尿利減少脈搏高張等ノ症狀アリ又尿素ノ蓄積ニヨリテ心臟ヲ刺撃サル、ガ故ニ通常左心室ハ肥大シ遂ニ足部ニ水腫ヲ生シ後ニハ上部ニ波及シ遂ニ腹水胸水心嚢水腫等ヲ來ス患者ハ或ハ肺水腫心臟麻痺腦水腫ノ爲メニ死シ或ハ尿毒ノ爲メニ死ス又然ラスシテ是レヨリ漸次快復スルヲ往々アリ一般ニ云ヘハ症狀永續スレハ夫レダケ快復ノ望アリ又本病ニ依テ生セル腎臟炎ハ層々慢性ニ移行シ遂ニ治療スルヲアリ尙ホ必用ナル併發病及後發病ハ肺炎胸膜炎囊炎腸加答兒赤痢腦軟化等ナリ脫皮期ニ於テハ數多ノ場合ニ發熱ヲ生シ恰モ急性リヨーマチスノ如ク大小ノ關節疼痛性ノ腫脹ヲ生シ短時ニシテ消失ス化膿性關節炎ハ甚タ稀ナリ

豫後 本病ノ豫後其盛時ニ於テハ常ニ疑ハシ然レトモ皮膚ノ剝脫全ク終リ週日ノ後尿ヲ精査スルモ尙一モ蛋白質ヲ發見シ得サルニ至レバ初メテ危險ナシト云ヒ得ベシ假令バ發疹モ成規ヲ超ヘズ熱ハ低ク併發症モ少ケレバ其豫後ハ良好ナリト云ヒ得ベキモ併發症ノ種類ニ仍テハ假令ヒ本病ノ症狀僅少ナリトモ危險ノ來ルヲアルガ故ニ輕

忽ニ豫後ヲ附スベカラズ然レモ又尿毒症實扶的里壞疽等ノ併發セル重症ニ於テ屢快復スルヲナキニアラズ又流行ノ種類ニ依テハ併發病多クシテ爲メニ四十乃至五十%ノ死亡數ヲ生スルヲモアリ總テ虛弱ノ人諸病ノ快後期ニアル人產褥ニアル人等本病ニ罹ルトキハ平素強壯ナル者ノ本病ヲ患ヒタルヨリ豫後ノワルキハ論ヲ待タズ小兒ハ大人ヨリワルシ、

診斷 發疹熱口内炎及ヒ末期ノ剝皮等ハ容易ニ看過スベキ者ニアラズ故ニ之レガ診斷ハ比較的容易ナリ然レモ散在性ニアル場合ニアリテハ其剝皮期ニ至テ初メテ前ニ本病ニ罹レルヲ知ルヲアリ時トノ紅斑ト混同シ易キモ此病ニ於テハ口内炎ナシ熱モ少ク且ツ一時性ナリ又麻疹ト誤診スルヲモアレモ麻疹ハ前項述ブルガ如ク鼻加答兒眼險結膜炎等ノ固有症アリ又麻疹ニアリテハ發疹期ニ生スル熱ハ速ニ消散スレモ本病ニアリテハ剝皮ノ後或ハ其間ニ於テ熱ハ再ビ昇高シ精査スレバ必ズ併發病ノ存在ヲ確メ得ル者ナリ

療法 豫防 本病ノ固有病毒未タ判然セサルヲ以テ本病ノ惡性流

行ノ際之ヲ防止スルノ術殆ンドナシ故ニ唯本病ノ疑アル者ハ其看護者ト共ニ隔離スルニアリ若シ學校ニ發スレバ直ニ之ヲ閉ヂ患者ノ病臥セル病室ハ通氣強熱硫黃薰蒸周壁ハ消毒藥ヲ以テ拭ヒ天井ヲ清拭シ歩床ヲ磨洗スルニアラサレバ再ビ入ルヲ禁ジ醫師ハ成ル可ク廻診ノ尤モ終リニ本病患者ヲ見舞ヒ歸後直ニ入浴更衣ヲナスベシ既ニ本病ヲ發セル者ハ安靜ニ臥床セシメ居室ニハ換氣ヲヨクシ食餌ハ一般熱病者ニ對スル者ヲ與ヘ虛弱ノ者ニハ赤酒與奮劑ヲ與ヘ高熱假令バ四十一度位ノ體温アル者ニハ若シ適當ノ建築ナレバ攝氏三十一度ノ温湯ニ入レ後冷水ヲ灌テ一二度温度ヲ低メ以テ患者ノ耐ヘ得ルヤ否ヤヲ試ミ若シ熱益高クシテ患者之ヲ耐ヒ得ルキハ漸次冷度ヲ進ムベシ然レモ虛弱ノ者ニアリテハ初メヨリ微温ニ浴セシムルヲ可トス又シニチーマン氏ノ法ニ從ヒ第三週ヨリ一日三回脂肪ヲ以テ皮膚ヲ摩擦スル法ヲ試ムルモ可ナリ時トシテ不充分ナル浴法ヨリ却テ諸症ノ輕快ヲ告グルイアリ藥劑ニハ規那安知比林安知武林及ビ冷水纏絡等ヲ施ス腦症アル者ニハ頭部ニ氷囊ヲ置キ口内ヲ勤メテ灌嗽シ鼻内

ヲ洗ヒ又膿瘍生スレバ速ニ切開排膿シテ消毒ヲ嚴ニス腎臟炎ノ併發スルハ本病ノ經過中ニ於テ感冒ニ罹ルカ未ダ醫師ノ許可ナクシテ既ニ病床ヲ離ルカ又ハ食餌不攝生等ニ因ス故ニ本病ハ醫師ノ許可ナキ時ハ勿論然ラザルモ全四週日ヲ經過スルニ非ラザレバ決シテ病床ヲ離ル可ラズ如此スルトキハ同時ニ感冒ノ豫防トモナルベシ又食餌ハ管ニ消化不良ノ物ヲ取ル可ラザルノミナラズ凡テ刺戟性ノ者假令バ辛味酒類等モ禁止スベク成ル可ク消化シ易キ粥食牛乳肉汁等ヲ用フ可シ

既ニ腎臟病ヲ發セル者ハ上記食餌ニ注意シ且ツ毎日列氏三十度乃至三十五度ノ温浴ヲ取ラシメ次テ「ラチル」毛巾等ニテ全身ヲ纏絡シ一二時間發汗セシムベク藥劑トシテハ醋劑等ノ利尿劑ヲ投與スベシ或人ハ此場合ニ利尿藥ヲ用フルハ益々腎臟炎ヲ強ムル者トシテ比難スレモ理論ハ必シモ實際ト合セズ利尿劑ノ効アルハ爭フ可ラズ加之時トシテ患者ノ衰弱セシ爲メカ其他ノ事情ノ爲メ浴ヲ取ラシメ得ザル場合ナシトセズ假令バー二ノ小兒ノ如キハ温浴後ニ痙攣ヲ起シ尿量

醋劑那篤留母(二)
五
一〇〇〇
水
一
日數回一小匙

ハ依然トシテ少ク蛋白ノ量亦變ゼザルガ如キ時多量ニ醋剝ヲ處スル
トキハ効顯ヲ奏スルヲアリ上記諸方ヲ施スモ尙其効ナキハ發汗劑
トシテ、ビロカルビンヲ内服又ハ皮下注射スルモ可ナリ

風疹 Rötheln

内服處方
ビロカルビン 〇・三〇
右一回頓服
注射處方
ビロカルビン 〇・一〇
右一回注射ス
〇・五〇
〇・二〇

本病ハ急性傳染性ノ發疹ニシテ其病毒ハ未詳ナレモ外皮及處々ノ粘
膜ニ局在シ甚ダ麻疹ニ似タル疹ヲ生ス一般症狀熱及他ノ障害全クナ
キヲアリ或ハ甚僅少ナルヲアリ故ニ古來本病ヲ以テ輕キ疾病トナシ
深ク意ニ介セザリシ所以ナリ本病ハ殆ント小兒ニノミ來リ一回之レ
ニ罹レバ全ク免疫質ヲ得

原因

本病傳染ノ經路ハ病毒及ビ其媒介者ト共ニ不明ナリ小兒ノ
素因及ヒ病毒ノ揮發性ハ麻疹ニ於ケルヨリ少ナキガ如何トナレ
ハ數多ノ小兒ヲ有スル家族ニ於テモ唯其一二之レニ罹ルノミナルガ
故ナリ乳兒モ亦胃サル而シテ素因ハ春期發動期ニ至ルニ從ヒ漸次減
少ス潜伏期ハ二乃至三週間ニシテ其間ニ一ノ苦痛ヲ訴フルヲナシ前

驅期ハ缺除ス

症候

尤モ初メニ現ハル、症候ハ焮衡性ニシテ鼻加管兒嘔羞明眼
臉結膜炎輕度ノ嚔下困難多少ノ咳嗽等ナリ粘膜ハ發赤シ時トシテハ
斑狀ヲ呈ス數時ノ後顔面頭及ヒ其他ノ部分ニ於テ赤クシテ多少隆起
セル斑ヲ現ハス此斑ハ壓ズルハ褪色スレモ時トシテハ又出血性ナル
ヲアリ又此斑ハ決シテ多角形ナラズ麻疹ノ斑ヨリ小ニシテ其色甚タ
赤ク時トシテハ青赤色ヲ呈スルヲアリ其存在ハ甚短カクシテ半日ヲ
過クレハ消失シ又新鮮ナルモノヲ生ス發疹ノ前ニ熱アリシモノハ發
疹ト共ニ下降ス二三日ノ后ニ全經過ヲ終リ發疹ハ褪色ス又本病ニハ
剝皮スルヲナシ、

豫後

良

診斷

甚タ麻疹ニ似タレモ麻疹ニ在テハ其斑大キク且末期ニ剝皮
アリ熱ハ發疹ト同時ニ下ラス猩紅熱ハ前項ニ述ヘタルカ如シ、

療法

殊ニ云フヘキモノナシ、

痘瘡 Pocken

本病モ亦急性直接傳染病ニシテ、多クハ一回經過スレハ免疫質ヲ得本病ノ病毒モ全ク人生ノ交通ヨリ傳搬スルモノニシテ決シテ特發スルモノニ非ズ、其性ハ麻疹猩紅熱等ノ病毒ニ等シク人體ニ進入スレバ一般症狀ヲ害シ熱ヲ生シ遂ニ外皮ニ局在ス本病ノ病毒ヨリ生スル刺戟ハ兩者ニ於ケルヨリ強ク單ニ充血及ヒ僅少ノ浸潤等ニ止ラズシテ癩瘡ヲ生シ多數ノ固有ナル膿胞ヲ形成ス而シテ傳染性病毒ハ此膿胞中ニアリ

原因

近來一二ノ學者ハ本患者ノ膿中及ヒ血液中ニ丸キ小球狀ノ病原ヲ發見セリト稱スレモ未ダ純粹培養及ビ試驗的證明上成蹟陰性ナリ、然レモ本病毒ノ有機培養ニシテ膿胞中ニ存在スルハ疑ナキガ如シ本病毒ハ甚ダ揮發性ノ者ニシテ感染傳搬特ニ容易ナリ其感染スルヤ患者ニ接觸スレハ、勿論然ラサルモ、唯患者ト同病室ニ在リシノミニテ既ニ感受スルハ多クノ實驗ニ於テ證明スル處ナリ之レ外氣中及ヒ

患者ノ呼氣中ニ病毒ヲ含有スルガ故ナリ故ニ流行地ヲ隔ツルニ遠ク且ツ換氣善良ナル所ハ、本病傳染ノ危險少ナシ、而シテ本病毒ハ疾病ノ前驅期及ヒ甚シキハ、潜伏期ニ於テ、既ニ存在ス、膿胞ノ混濁セルキハ尤モ濃厚ナルキナリ血液中ニ本病毒ノ存在スルハ疑ハシキモ胎生兒ノ母體ヨリ傳染スルコトアルヲ以テ見レバ、血液モ亦一種ノ傳搬者ナルコトハ事實上認め得ベキガ如シ、然レモ若シ病ノ各期ニ於テ、血液中ニ病毒存在スルモノトセバ多數ノ胎兒ハ之レニ罹ラサルヲ得ザル理ナルニ、事實ハ之レニ反シテ、胎兒ノ之レニ罹ルハ寧ろ例外ナルモノナリ、一二ノ學者ハ母ノ本病ヲ患ヒザルニ胎兒ノ本病ニ罹リシモノアルヲ實驗セリト稱ス、然レモ此ノ如キ場合ニ於テハ母体外見上感受セザリシガ如クナルモ或ハ無膿胞性痘瘡ニ罹リシヤ否ヤハ明カナラズ、然レドモ此ノ如キ事實ハ概テ無稽トノミ擯斥スベキニ非ズ、學說ノ一定セザル丈ケ諸種ノ臆說ヲ顧慮セザルベカラザレバナリ排出液ヲ以テ接種スルニ其成蹟陰性ナリ、病毒ハ第三者書簡等ニ依テ運搬サレ又屍體モ尙ホ傳染病性ヲ有スルガ如シ、病毒抗抵ハ甚ダ大ニシテ高熱ニ非ラザレ

ハ之レヲ殺スヲ得ズ寒冷ニハ稍鋭敏ナルガ如シ時トシテハ傳播ノ經路詳細ニ確知シ得ラル、トモアリ、然レモ時トシテ全ク然ラズシテ却テ特生說等ノ出ル、トモアリ、多分ハ肺ヨリ吸入サル、カ、口ヨリ嚥下サル、カ、ニ依テ感染スルナラン、個人的素因ニ付テハ各人大差アルヲ見ズ、然レモ一時ノ誤謬ヲ生ズルハ二者及ビ接觸者ハ健全ニシテ却テ之ヲ第三者ニ傳染セシムル場合ニアリ、醫師及ビ看護者ノ如キ屢々病者ニ接スル者ハ、危險亦從テ多シ、種痘ハ數年間ノ免疫質ヲ與フ、本病ハ時トシテ數回犯サル、トアレモ度數ノ増スニ從テ、病勢ハ減少ス、慢性病患者ニ對スル素因ハ少シモ減セサレモ、急性病ヲ患フル者ハ多少減ズ、然レモ本病ハ又室扶斯肺炎麻疹等ノ經過後ニ來リ又之ニ反シテ本病ノ癒後ニ室扶斯肺炎等ヲ繼發ズル、トアリ若シ然ルトキハ多少ハ本病ノ下降期ニ發ス一歳以下ノ小兒ノ本病ニ罹ルハ稀レナリ、二歳以上四十歳迄漸次素因増シ夫レヨリ以上ハ又減少スレモ老人ト雖モ、免疫ヲ得ス妊婦產褥中ニアル婦人モ亦敢テ他ト異ナル、トナシト雖モ、只多少重キノミ、

性、人種氣候土壤ノ關係等ハ、毫モ素因ニ影響ナシ本病ハ散在性地方性及ビ流行性ニ來ル潜伏期ハ平均十乃至十二日間ナリ、

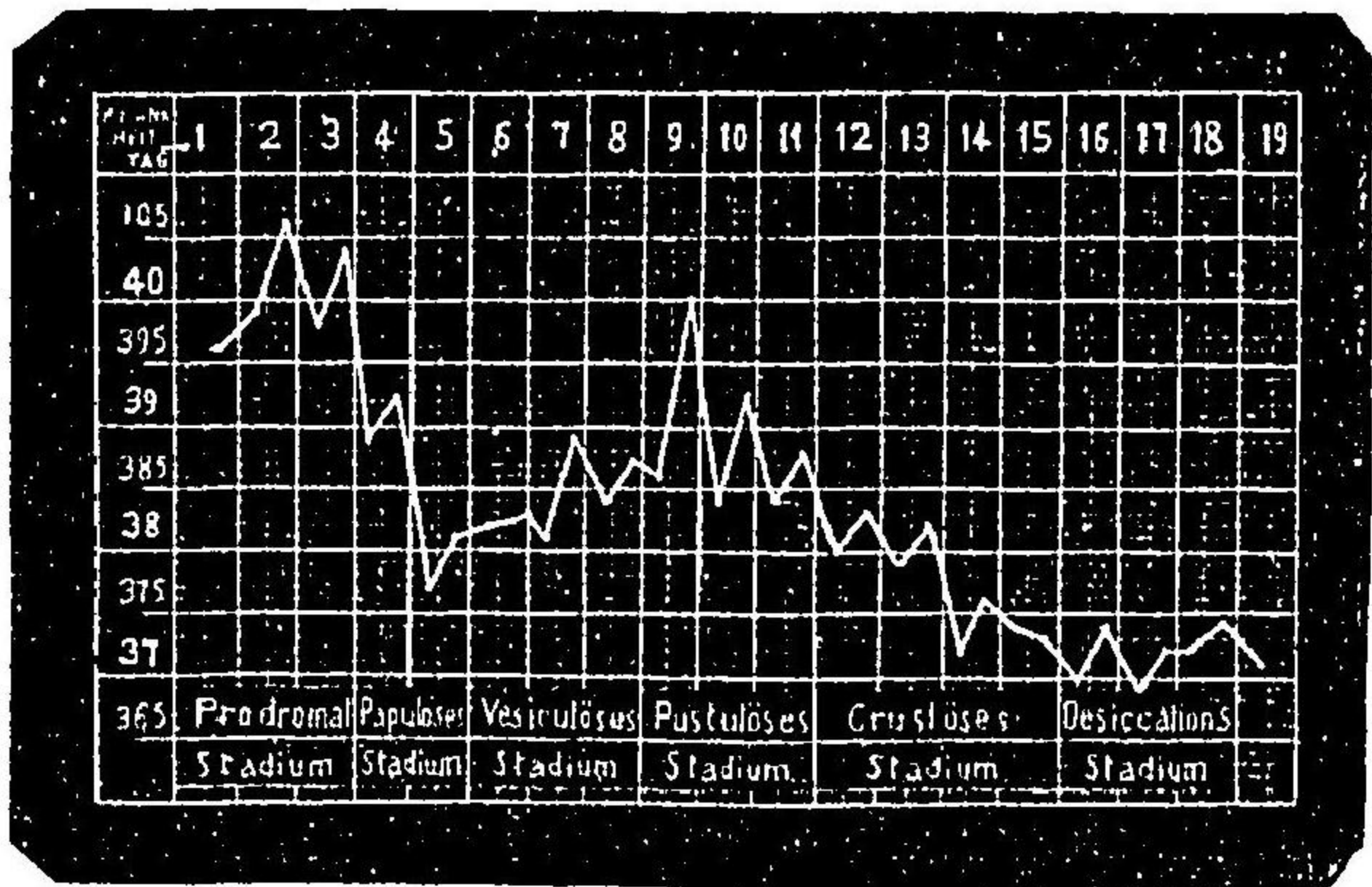
本病ニハ種々ノ變態アリテ各多少相違ノ點アリ而シテ本病ノ流行時ニ來ル、トアルモ、原因經過トモ異ナリ、

第一假痘 (Varioloid) 第二真痘 (V. vera) 第三密發痘瘡 (v. confluent) 第四出血性痘瘡 (v. haemorrhagica) 第五痘瘡性紫斑 (purpura variolosa)

病理 膿胞ノ發生及ビ構造ハ吾人ニ興味ヲ與フル、ト少ナカラス、如何トナレバ本病ノ固有ナルハ全ク此物ニ存スレバナリ初メニ本病ヲ

知ルハ赤ク限局セル小斑ニシテ是レ外皮諸所ノ乳頭ノ充血セルナリ、而シテ此者ハ速ニ單獨ノ平扁ナル結節ニ變ズ、結節ノ中央ニハ小ナル水泡ヲ生ジ初メハ透明ノ液ヲ滲藏シ房ヲ分ツ、故ニ一所ヲ穿刺スルモ唯其部ノ房水ノミ排除サレ全房ノ水出ヅル、トナシ、此部ヲ精査スレバ恰モ眞皮ノ表層若シクハ深層ニ微菌ノ窠窟アリテ之ノ働キニヨリ表皮ニ限局性ノ増大ヲ來セル者ニシテ内ニ漿液又ハ膿液ヲ充タシ細胞ハ漸次壞死シテ網工ヲ形成シ其網工ノ中央弛緩シ此部ノ上皮表面陷凹

第八圖 痘疹之熱型



百二十至婦人ハ百十乃至百三十至小兒ハ百三十乃至百六十乃至百算ス其熱症ニ伴フ症狀ハ諸關節ハ重感食氣減損不眠皮膚乾燥等ニノ又屢

シ以テ四窩即チ痘臍 Delle 生ズ
 發疹ハ多クハ表皮内ニ存シ
 眞皮ニ達スル者ハ治後深キ
 痘痕ヲ印スル者ナリ
 結痂期
 痘痕ヲ印スル者ナリ
 膿疱期
 症候 膿疱ノ潜伏期ニ於テハ一モ訴フル所ナシ
 前驅期 病ハ通常惡寒戰慄ヲ以テ初マリ數時ノ後熱ハ四十度ニ昇リ次日迄繼續ス時トシテ四十度五分四十度八分ニ達シ朝夕弛張ス脈搏ハ熱ニ正比シ男子ハ百乃至

腰部疼痛

々嘔吐惡心等ヲ伴ヒ神經性ノ患者ハ早時ニ嗜語等ヲ發スルヲアリ殊ニ本病ニ著明ナル症候ハ全發熱時中繼續スル烈シキ頭痛及ヒ腰部疼痛之ナリ時トノ此疼痛ハ四肢ニ蔓延スルヲアリ而シテ此疼痛烈シケレバ夫丈ケ密發痘瘡ガ出血性痘瘡ニ疑フ置クベシ又疑ハシキ原因ナクノ呼吸息迫ヲ來スハ單純ニ便秘ノ爲メナルヲ屢々アリ此等諸種ノ症狀ハ次日ニ一層烈シク舌ハ白苔ヲ以テ被ハレ口氣惡臭ヲ帶ビ尿ハ減シ蛋白ヲ含ム如此症狀ヲ呈スルヲ見バ益々出血性痘瘡ニ疑ヲ置テ可ナリ精神多クハ明亮ナレトモ時トノ昏迷ニ陥リ疼痛ノ爲ニ運動シ得サルニ至ルヲアリ患者ノ中ニハ脾ヲ觸ル者アリ第二日或ハ第三日ニ鼻、眼、瞼、扁桃腺ノ痲衝ヲ生シ粘液膜ハ腫脹シ一般ニカ或ハ斑狀ニ發赤シ精査スレバ既ニ粘膜發疹ヲ認メ得ベシ或ル流行時ニハ既ニ前驅期ニ於テ赤色又ハ暗赤色ノ疹ヲ大腿内面膝關節肘關節ノ外面及ヒ其他ノ體部ニ認ムルヲアリ又多クノ場合ニ於テハ大腿及ヒ鼠蹊部及ヒ上腭等ニハ赤色ノ皮下出血アリテ後ニハ暗紅色ト變スルヲモアリ此紅斑ノ發疹期ニ消失スルハ寧ろ豫後良ナリ如何トナレハ多クハ如此者

發疹期

ニハ假痘繼發スレバナリ前驅期ハ二三日間ニノ次ノ發疹期ニ移ル
 發疹期 第三日或ハ第四日口、顔面、額目ノ周圍、上唇、及ヒ頭部、頸部ニ小
 ナル紅斑ヲ生ス、此紅斑ハ直ニ固キ扁平ナル結節ニ變ス、此時瘙癢及ビ
 燃焦ノ感ヲ生ス、此斑ハ數時間内ニ多クハ其他ノ諸部ニ漫延シ、始メハ
 僅少ナレモ漸次新生スルカ故ニ大ニ其密度ヲ増ス、柔軟ナル表皮ヲ有
 スル場所ハ發疹特ニ饒多ニノ指、足趾、手掌等ニハ特ニ多シ、顔ハ特ニ甚
 シク胃サレ、發疹ト同時ニ熱ハ下リ、熱候ニ伴フ諸種ノ苦痛及症狀ハ殆
 ント消失ス、皮膚ニ發疹ノ生スルト同時ニ口、咽頭等ノ粘膜ニモ生ス、此
 ノ如キ粘液膜ノ發疹ハ輕症ニ於テハ多クハ外皮ノ發疹ヨリ早ク消散
 スルモノナリ、又此膿胞ハ管ニ上記ノ場所ノミナラス、喉頭及ビ氣管枝
 ノ粘膜ニモ發生シ、爲メニ嚥下困難、音嘶濁等ヲ生ジ、甚シキニ至テハ、
 音聲ヲ發スル能ハサルニ至ル、若シ痘瘡甚ダ密ニシテ深く眞皮ヲ胃ス
 キハ發疹ト共ニ熱ハ下降セズ、例令降ルモ甚タ僅カナリ、併發病アルハ
 モ、又然リ、第三日目ニ尖頭ヲ有セル結節ノ上部ニ透明水様ノ液ヲ蓄フ、
 此者ハ廿四乃至三十六時間ニ至レハ豌豆大ニ達シ第六日或ハ第七日

化膿期

マデニ其内容ハ混濁シ、遂ニ全ク膿様トナリ、而シテ化膿期ニ達ス、膿胞
 ノ間ニアル皮膚ハ、赤色ヲ帶ビ、且ツ強ク腫脹シ、顔面ノ如キハ殆ント別
 人ノ像ヲナス、柔軟ナル結締織ヲ供ヘ、多少餘裕アル部分、例ハ目ノ周
 圍、等ニ水腫ヲ來シ、殆ント目ヲ開キ得サルニ至ル、又多少堅固ナル組織
 ヲ有セル部分ニシテ、一モ餘裕ナキ所例ハ頭皮、指、足趾、手掌、等ニアリ
 テハ腫脹シ得サルカ故ニ、甚シク疼痛ヲ生ス、皮膚ノ焮衝ハ、全ク其位置
 ニ關ス、化膿スルト同時ニ、熱ハ再ビ高昇シ、中等度ノ重サニ於テハ弛張
 シ、夕ハ三十九度五分乃至四十度朝ハ三十八度五分乃至三十九度五分
 アリ、而シテ熱ト共ニ以前ノ苦痛ハ止ミ、不眠、食氣、缺損等モ常ニ復シ又
 粘膜ヨリ生スル症狀即チ嚥下困難ノ爲メ食物鼻孔ヨリ還歸スル、及
 ビ音聲嘶濁等モ亦消散ス、然レモ懸殊水腫ノ危險ハアリ、此時ニ於テ
 尤モ恐ルヘキハ精神混濁ト迷想ナリトス、故ニ此ノ如キ時ハ注意シテ
 看護セサレハ患者ハ自殺ヲ企ツルコトアリ、化膿期一二日續キシ後病ノ
 十或ハ十二日目ニ焮衝的腫脹ハ去ル、發疹ノ尤モ古キ場所ハ膿胞内容
 乾燥シ或ハ膿胞破裂シテ内容ヲ洩ス、然ルキハ膿胞ノ壓力去ルカ故ニ、

密發痘瘡

皮膚ノ循環ハ良好トナリ發疹間ハ皮膚ノ赤色及ヒ腫脹ヲ減シ、水腫ハ
 吸收サル、頭痛及ヒ堪ユヘカラサル緊脹ヲ去リ、痒感モ止ム、膿胞ハ乾燥
 シ内容ハ排出サレテ結痂ヲ造リ上皮ヲ以テ被ハル乳頭ノ残留セル部
 分ハ再ビ皮膚ヲ發生シ、或ハ物質ノ缺損ハ癩痕ヲ以テ充タサル、又粘膜
 ノ腫脹モ去リ其潰瘍モ皮ヲ以テ被ハル、又乾燥ト共ニ熱及ヒ是レヨリ
 生スル症候ハ去リ、患者ハ快復期ニ移ル、發疹ヨリ十四日ヲ經テ結痂ハ
 脱落シ、後ニ赤クシテ多少隆起セル癩痕ヲ生シ、此者ハ後ニ白色ニ變ジ
 收縮シテ醜形ヲ呈ス、皮膚ハ長キ間色素ノ爲メニ彩色サル、
 密發痘瘡 (V. Confusus) 此症ノ前驅期ニハ熱高ク腰痛激ナリ、發疹ハ甚タ
 速ニシテ屢々顔面ト軀ト同時ニ發スルヲアリ、然レモ顔面ハ特ニ密ナ
 リ、又粘膜モ著シク犯サレ、一般症狀モ害サル、極盛期ニ至レバ、顔面ニ數
 ケノ水泡ヲ生シ、手足ノ關節ハ著シク隆起ヲ生ズ、又粘膜ノ腫脹非常ナ
 ルヲアリ、舌ノ腫脹甚シクシテ、口腔ヲ充塞スルニ至ルヲアリ、嚥下ハ殆
 ントナシ得ズ、鼻孔通ゼズ、時トシテハ音聲全ク發シ得サルニ至ルヲア
 リ、口腔、咽頭ノ壞疽粘膜下ノ膿潰、軟骨膜炎、聲門水腫等ヲ生シテ患者ヲ

假痘

出血性痘瘡

危險ニ陥ラシムルヲアリ、若シ脈衝ステーション氏管ニ蔓延スレバ遂ニ
 耳下腺炎ヲ起シ、歐氏管ニ延行スレバ、鼓膜穿孔兼重聽ヲ發ス、嘔吐、下痢、
 蛋白尿、粟粒膿瘍、癩丹毒、結組織炎、皮膚壞疽等ハ患者ヲシテ衰弱セシメ
 續テ心臟麻痺ヲ生セシメ易ク、爲メニ死ノ原因ヲナシ、若シ幸ニシテ治
 癒スルモ、癩痕ノ爲メニ大ニ醜狀ヲ呈シ通常禿頭トナル、
 假痘 (variolois) ハ痘瘡ノ輕症ナル者ニシテ、多クハ種痘セル者ニノミ見
 ル者ナリ、前驅期ハ通常輕キ者ナルモ、時トシテ急劇ナルヲアリ、又屢々
 此時期ニ於テ紅斑様ノ疹ヲ生ス、又假令ヒ發疹ハ饒多ナルモ、關節ハ消
 失スルヲアリ、化膿スルヲハ殆ンド稀レナリ、熱モ低ク稀レニハ三十九
 度ヲ超ユ粘膜ノ疹ハ僅ニ其跡ヲ印スルノミ、
 出血性痘瘡 (var. haemorrhagica) 種痘ヲ施サス且ツ虛弱ナル人ハ此治癒
 シ難キ症ニ犯サレ易シ、前驅期ニハ頭痛、腰痛及ビ紅疹等ヲ生ジ、高熱、
 語等ヲ發スルヲアリ、而シテ此出血ハ、疹生シテヨリ、病ノ如何ナル時期ニ
 於テモ來ル者ニシテ、其他尙鼻、口腔、胃、腸、腎臟子宮等ヨリ出血スルヲア
 リ、其死因ハ心臟麻痺、虛脫等ナリ

尤モ悪性ナルハ痘瘡性紫斑 (purpura variolosa) ニシテ種痘セル人ニモセザル人ニモ又強壯ナル人ニモ虚弱ナル人ニモ來ル前驅期症狀甚タ重ク軀體四肢ニ廣汎ナル猩紅熱紅ヲ呈シ初メハ單一ノ充血ナレモ後ニハ皮下出血トナリ皮膚ハ遂ニ青黑色ヲ呈シ諸種ノ組織及ヒ器臟ヨリ出血シテ數日ニシテ死ス

同シ流行時ニ於テモ症候皆同一ナル者ハ少シ假令バ發疹ノ初メ軀體及ビ四肢ニ生ジ後ニ顔面ニ生スルコトアリ又發疹ノ甚タ僅少ナルカ或ハ全クナキコトアリ從テ其經過モ各一様ナラズ

(併發及後發病)

併發病ハ密發痘瘡ノキ述ベタリ今其尤モ必

要ノ者ノミヲ列舉セン

- 外皮 膿腫、癰、丹毒、褥瘡、壞疽、鬼甜症、
- 眼 結膜炎、角膜炎、虹彩炎、
- 耳 耳炎、鼓膜穿孔、聾、
- 喉頭 軟骨膜炎、聲門水腫、實扶的里性潰瘍、
- 呼吸器 鼻臭、實扶的里軟骨骨疽、肺炎、胸膜炎、

- 心臟 心膜炎、膿潰性心内膜炎、
- 消食器 胃及腸加答兒赤痢、
- 腎臟 腎臟炎、

此他肝臟ノ退行變性關節炎、骨膜炎等ヲ起ス

中樞神經系播種性脊髓炎、等

診斷

若シ傳染セル確證アルニアラサレハ前驅期ニ於テ本病ヲ診斷スルコトハ容易ナラズ唯腰部疼痛ハ尤モ其主徵候タリト雖モ時トシテ輕々ニ附シ去ラルコトモアリ發疹期ノ初メニ於テハ麻疹及ビ發疹窒扶斯ト誤リ易シ其後直ニ來ル結節ノ水泡ヲナセル者ヲ見レバ又疑フ所ナシ又梅毒性疹ト誤ルコトアルモ梅毒性ノ者ニアツテハ痒感及熱灼ノ感ハ全ク缺ケ一般症狀甚ダ害サル

(豫後)

通例前驅期ノ症狀重キ者ハ豫後甚不良ナレモ例外トシテ前驅期症狀非常ニ烈シクシテ豫後ノ却テ善良ナルコトアリ加之假痘ニシテ前驅期症狀ノ甚タ重キコトモアリ然レモ一般ニハ前驅期症狀ノ輕キ者ハ又豫後ノ良好ヲ希望シ得ベシ前驅期ニ於テ紅斑性ノ發疹アルハ

多クハ豫後良ナリ、密發痘瘡ハ死亡數夥多ナレモ、一ニノ快復者ナキニ
 アラズ、出血性痘瘡及ヒ痘瘡性紫斑ハ概シテ死ニ歸ス、體格良好ノ者本
 病ニ罹ルトキハ虛弱者、妊婦、產婦ニアル婦人等ノ罹レルヨリ、豫後ハ良
 ナリ、種痘ノ善感セル後ニハ、多ク本病ニ犯サレズ、偶々犯サル、コトア
 ルモ假痘ニシテ終ル、小兒、老人ハ死亡數多シ

療法(豫防) 確實ニ本病ヲ診斷セバ直ニ之ヲ隔離シ、受持醫師ヲ定

メ、且ツヨク薰陶サレタル看護者ニ附シ、此等ハ皆完全ニ消毒セルニア
 ラザレバ健康者ト接セシメザル様ニス、若シ學校ニ本病ヲ發セバ直ニ
 其學舎ヲ閉ツベシ、人民ノ集合、祭禮、公告(數多ノ人民ヲ集メ官私
 報告ヲナスヲ云フ)等ハ本
 病流行時ニアツテハ禁ズベシ、虛弱ノ小兒及ヒ乳兒ハ可成流行地ヲ避
 ケシムベシ、患者ノ在リシ居室ハ、充分ニ消毒シ、天井、歩床ハヨク磨キ、室
 内ハ高熱ニ熱シテ、後ヨク空氣ヲ流通セシムルカ、或ハ石炭酸水ヲ以テ
 洗拭ス、未タ種痘セサル小兒アラバ、直ニ接種セシメ、一回接種シテヨリ
 五年以上ヲ經過セバ、再種セシムベシ、
 既ニ本病ニ罹ラバ、清涼ナル室ニ靜臥セシメ、消化シ易キ食餌ヲ取ラシ

メ、粘膜ニ發疹生スルニ至レハ、流動性ノ冷キ食物ヲ與フ、本病ニ對シテ
 ノ特效藥未タ發見サレサルヲ以テ、處置ハ唯待期的對症療法ニ止ル、高
 熱アレハ全身冷浴、冷水纏繞、規那、安知必林、安知武林等ヲ與フ、腰部疼
 痛アル者ニハ先ツ水楊酸曹達及ヒ安知必林ヲ試ムベシ、鹽酸莫比(O)
 一) 皮下注射ハ同時ニ嘔感ヲ靜メ得ベシ、頭痛、噁妄等アル者ニハ頭部
 ニ水囊ヲ置ク、極盛期ニ達セバ、其尤モ豐滿セル者ハ數ヶ所ヲ穿刺シ、其
 基底ハ硝酸銀液ニテ腐蝕ス、皮膚ニ華攝林ヲ塗布スルハ、表面ヲ軟カニ
 シ、其緊張ヲ弛ムルノ効アリ、又空氣ニ晒ラシ乾燥ノ傾キアル部ハ、脂肪
 或ハ軟膏ヲ塗布セル布片ニテ掩フヲヨシトス、又皮膚ノ痲衝高度ニシ
 テ苦シム患者ニハ、持續性ニ微温湯ノ浴ヲ取ラシムレバ、輕快シ得ヘシ
 即チ滿載セル浴槽中ニ敷布ヲ入レ、其周邊ヲ槽ノ周邊ニ固定シ、布ハ中
 間ニ浮在セル如ク裝置シ、其上ニ患者ヲ臥サシムルナリ、痒感盛ナル者
 モ如此スレバ大ニ輕快スル者ナリ、又甚シキ痒感アル者ニハ次ノ如キ
 溶液ヲ皮膚ニ塗布シ、後澱粉ヲ撒布ス、即チ

酒精 二〇〇〇 依的兒 五〇

廣利設林二五

口内洗滌用ニハ水微温湯消毒劑石炭酸撒爾知兒酸ヒノリンチモ
ル等ヲ用フ心臟衰弱ニハ酒コンヤクシヤンパン等ノ興奮劑ヲ投ズ膿
瘍病等生セバ速ニ切開スベシ聲門水腫ニハ粘膜ノ亂切或ハ氣管切開
等ヲ行フ

(種痘)

種痘ノ必要ハ醫師ト素人トヲ論セス既ニ一般ノ承認スル所
ナリ敢テ又喋々ヲ要セズ見ヨ殆ント一世記前ニアリテ痘瘡ノ吾人々
種ヲ侵害セシ狀ハ到底今日強制種痘ノ制アル邦家人民ノ想像シ得ザ
ルヲナルヲ當時痘瘡ノ死亡數ハ約五〇%ナリシモ今日ハ〇七乃至一
%ニ減ジタリ歐洲大陸尙往々痘痕歷然タル壯者ヲ見サルニアラスト
雖凡多クハ是レ邦家ノ制度宜シキヲ得ザルノ罪ニシテ吾日本ノ如ク
近時強制種痘ヲ施スニ至テ著シク痘瘡患者ノ數ヲ減シタルモ尙途上
痘痕アル者ヲ見ルヲ管ニ四五ニシテ止マラズ若シ夫レ種痘ハ痘瘡ヲ
豫防シ得ルガ爲メニ人文開明ノ邦家ニハ其施行制度モ完備シ本病患
者ノ著シク減ゼルヲ以テ之レガ反言ハ痘痕者ノ多キハ人文不開ノ地

ト云フヲ得ルニ至テハ豈ニ戒心セザル可ケンヤ

明治以前ノ老者ハ問ハズ吾人至當ノ教育ヲ受ケテ匙ヲ取り方ヲ處ス
ルニ當リ政府亦制度ノ完備セルアリ豈ニ又痘神ノ漫行ヲ許サンヤ勉
メザルヘカラスト云フベシ強制種痘ノ制ヲ國民ノ態度ヨリ云ハハ稍
不面目ナルガ如キモ其効果ハ争フヘカラサル者アリ此制度アルバイ
エルンハ住民百万人ニ付キ一人ノ痘瘡患者アル比例ナルニ此制ナキ
白耳義ノ如キハ百万人ニ付キ二百三十四人ノ割合ナルニテモ知ルヘ
シ

種痘ハ世人ノ知ル如ク千七百九十二年五月十四日英人エゼンナーノ
倫敦ニ於テ發見セシ處ニシテ爾來今日ニ至ル迄多少方法ノ變化ハ來
シタルモ其主義ニ至テハ千古不滅ト云ハサルヘカラスト之ニ類セル法
ハ遠ク支那印度地方ニモアリテト稱シ輕症ノ痘瘡ニ罹レ
ル者ノ襯衣ヲ着シ或ハ其痂皮ヲ鼻中ニ押入シテ故ニ感受シタリ其期
スル處ハ其原病者ノ如ク痘瘡ノ輕カラシヲ希フニアレト結果ハ固
ヨリ往々ニシテ希望ニ添ハズ加之ヨシ其者自ラハ豫防ノ目的ヲ以テ

ストハ云ヒ、感受シタル以上ハ、既ニ本病患者ナレバ隔離ヲ要スト雖モ、當時如此注意少カリシ爲メ却テ傳播ノ媒トナリシヲアリ、又西洋ニテハ古ク人間ニ發スル痘瘡ト同性質ノ者ノ動物特ニ牝牛、馬、羊等ニモ發シ就中羊ノ痘瘡ハ重クシテ熱高ク發疹全身ニ生ジ、牝牛ハ大ニ輕クシテ乳房部ニ局發スルヲモ知レ渡リ居レリ、奇トスベキハ此病牛ノ乳ヲ搾ル人夫ハ知ラス識ラズ痘瘡ヲ經ルガ爲メカ痘瘡ニ罹ラサルヲナリ、之レ蓋シ善那ガ偉業ヲ成セシ基ナリトス、

種痘術ニ用ユル痘苗ニ種々アリ、

(第一)人痘 Humanisite Kuhlymph

種痘ノ感染セル患部ノ膿疱内容ヲ集メ、之ヲ他ノ健康人ニ接種スル者ニシテ、或ハ之ヲ品物ニ集メズ、患者ノ膿疱ヨリ直ニ被接者ニ施スモアリ理論上ヨリ云ヘバ、不絶如此シテ人ヨリ人ニ移ストキハ、痘苗ノ永久絶フルヲナシト云フヲ得ヘシ、然レモ此人痘接種ハ往々他ノ傳染病ヲ傳フルノ恐アルヲ以テ、今日用フヘキ者ニアラス、若シ用フル場合ニハ等量ノ炭、里斯林、蒸餾水ヲ混シテ四倍稀薄ノ者トシテ用フ、

(第二)源造的痘苗 originäre Kuhpockenlymph

天然牝牛ニ痘瘡ノ生セルトキ、其膿疱内容ヲ集メタル者ニシテ之レハ甚々稀レニシテ實用ニ供スルニハ供給足ラス、又時トシテ高熱ヲ生シ丹毒様ノ症状ヲ呈スルヲアリ、

(第三)復種の痘苗 Retrovaccinationslymph

前ノ如キ牛痘ヲ人間ニ接種シ、其膿疱内容ヲ又種ノ小膿ニ接種シテ得タル者ニシテ今日普通ニ用フル牛痘ハ即チ之レナリ、之等牛痘ヲ貯フルニハ硝子ノ小管ニ入レ兩端ヲ封蠟ニテ固封ス、

種痘ニ依テ生セル膿胞中ノ毒素ト、痘瘡ノ毒素トハ、其及ボス處自ラ異ナリ、甲ハ局處ノ症状ノミニ止マリ、乙ハ之ニ兼スルニ一般症状ヲ以テス、種痘ヲ接種シテ痘瘡ノ豫防タラシムルハ、種痘胞ノ完結スル迄他ノ症状ヲ呈セザル者ニ限ル、既ニ痘瘡ノ前驅期ニ在ル者ニ接種スルモ効ナシ、故ニ種痘ハ痘瘡ヲ中絶スルニ堪ヘザル者ナリ、然レモ種痘ノ潜伏期ハ四乃至五日ニシテ痘瘡ノ潜伏期十乃至十二日ニ比スレバ短キヲ以テ本病ニ感染セルヲ早ク前知シ、其前驅期ニ達スル迄ノ日數種痘潜伏期日ヨリ長キ時ハ之ニ種痘ヲ試ムルモ可ナリ、

(種痘術)器具。種痘針。諸種ノ形狀アリ術式ニ依テ異ナリ古來用

復種の痘苗

痘瘡ノ前驅期ニア
ル者ニ種痘スルモ
効ナシ

人痘

原造的痘苗

ヒ來リシ柳葉狀針ハ刺種ニ用ヒ薄クシテ彈力アリ近時切種ニ用フル者ハ柳葉狀針ニ比スレバ肉厚ク及鈍ナリ是レニモ諸氏ノ形式アレハ必竟慣レタル者ヲ用フルヲ最良トス

施術ノ順序 先ツ施術三十分前程ニ針ヲ2%硼酸水中ニ浸シ後被種者ノ左上膊ヲ探出セシメ石鹼ヲ以テ其不潔ヲ去リ硼酸水ヲ以テ消毒シ消毒セル布片ヲ被ヒテ施術ヲ待ツ如此シテ痘苗ヲ貯苗板ニ移シ若シ切種セントスル場合ニハ針ニ痘苗ヲ附シテ上膊ノ外面恰モ三角筋ノ停止部下ニ縱ニ二仙米位ノ切線ヲ二線施シ交互ノ間ハ少クモ一仙米存スル様ニス又交叉切種ヲ行フ場合ニハ同部ニ約一仙米ノ交叉切線ヲ施シ年齢ニ應ジテ三箇ヨリ六箇作ルヘシ切種中ニハ此交叉切種ハ効アリト信ズ接種後ノ處置ハ敢テ特記スル程ノコナシ若シ小兒等ノ無意議ノ者ナラバ局部ヲ布片ニテ輕ク卷キテ發疱ヲ保護スベシ尙詳細ノコハ特ニ摘載センヨリハ内務省甲第九號ノ達シヲ見ルヲ提徑トス同號ニ曰ク

内務省甲第九號

警視廳 府縣

明治十三年(丑)當省乙第三十六號達傳染病豫防心得書附録トノ種痘施術心得書左ノ通追加候條此旨相達候事

明治十八年三月廿四日 内務卿 山縣有朋

種痘施術心得書

種痘術ヲ施ス者ハ種痘ノ適否接種ノ方法痘苗ノ採取及貯蓄ノ法善感不善感ノ鑑別種痘ノ注意等ヲ詳知セザル可ラス其要左ノ如シ

第一 種痘ノ適否

- 第一條 種痘ハ左ニ掲グル者ニハ施サザルヲ可トス
 - 一 生後七十日ヲ經ザル者
 - 二 種痘ノ爲メニ一時増進スベキ病患アル者
 - 三 丹毒流行ノ土地ニ居住スル者
 - 四 蔓延性ノ皮膚病アル者
 - 五 熱性病ニ罹リ居ル者
- 第二條 種痘ニ適スル時季ハ春(二月四月五月)秋(九月十月十一月)二季共ニ之ヲ施シテ妨ナシ

第二 接種ノ方法

第三條 種痘ヲ施スハ上膊三稜筋ノ停ニ於テ各三針乃至五針痘受者ノ年齡體質等ニ隨フトシ各針ノ距離曲尺五分以上ニシテ痘瘡ノ暈輪互ニ密接セザル様注意スベシ

第四條 施術ニ先チ針先ヲ拭淨シ一時ニ數人ニ接種スルキハ一人毎ニ之ヲ拭淨スヘシ

第五條 良性ナル痘漿ヲ採リテ種痘スルヲ確實ノ良法トスレバ此法ヲ行フコト能ハザルキハ貯蓄ノ痘苗ニ成ルベク新鮮ナル者ヲ撰ビ用フベシ但痂皮ハ用ヒザルヲ可トス

第三 痘苗採取及貯蓄ノ法

第六條 痘苗ハ左ニ掲グル者ヨリ採取スベカラズ

一 痘瘡ノ成形過度及過大ノ者、發量非常ニ大ナル者、痘縁又ハ暈部ニ水疱ヲ生スル者

痘瘡非常ニ隆起シテ澄明ノ漿液ヲ漏出スル者

一種ノ疑フベキ色例之ハ紅藍色ヲ呈セルガ如キ者

但此等ノ異常痘瘡ノ近傍ニ在ル正痘モ亦全シ

二 痘漿ノ血液ヲ混セル者、痘ノ中央ニ在ル痘漿ノ腐敗ニ向ハントスル者、痘瘡ノ已ニ化膿ニ傾キタル者、爬搔又ハ摩擦ノ爲ニ痘瘡破潰セシ者

三 梅毒腺病及ヒ皮膚病ニ罹リ居ル者、營養不良ナル者

四 丹毒ヲ併發セル者、經過不整ニシテ不善感ノ疑ヒアル者

(第十四條參照スベシ)

五 天然痘ヲ經タル者、再三種ノ者

第七條 痘漿ヲ採ルニハ通常接種後第八日(二十四時間ヲ以テ)ヲ以テ佳トスト雖モ時候ノ寒暖及各人ノ性質ニ隨ヒ第七日又

ハ第八日ヲ以テ適度トスルコトアリ痘瘡ハ善感良性ノ者ニシテ其含包セル所ノ漿液ハ渾濁セズ粘稠露滴ノ如クナルベシ

第八條 痘漿ヲ採ルニハ痘瘡ノ中心ヲ避テ痘面ヨリ斜メニ淺刺シ深ク刺シ出血セシムベカラズ

第九條 發痘一類ナル者ノ痘瘡ハ其漿液ヲ採ルベカラズ又數顆

アルモ其一顆ハ傷クベカラズ
 第十條 痘苗ヲ貯蓄ノ接種ノ用ニ供セントスルニハ硝子板間ニ貯ヘテ密封シ又ハ硝子製毛細管ニ吸入セシメテ其兩端ヲ固封シ日光及寒熱ノ劇度ヲ避ケ貯フベシ(痘苗ノ貯蓄法甚宜シキヲ得ルキハ五箇月間充分ノ効力アリ)

第四 善感不善感ノ鑑別

第十一條 種痘ノ善感不善感ヲ鑑別スルニハ左ノ各項ヲ以テ要點トス

- 一 接種後第二日以内ニ成形ヲ始メシヤ否
- 二 痘疱常形ニシテ其大サ及硬サハ皮下共ニ全一ナルヤ否
- 三 紅暈ハ常形ナルヤ否
- 四 經過整然トシテ其時期ヲ誤ラザルヤ否
- 第八日ニ至リテ微熱ヲ發スルヤ或ハ然ラザルモ其他ノ微候ヲ呈スルヤ否
- 六 疱皮ハ暗褐色又ハ黒色ニシテ其厚サ及ヒ硬サハ常度ナルヤ

否

第十二條 種痘善感ノ微候ハ左ノ經過ニ就キテ知ルベシ
 第一日 第二日ノ間ハ他ノ刺傷ニ異ナルヲ無シ
 第二日 淡紅色ノ小暈ヲ發スレモ暫時ニ消失ス(或ハ此暈ヲ見ザルコトアリ)

第三日ニハ針痕ノ部ニ小ナル紅點ヲ生ジ試ニ指頭ヲ以テ之ニ觸レハ稍隆起セルヲ覺ユ(經過緩慢ナル者ハ第四日乃至第五日ニ至リ始テ此紅點ヲ生スルコト有リ)
 第四日ニハ紅點ニ硬ク且ツ隆起セル圓形若クハ楕圓形ノ小結節ヲ生ス
 第五日ニハ結節細小ノ水疱トナリ其周圍ニ狭キ紅暈ヲ見ル
 第六日ニハ水疱稍増大シ其邊緣隆起シテ疱ノ中央ニハ陷凹ヲ呈シ疱中ニハ稀薄透明ニシテ稍々帶藍色ナル液ヲ充實シ周圍ノ紅暈稍々増大ス

第七日ニハ該症益々増進ス
 第八日ニハ痘疱全ク成形ス其大サ豆大ニシテ周圍ハ微腫シ微シ

ク疼痛アリ疱中ノ液ハ倍々充實シ紅暈又著シク増大ス此期ニ當リ(或ハ此期以前)微熱ヲ發シ或ハ全ク熱候ナク顔面ハ蒼白色ヲ呈スルヲアリ又腋下ニ疼痛ヲ覺エ水脈腺腫起スルヲ有リ

第九日ニハ紅暈更ニ増大シ其色澤モ亦加ハル

第十日ニハ疱液化膿シテ白濁或ハ黃色ノ濃稠液ト爲リ疱ノ中央稍々凸隆ス然レモ其形必ス扁圓ナリ第十二日ニ至ル迄ハ痘疱其形狀ヲ變スルヲ無ク此日ヨリ收斂ヲ始メ疱ノ中央ヨリ邊緣ニ向ヒテ次第ニ乾固シ漸ク褐色ニ變シ周圍ノ紅暈モ又々漸ク消退ス

爾後暗褐色又ハ黑色ニノ堅實ナル厚痂ヲ結ビ初メハ皮膚ニ緊着シテ容易ニ剝離セズ結痂後ハ八日乃至十日ニ至リ始メテ剝脫ス其剝脫ノ後ニ遺セル癍痕ハ圓形又橢圓形ニノ淺キ凹窩ヲ爲シ其窩内ニハ更ニ數多ノ小凹點ヲ呈ス

但一回種痘セシ者ニ再三種シテ感染スルヲアルモ其痘顆小ニノ七八日間ニ全ク經過スルヲ常トス

第十三條 種痘不善感ノ諸徴ハ左ノ如シ

- 一 接種後第二日以内ニ成形ヲ初メ常形ニ達セズノ直ニ廣ク蔓延セル炎症ヲ發シ皮下ニ硬キヲ覺ヘズノ紅暈ハ不整形ナリ痘疱ハ速ニ化膿シ其隆起ノ狀或ハ半球形或ハ圓錐形ト爲リ乾固スレハ黃色ニノ鬆疎ナル痂皮ヲ結ブ(時トシテハ第二日後ニ成形ヲ始ムル者アレモ其經過總テ不整ナルヲ以テ自ラ善感ノ者ト區別スルヲ得ベシ又善感ノ者ト雖モ腋下ニ疼痛ヲ覺エ微熱ヲ發スルヲ無キニ非ラス)
- 二 接種後第一日ニ大ナル赤色ノ疱ヲ生シ速ニ漿液ヲ充實シ上皮破レテ膿面ヲ呈シ或ハ濕潤セル淡色ノ痂皮ト爲ルヲ見ル
- 三 紅暈速ニ増大シテ腫起シ或ハ遂ニ潰瘍ニ陷ル
- 四 第八日ニ至リ數疱相合シテ一大潰瘍ト爲リ或ハ一面ノ痂皮ヲ結ヒ其潰瘍又ハ痂皮ノ周圍ニハ廣ク赤色ヲ呈ス
- 五 痂皮剝脫ノ後ニ遺セル癍痕ハ深ク不整形ヲ呈シ基底面平

滑ナリ

第五 種痘ノ注意

第十四條 初種ノ不善感ハ痘苗ノ不良ナルカ或ハ其人一時ノ不感性ヲ有セルニ因ルモノナルガ故ニ更ニ三四週ノ後善良ナル痘苗ヲ撰ビテ再ヒ接種スベシ

第十五條 種痘ヲ施スニ當リテハ併發症ヲ防キ殊ニ天然痘流行ノ際ニハ接種痘後第八日ニ至ルマテハ嚴ニ其感染ヲ防禦スベシ然レ受痘者已ニ暗ニ天然痘ニ感染セシ其潜伏期ニ於テ接種スルノ間々之アリ

第十五條 天然痘流行シ種痘ヲ猶豫ス可カラサル際ニハ第一條各項ニ掲グル者ト雖モ熱性病ヲ除クノ外ハ總テ接種ス可シ

第十七條 種痘中ハ寒冷ヲ避ケシメ成ルベク清潔ノ空氣中ニ居ラシムベシ平常習慣セル食物ハ總テ禁忌スルニ及ハス又別ニ醫藥ヲ要セズ

又醫師ノ種痘セルトキハ之ニ關スル手續ヲ知ラサルヘカラス即チ今

便宜ノ爲メ左ニ摘録シテ其便ニ供ス

官 令

○太政官布告第三十四號

種痘規則左ノ通制定シ明治十九年一月一日ヨリ施行ス

但シ明治九年內務省甲第八號及甲第十六號布達ハ此規則施行ノ日ヨリ廢止ス

種痘規則

第一條 種痘ハ小兒出生後滿一年以内ニ之ヲ行フヘシ若シ不善感ナルキハ更ニ一週年以内ニ再三種ヲ行フヘシ

第二條 種痘ハ善感後ト雖モ五年乃至七年ニ再種ヲ行ヒ再種後五年七年ニ三種ヲ行フヘシ

第三條 天然痘流行ノ兆アルキハ第一條第二條ノ期限ニ拘ハラス掛官吏ノ指定シタル期日内ニ種痘ヲ行フベシ

第四條 種痘ヲ受クベキ者病氣或ハ事故アリテ第一條第二條第三條ノ時期ニ種痘ヲ行フ能ハサルキ病氣ハ醫師ノ診斷書事故ハ

親戚又ハ隣保ノ證印ヲ爲シタル證書ヲ副ヘテ戸長役場ニ届出ベシ

第五條 種痘ヲ受ケシ者ハ醫師ノ指定シタル日ニ於テ檢査ヲ受ケ痘漿採取ヲ要スルキハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第六條 種痘濟ノ者ハ醫師ヨリ種痘證ヲ受領シ戸長役場ニ届出ベシ

但天然痘ニ罹リタル者ハ醫師ヨリ其證ヲ受領シ本條ニ準スヘシ

第七條 十六歳未滿ノ者尊長後見人若クハ雇主等ニシテ現ニ其幼者ヲ監督スル者ハ前各條ノ責ニ任スヘシ

貧院育兒院等へ入院ノ者ハ該主長ニ於テ前各條ノ責ニ任スヘシ

第八條 醫師ハ種痘ノ善感不善感ヲ檢診種痘證ヲ附與スヘシ

但天然痘ニ罹リタル者ヲ治療シタルトキハ本條ニ準シ其證ヲ附與スヘシ

第九條 第一條第二條第三條第四條第五條第六條第七條第八條ヲ犯シタル者ハ五錢以上五十錢以下ノ科料ニ處ス

第十條 府知事縣令ハ種痘明細表ヲ製シ毎年一月七月ノ兩度卿ニ報告スヘシ

第十一條 此規則ヲ施行スル方法細則ハ府知事縣令ニテ便宜取設ケ内務卿ニ届出ヘシ

右奉勅旨布告候事

明治十八年十一月九日

太政大臣 公爵 三 條 實 美
内務卿 伯爵 山 縣 有 朋

前已ニ種痘ニ關スル一般ノ規則ハ之ヲ列記シタリ左ニ右布告ニ基キ東京府ニ於テ設ケタル施行細則ヲ例示ス

種痘細則

第一條 醫師種痘ヲ行ヒ若クハ天然痘ニ罹リタル者ヲ治療シタルキハ別紙第一號書式ニ準シ證書正副二通ヲ交附スベシ

第二條 醫師ヨリ種痘若クハ天然痘證ヲ受ケタルキハ一週日以内ニ其副書ヲ所轄ノ區役所又ハ戶長役場ヘ差出シ其正書ハ常ニ保存シテ臨時點檢ノ用ニ供スヘシ

第三條 種痘規則第四條ノ届ヲ爲シタル者病氣全快又ハ事故相解ケタル時ハ直ニ種痘ヲ爲スヘシ

第四條 貧困無資ニシテ種痘ヲ爲シ難キ者ハ當廳ヨリ指示スルトコロノ種痘所ヘ申出施種ヲ受クベシ

第五條 郡區役所戶長役場ハ當廳ノ命令若クハ必要ト認ムル場合ニ於テハ數町村ヲ聯合シ又ハ町村限り便宜ノ地ニ種痘場ヲ設ケ日時ヲ定メテ受痘者ヲ招集シ種痘ノ手續ヲ爲スコアルベシ

第六條 郡區役所ハ別紙第二號書式ニ倣ヒ種痘明細表ヲ調製シ毎年一月十五日限り當廳ニ差出スベシ

第一號書式

初種		再種		三種		等朱印押捺スヘシ	
右	左	種痘濟					
年	月	醫師		姓名		何年何月	
		姓		名		何年何月	
		何某何女何又ハ		何某何男何又ハ		何年何月	
		何區何町何番地		何區何町何番地		何年何月	

第貳號書式二

割印

右天然痘濟

年月日

證

何郡何村何番地

何某何男(又ハ)何女(又ハ)

姓

名

何年何月

醫師

姓

名(印)

○不善感ノ者ハ種痘濟ノ文字ニ代フルニ不善感ノ文字ヲ以テスヘシ

第貳號書式

合計	再三		再種		初種		區別
	疾病事故ニテ種痘セサル者	不善感	疾病事故ニテ種痘セサル者	不善感	疾病事故ニテ種痘セサル者	不善感	
							以滿一年 內滿一年以上 二年以上 五年以上 十年以上 十五年以上 十五年以上 合計

何郡種痘明細表

明治何年上下半期

○種痘規則第三條ニ據リ接種セシ者ハ表中ニ算入セズ表末ニ於テ其人員及ビ感否ノ別ヲ附記スヘシ

水痘 varicellen

本病ハ急性接觸傳染病ニシテ、殆ント小兒ニ固有シ、春機發動期以後ニ
 アツテハ其素因消失スト云フモ可ナリ、而シテ生活中一回之ニ罹レバ、再
 ビ罹ルコトナシ、以前ハ本病ヲ以テ痘瘡ノ變態トナセシガ、近來ニ至リ全
 ク別種ノ者タルコトヲ明カニセリ、如何トナレバ本病ヲ患フルモ痘瘡ニ
 對シテ免疫トナラズ、又痘瘡ヲ患ヒシ者モ本病ニ罹レバナリ、而シテ本病
 ハ痘瘡ニ比スレバ甚タ輕症ニシテ時トシテハ些ノ訴ヒモ認メザルコ
 アリ、大都會ニアツテハ常ニ散在性ニ存シ全ク痕跡ヲ絶ツコトナシ、

原因 病毒素ハ多分呼吸器ヨリ攝取サルベシト雖モ、其本態ハ未詳、
 水泡ノ内容ヲ接種シテ試ミタル諸家、多クハ陽性成績ヲ得タリ、本病毒
 素ハ強キ揮發性ノ者ナルベシ、如何トナレバ本患者ニ接近スレバ、既ニ
 感受スレバナリ、男女并ニ四季氣候ニ關係ナキガ如シ、唯初生兒ノ本病
 ヲ帶ビタル者ヲ見サルヲ以テ推セバ大人及ヒ胎兒ノ之ニ對スル素因
 ハ頗ル少キガ如シ、

症狀

通例潜伏期ハ十三日乃至十七日ニシテ、此間ニ於テハ訴フル處
 ナキモ稀ニハ倦怠ノ感、食氣不振及ヒ顔面蒼白色ヲ呈スルコトアリ、又前
 驅期症狀ト稱スベキコトモナクシテ、肘幹四肢及ヒ顔面、毛髮部、等ニ圓形
 ノ紅斑ヲ生ズ、此紅斑ハ指壓ニヨリテ褪色シ、間々近隣ノ皮膚面ヨリ隆
 起セルコトアリ、其尤モ初メニ生ズルハ、顔面或ハ時トシテ生髮頭部ニシ
 テ順次以下ニ及ボス者ナリ、此紅斑ヲ生ジテヨリ、數時間ヲ經テ其斑部
 ニ水様内容ヲ有セル水泡ヲ生ジ、二十四時間乃至三十六時間ニシテ全
 ク發疹ヲ終ル、又此水泡ハ口腔、咽喉、陰門等ニ生ジ、容易ク破壊シテ潰瘍
 面ヲ形成スレモ、又直ニ覆皮サル、

發疹ト同時ニ體温ハ昇騰シ、三十八度五分乃至三十九度稀レニハ四十
 度或ハ四十度五分ニ至レモ著シク熱症ヲ呈スルコト少ク、時トシテハ一
 モ苦痛ナキガ爲メニ發疹ヲ看過スルコトアリ、
 水泡ノ大サハ種々ニシテ、或ル者ハ豌豆大ニ達スルモアレモ、或ル者ハ
 留針頭大ニ止マルコトアリ、其排置モ不規則ニシテ、或ハ一處ニ密生シ、或
 ハ他所ニハ稀生ス、其尤モ多キハ軀幹ナリ、又發疹順序モ不同ニシテ新

生疹ノ側ニ既ニ内容ノ乾燥セル者ヲ見ルコトモアリ、時トシテ又唯紅斑ヲ生ズルノミニ止マリ、水泡ヲ生スルニ至ラザルコトモアリ、又或ル場合ニアリテハ、水泡ヲ生スルモ、内容ノ吸收極メテ速ニシテ直ニ乾燥スルコトモアリ、

如此ニシテ二三日後ニ水泡ハ乾燥シ、熱ハ下降シ、茄皮剝脱ス、稀レノ出來事ニ屬スレバ、毒素皮膚ノ深部ヲ犯ストキハ水泡内容ハ混濁シ、膿様ヲ呈スルコトアリ、然ルトキハ淺キ小癩痕ヲ遺セバ後ニハ遂ニ消失スル者ナリ、

故ニ本病ノ經過ハ八日乃至十四日位トス、時トシテ尙長時ニ涉ルコトアリ、又偶々顔面ニ丹毒ノ併發スルコト等アレバ稀レナリ、

診斷 前項記載ノ如ク、大サ種々ニシテ、水泡ハ極メテ淺ク、内容ハ亞兒加里性或ハ中性ニシテ、薄キ表皮ニテ被ハル其成莖セル疱ハ、假痘、蓄積疹等ト誤リ、又其初期ニ於テハ麻疹ハ誤診スルコトアリ、然レバ假痘ニアリテハ、發疹ト共ニ熱ハ下ルモ此病ニアリテハ却テ上リ、又本病ノ水泡ハ大サ種々ナレバ、假痘ハ通例大サ一定ス、又時トシテ痘瘡トモ誤ルコト

ナキニアラザレバ、痘疱ニハ中央ニ痘臍(Dentel)アリ且ツ疱ノ生ゼル同一部分ニアリテハ、新古種々ノ期アルコトナク、生ズルトキハ同時ニ生ズレバ、本症ニアリテハ新古相接シ、又中央ニ嚢ノ存スルコト稀レナリ、麻疹ハ其初メ眼瞼結膜炎、鼻粘膜加答兒等ヲ起シ汗疹ノ内容ハ酸性ナレバ本病ノ疱内容ハ亞兒加里性ナリ

豫後 良ナリ後發病トシテ時々腎臟炎ノ生ゼルヲ實驗セルコトアリ、故ニ尿検査ハ必要ナリ、

療法 特別ニ併發病等アラザレバ敢テ必用ナシ、唯熱アルトキハ靜ニ臥床セシメ流動食餌ヲ與ヒ、リモノナーデ等ヲ與フベシ、

丹毒 Erysipel 一名羅斯 Rose

本病ハ創傷傳染病ノ一ニシテ外皮或ハ粘膜ニ焮衝性滲潤、發赤、疼痛等ヲ起ス、一種ノ急性熱性病ナリ而シテ一定處ト一定ノ時ニ流行ス之レ本病毒素ノ時トシテ揮發性トナリ時トシテ沈着性トナリ而シテ増殖スルニ由ルナラン、此毒素ハ連鎖狀ヲナセル球菌ニシテ強焮衝ヲ起ス性ヲ

有シ、常ニ皮膚或ハ粘膜ノ創所ヨリ入り、淋巴管隙及ヒ表皮ト皮下組織或ハ筋織膜トノ間ニ居ヲ占メ、之レヨリ漸次他方ニ漫延ス、而シテ高熱、脾腫大(八〇%)、蛋白尿、消化機障阻及ヒ腦症等ヲ繼發ス、如此一般症狀ハ多ク球菌ノ新陳代謝的副産物、血行中ニ入りテ生スル者ナリ、或人ハ先ツ血行中ニ球菌入りテ後皮膚ニ焮衝ヲ起スヲアリト云フト雖モ淋巴中ニハ常ニ球菌ノ存在ヲ認ムレモ、血管中之ヲ認メザルヲ如何ニセン、前項既ニ陳ベシ如ク本病毒素ハ皮膚粘膜ノ損傷ヲ待ツテ始メテ人身体中ニ入ル者ナリト雖モ、又容易ニ損傷等ノ發見ヲ得ザルヲ屢々アリ、故ニ昔時如此ヲ稱シテ眞性丹毒(Fever)ト稱シ其成立ニ付テ議論少ナカラザリシモ、本病毒素ハ健全ナル皮膚内ニモ竄入シ得ル者タルヲノ證明ヲ得テ、以來此說ハ確定セリ、然シ一見創傷ナキヲ以テ直ニ此種トナスハ不可ナリ、精細ニ檢スレバ、多クハ見出シ得ル者ニ、又多數ノ場合ニハ、創傷ノ原因ヲ多シトス、

本病ト共ニ漿液膜ノ焮衝ヲ生スルコトアリ、假令ハ胸膜炎、心内膜炎、心弛炎、腹膜炎、心筋炎、及ヒ腎臟炎等ノ如シ是等ハ其局部ニ球菌ノ占居ス

ル爲メカ、否ヤハ明カナラス、但シ肺ニハ本病ヲ發シ得ルト云フ人アリ、産婦ニ本病ヲ患フル者ノ多數ハ、精細ニ探究スレハ初メ健全ナリシ産婦ノ、本病者ヲ診察シ或ハ本病者ノ看護セル醫師及ヒ産婆ヨリ傳達ナル、者ナリ、而シテ初生兒モ之レニ由テ感染ス、又幼兒ニ種痘ノ際ニ本病毒ヲ移植スルヲアリ、之ヲ種痘丹毒ト云フ、敢テ格別ノ者ナルニハアラス、

原因

本病毒素ハフールアイゼン(Fehleisen)ノ試験ニヨレバ新ニ焮

衝ヲ起セル皮膚ヲ檢スレバ、確ニ認メ得、之レヲ肉汁ゲラチンニ植ヒ、初メハ四十度後二十度ノ温ヲ與フレハ、培養シ得ル者ニ、連鎖狀球菌ニシテ、各箇ノ大サハ〇.三乃至〇.四密米長計アリ、此球菌ノ眞正病毒素ナルヲハ之ヲ人間ニ接種セシニ其部ノ皮膚ニ本菌ノ増殖ヲ認ムルノミナラズ、明ニ本病ヲ惹起シ、又動物試験ニ於テモ陽性ノ成績ヲ得タルニテモ明ナリ

本病菌ハ直接接觸又ハ空氣ノ媒介ニテモ傳播シ得就中多キハ空氣ヨリスル者ナリトス、即チ醫師ノ手、患者室ニアリシ綿紗、器械器具等ニ

第九圖



緻密ノ注意ヲ缺クトキハ、傳○搬○媒○介○ヲ○ナ○ス○種○痘○ノ○媒○介○ヲ○ナ○ス○ハ、前○條○ニ
 云○フ○處○ノ○如○シ○其○他○不○潔○ノ○漏○管○氣○管○重○管○開○口○器○カ○テ○リ○テ○ル○洗○滌○物○等○ハ
 直○接○間○接○ニ○傳○搬○ニ○加○勢○ヲ○ナ○ス、

前○文○云○フ○ガ○如○ク○本○病○毒○ノ○空○氣○ニ○依○テ○傳○搬○ス○ル○ハ、確○ニ○證○明○サ○ル○ト○雖○モ、
 其○揮○發○性○ハ○甚○タ○大○ナル○者○ニ○ア○ラ○ズ、如○何○ト○ナ○レ○バ○本○患○者○ト○同○居○セ○ル○者
 數○名○ア○ル○場○合○先○ツ○最○モ○患○者○ニ○接○近○セ○ル○者○之○ニ○罹○リ、其○遠○隔○セ○ル○者○ノ○罹
 ル○ハ、其○間○ニ○ア○ル○者○ノ○之○ヲ○患○ヒ○テ○後○ナ○レ○バ○ナ○リ、病○室○小○ナ○ル○ニ○從○テ、醫○師
 看○護○者○及○ヒ○其○他○ノ○患○者○ノ○危○險○ノ○度○ハ○増○大○ス、又○換○氣○不○充○分○ニ○消○毒○完○全
 セ○サ○ル○病○室○ニ○於○テ、此○病○氣○ヲ○發○ス○ル○ト○キ○ハ、傳○搬○ハ○一○層○迅○速○ニ○シ○テ、特○ニ
 外○科○ノ○術○ヲ○受○ケ○タ○ル○者○種○痘○ヲ○施○サ○レ○タ○ル○者○產○婦○等○ハ○直○ニ○犯○サ○ル、
 又○第○三○者○ノ○媒○介○ニ○ヨ○ッ○テ○傳○染○ス○ル○コト○ア○リ、看○護○婦○ノ○綿○入○等○ニ○固○着○シ○ア
 ル○ヲ○消○毒○ヲ○怠○リ、本○患○者○ニ○ア○ラ○サ○ル○病○者○間○ニ○往○來○ス○ル○場○合○ナ○リ、然○レ
 モ○丹○毒○病○毒○ハ○人○體○外○ニ○於○テ○幾○時○間○生○活○シ○得○ル○者○ナ○ル○カ○余○之○ヲ○知○ラ○ズ、
 本○病○ハ、他○ノ○傳○染○病○ト○併○發○ス○ル○コト○ア○リ、又○近○時○癩○、絨○維○腫○、淋○巴○腺○腫○、癰○腫○等
 ノ○患○者○ニ○丹○毒○ヲ○接○種○シ○テ○稍○輕○快○ニ○赴○ケ○ル○ハ、人○ノ○唱○フ○ル○處○ナ○レ○ド○モ、之

レ單ニ理論上ノ興味ニ屬シ、治療上應用スヘキニアラス、本病ノ流行ハ、春秋ニ多ク、氣候ハ温帶寒帶ニ差ナシ、個人的素因ハ前文列舉セル醫師產婆看護者等ノ本病者ニ接シ易キ者、及ヒ慢性鼻加答兒四肢潰瘍皮膚結核濕疹其他諸種ノ疾病ニ由テ(假令バ腹水、水腫、分婉等表皮或ハ粘膜ノ連絡斷絶スル者ニ來ル、

一回之ニ罹レバ又罹リ易キ性ヲ益ス、決シテ免疫質ヲ得ルヲナシ、
病理解剖 皮膚及ヒ粘膜ノ病理解剖的變化ハ異ナルヲナシ、表皮ノ全層及ヒ皮下結締織トモ漿液ヲ以テ滲潤サレ、中ニ白血球及ヒ赤血

球ノ少量ヲ混ス、血管ハ擴大セリ、淋巴管、淋巴空際其他組織内ニ無數ノ球菌アリ、又清潤セル皮膚近傍ノ淋巴ハ瘀衝シ、其腺ハ腫脹セリ、然レモ決シテ化膿セルヲナシ、

症狀 (尤モ露々アル顔面) 通例潜伏期ハ一定セズ、約一日乃至七日間

ナリ、前驅期症狀ナクシテ不意ニ起リ、局處ノ症狀ト一般症狀ト同時ニ目撃サル、ヲ常トス、體温ハ惡寒戰慄ノ後速ニ昇騰シ、多少ノ朝夕弛張アリ、三十九度五分ヨリ、四十度或ハ重症ニアリテハ四十一度ニ至ル

アリ之ト同時ニ一般症狀ハ害サレ、食氣不振、嘔吐、頭痛、倦怠、不眠等アリ、平常興奮性ノ人ニアリテハ早ク神經症狀ヲ伴フ、即チ輕キ意識不明、不安、遂ニハ譫妄ニ達スルヲアリ、舌ハ乾燥、白苔ヲ被リ、流涎アリ、勿論此症狀中ノ一二時トシテ缺如スルヲアリ、尤モ輕症ノ者ニアツテハ單ニ限局性炎症ニ止マリ、一般症狀ヲ起サザルヲモアリ、若シ皮膚症狀ナキ内ニ發熱及ヒ熱症ヲ生スレバ、粘膜ノ丹毒ニ疑ヲ置キ、諸所ノ粘膜ヲ檢スベシ、然ルトキハ、咽頭、扁桃腺及ヒ口腔等ノ粘膜ニ發赤腫脹ヲ見ルヲアリ、尤モ初メニ現ハル、瘀衝ノ症狀ハ、多クハ鼻中、眼下、耳、及ヒ頰部等ニノ其周圍ノ皮膚ハ發赤腫脹シ、指壓ヲ加フレバ、褪色スレモ、疼痛ハ増ス、同時ニ局部ノ熱感ヲ觸知シ得可シ、患者自身ハ其局部ニ緊張灼熱、搔痒刺痛等ヲ感ズ、

本病ハ或ハ初メヨリ一處ニ限局シ、唯僅ニ周圍ニ蔓延スルヲアリ之ヲ、
固定丹毒 (Erythema fixum) ト云フ、又或ハ發病ヨリ二十四乃至三十六時間内ニ大ニ蔓延スル者モアリ、其蔓延スルヤ、健康部下ノ境界直線ナラズシテ、不規則ナリ、即チ鋸齒狀ノ突起又ハ線狀トナリテ、周圍ニ擴ガリ、遂ニハ

一ノ面ニ合ス其進ムヤ健康皮トノ境界ハ判然區別シ得ラル、モ、退歩ニ向ヒシ部分ハ漸次褪色シテ著シキ境界ヲ存セス、又其蔓延スル方向ハ皮膚ノ割截方向ニモ關シ、又皮膚緊服ノ度ノ強弱ニモ係ル、故ニ一二ノ部分、假令バ鼻、唇、皺、襞、唇、皺、頸、等ハ微菌ノ移行ニ多少ノ不便ヲ與フルガ如シ、

本病ハ如此シテ漸次全顔面ヨリ毛髮部ニ及ボシ、遂ニ後頭部ヨリ延テ軀幹ニ及ボス如此ク漸次蔓延スルヲ遊走丹毒 (*E. migrans*) ト云フ如此患者ニアリテハ其熱度及ヒ食思不振ノ爲メニ甚ダ榮養ヲ害サル、又頑固ナル症ニアリテハ、頻回全所ヲ犯シ、一度經過セル所モ、再ビ又病ニ罹ルコトアリ、

病ノ進行セル場合ニ時トシテ、病皮中ノ一部ハ犯サレズシテ、恰モ島嶼ノ海中ニ孤立スルガ如ク、健皮ノ存立スルコトアリ、而シテ多クハ此健皮ニハ二三條ノ赤線貫通スルヲ見ル、顔面ニ於テハ、顯ハ多クハ犯サレズ、全顔面犯サル、キハ、浮腫シテ形容ヲ變ズ、若シ及滲出液饒多ナルトキハ、皮膚ニ多クノ小水泡ヲ現ハス、但シ此水泡ハ見ルヨリハ却テ觸ル、

方容易ナリ、又時トシテ大水泡ヲ形成スルコトアリ、如此トキハ水泡丹毒 (*E. vesiculosum*, *bullosum*) ト云フ此内容初メハ漿液性ニシテ清明ナレモ、後ニ至レバ白血球ノ漫行ニ因テ膿様ニ變ズ加之血様トナルコト稀レニアリ、

病勢深部ニ進入スレバ疱ヲ形成ス如此ヲ膿胞性丹毒 (*E. pustulosum*) ト云フ而シテ其内容ハ多クハ微菌ニ富ム者ナリ若シ疱破レテ内容排除サルレバ後ニハ痂ヲ生ズ如此ヲ結痂性丹毒 (*E. crustosum*) ト云フ、

又身體中疎鬆ナル結締織ヲ有セル部、例之バ眼、陰、莖、女性陰部等ヲ犯ストキハ滲液過多ニシテ腫脹甚シク從テ全體ノ形常ヨリ大トナル者ナリ、

又滲出液過多トナレバ、從テ血行障害ヲ來シ爲メニ體中一二ノ部分ニ壞疽ヲ生スルコトアリ、特ニ深部ノ骨ト結締織ニ依テ結合サレ、移動容易ナラザル部分ノ皮膚ニ於テ然リ、

本病ノ輕症ナル場合ニ在テハ其經過甚容易ニシテ、發赤腫脹ハ去リ、疼痛緊服ノ感等ハ消失シ、皮膚ハ尙暫時硬絶ヘズ剝離シ、遂ニハ全ク舊體

頭髮

ニ復ス、然レモ一ニノ場合ニ於テハ最初犯サレシ部分ハ、既ニ輕快ニ趣クカ、又ハ表皮剝離スルニ至ルモ、他部ニ於テハ病勢盛ナルヲアリ、若シ頭髮本病ニ犯サル、トキハ通例脱落ス之レ毛根ニアル淋巴濾胞中ニ滲出液ノ入シ爲メナラン、然レモ此脱落セル毛髮ハ本病快復後又發生スル者ナリ、

咽喉、扁桃腺

若シ本病咽喉扁桃腺等ニ限局スレバ、恰モ口内炎ノ如キ症狀ヲ呈ス、咽喉ニ限局スレバ、時トシテ聲門水腫ノ爲ニ不幸ニ陥ルヲアリ、本症ノ氣管支又ハ肺ニ移行シ得ベキカ否ヤハ、未ダ詳カナラザレモ、本症徵菌ニ依テ産褥熱ノ發生スルヲハ、確實ナリ、初生兒ニ、本病ノ發スルハ、多クハ臍帶截除端ヨリ傳染スレモ、又其他ノ創傷ヨリ來リ得ルハ論ヲ待タズ、

肺氣管支

前記症狀中尤モ必要ナル者ハ熱ナリ此熱ハ多分微菌ノ血行中ニ其副産物ヲ分泌スルニ依テ生スル者ナラン、而シテ本病ノ進ムニ從テ、熱型不正トナリ、日哺弛張スルヲアリ、然レモ多クノ場合ニ於テハ、間歇性ヲ呈

スル者ニシテ、其下ルヤ分利性ナリ、此他熱ニ伴フ症狀、假令バ、腸胃症、腦症、等ハ皆熱ノ高下ニ正比シ、脈搏モ又然リトス、合併症トシテハ、淋巴腺腫大シ、蛋白尿、心臟内膜炎、等重ナル者トス

豫後 一般ニ云ヒバ不良ナラザレモ患者性來虛弱ナルカ、酒客ナルカ、初生兒ナルカ、又ハ産婦ナルトキハ、固ヨリ不良ト云ハザル可ラズ、本病ノ再發セル者多クハ輕症ナリ

又前項記載セル如キ合併症アレバ、其豫後ニ影響アルハ勿論ナリ、遊走丹毒ノ如キハ合併症ナキモ、衰弱ノ爲メ甚タ疑ハシ、

診斷 本病全ク其症狀ヲ呈スルニ至レバ、敢テ困難ナラズ、虹斑ニテモ亦内臓内膜炎等ヲ起シ得レモ、此時ハ熱ハ本病ニ於ケルヨリ高カラス、且ツ發疹ト同時ニ下熱スル者ナリ、其他局處モ異ナリ、疼痛モ多カラス、又其患部ノ色澤大ニ本病ト異ナリ、

療法 豫防トシテハ醫師ハ本病患者ヲ診察セルトキハ、出來得ル限リ、産婦又ハ手術ヲ受ケシ者等ヲ診セサルヲ可トス、若シ不得已時ハ嚴

重ナル消毒ヲ施シタル後ニアラザレハ、患者ニ接スヘカラズ、既ニ患者ヲ發スレハ、直ニ隔離セシム、殊ニ注意ヲ要スルハ産婦、小兒、被種痘者、足部潰瘍、被手術者等ニアリ、又常習トシテ本病ヲ患フル者ニアツテハ、鼻カタル其他小創ト雖モ外傷ヲ被リタルトキハ速ニ治療シテ感傳ノ逸アラザラシム可シ

本病ノ特效藥ハ、余輩未タ之ヲ知ラス、高熱ニハ規那、安知比林、安知歌武林、等試用スヘシ、冷浴等モ又効アリ、遊走丹毒ノ限局法トシテフューテル氏ハ、二%石炭酸水ノ皮下注射ヲ賞用セリ之ヲ行フニハ患部ヨリ二横指程距リテ健皮下ニ注射スベシ、然レモ此法ハ疼痛甚シク又頭蓋筋膜ノ如キハ、到底行ヒ得ス、グラスケ氏ハ局處ニ亂切ヲ施シ二%石炭酸水ニ浸セル布片ヲ以テ瘡法ヲ施シエプスタイン氏ハローゼンバハ氏ノ施セル方法ヲ述ヘテ曰ク病的皮膚ノ周圍ニアル健皮ヲ約十五乃至二十仙米ノ幅ニ於テ嚴重ニ清拭シ後石炭酸華攝林ヲ塗擦シ漸次患部ニ及ホスト而シテ此成績ハ多クハ良好ナリシト云ヒリ、焮衝セル皮膚ハ油類ヲ塗布シテ其緊張ヲ防キ以テ疼痛ヲ減ス、又局部ニ氷罨法ヲ施スモ

局處ニ十%硝酸銀溶液或ハヨイヒチオール等ヲ以テハ布シ内用トシテハ水楊酸等ヲ用フ

可ナレモ、若シ瘡疽ニ陥ル徵アルトキハ、速ニ除去スヘシ、斯ル際ニ温罨法ハ決シテ施ス可ラズ、緊張セル水泡ハ刺穿スヘシ、其他下劑、強壯的食品等ヲ與ヒ併發症アレハ對症療法ヲ行フ、

窒扶斯 Typhus

昔時此病名ノ下ニ全ク異ナリタル三種ノ傳染病ヲ包含セシメタリ、是レ其症狀何レモ相似タルガ故ナレモ、近時病理解剖及ビ微菌學ノ進歩ニ伴テ、全ク其性質ノ異ナリタル者タルヲ知リタリ、其三種ノ病氣トハ腸窒扶斯、再歸窒扶斯、及ヒ發疹窒扶斯之ナリ、而シテ昔時ハ此三病ヲ同一種ト見做セシガ故ニ、其輕キヲ腸窒扶斯トシ、稍病ノ度重ルニ從テ發疹窒扶斯ヲ發スル者ト思惟セリ、然レモ吾人今日ニ至テハ此三病ハ各特種ノ病毒ニ依テ起ス者ナルヲ知ルニ至レリ、又尤モ理解シ易キヲハ、此内二病ヲ經過スルモ、尙第三病ニ向テ免疫トナラザルニテモ知ル可シ、

發疹瘰扶斯 *Erythrus exanthematicus*

本病ハ著シキ觸接傳染病ノ一ニシテ、其固有ナルハ、一般症狀ト、同時ニ
 病毒ノ限局ニ依テ生スル皮膚(蕁麻疹、血斑、肺(氣管、支加答兒)及ヒ脾(脾腫)
 ニ變化ヲ來スニアリ、
 以前ハ一般ニ本病ヲ恐怖セル所以ノ者ハ、多ク戰時若シク多人數集合
 セル狹隘ナル居處、或ハ飢饉年、牢獄、陣屋等ニ流行ヲ來シ且ツ其死亡數
 モ甚タ大ナリシヲ以テナリ、然レモ近ク十年間ハ、本病症ノ經過モ昔時
 ニ比シテ猛惡ナラズ、且ツ其發生モ稀少トナレリ、之レ蓋シ一般衛生ノ
 普及ニ起因スル者ナラン、彼ノ愛蘭土、我里珍、王勉爾、朱列自、魯西亞等
 ノ如キ未ダ公衆衛生ノ完カラザル諸邦ニアツテハ、尙地方病トシテ存
 在スルノミナラス、流行ヲ來スニアリ、
原因 本病ノ原因タル病毒ニ付テハ、其本態未タ發見サレズ、蓋シ醫
 界ノ好問題ナラン、然レモ從來ノ經驗ニ徴シ其固有ナル症狀ニ就テ想
 像スルモ、一ノ有機體ノ働キタルヤ、論ヲ待タズ、

本病ハ直接ニ人又ハ器物ヨリ感染シ、或ハ間接ニ第三者(假令バ醫師或
 ハ本病等ヲ見舞ヒシ人)ヨリ感受スルヲモアリ、其病室ノ換氣ヲ充分ニ
 スレハ、從テ感受性ヲ減スルヲ見レバ、本病毒素ノ揮發性ノ大ナルヲ知
 リ得ベシ、而シテ病毒ノ轉送受領ノ道路ハ、或ハ呼吸道ヨリスルカ、或ハ剝
 脫セル皮膚ヨリスルカ、余輩未タ之ヲ詳カニセスト雖モ、疑フラクハ呼
 吸道ヨリスルナランカ、
 本病ノ特發ハ決シテナシ、以前ハ糞、尿、屍體等ノ集積セル不潔地ニハ、病
 毒自然ニ發生スト信ジタレモ、今日吾人ハ如此ハ唯病毒ノ發育ヲ助ク
 ルモノタルヲ知レモ、所謂變生(源生ノ對稱)ナル者ハ信セサルニ至レリ、
 氣候上ノ關係ナキガ如キモ、冬季及春季ハ衆人雜居シ易キガ故ニ、流行
 亦從テ多キニ似タリ、年齡ヨリ云ヘバ二十歳ヨリ四十歳迄ノ間ヲ尤モ
 多シトス、然レモ幼兒老人モ免ル、ヲ得ズ、一度之ニ罹レバ多クハ免疫
 質ヲ得レモ、必然ヲ期シ難シ、潜伏期ハ七日乃至十四日間ナリ、
病理解剖 之レ腸瘰扶斯ニ於ケルヨリ明瞭ナラス、蕁麻疹ハ死後
 ニハ消失スレモ血斑ハ存ス、氣管支粘膜炎ノ狀態ハ腸瘰扶斯ニ於ケルガ

如キモ、唯喉衝ノ度ハ之レニ比シテ少シク強度ナリ、心筋ハ弛緩シ、且ツ柔軟トナル、脾ハ腸室扶斯ノ如ク常ニ腫大スト云フニアラズ、時トシテ全ク之ヲ缺クコアリ、腸ニ變化ナシ、例外トシテ、腸間脈ノ腫大スルコアリ、

症狀

腸室扶斯ニ在テハ、熱ノ昇騰徐々ニシテ、前驅期モ長時間ナレ、本病ニ於テハ經過凡テ速ニシテ、前驅期ニアリテハ、全ク壯健ノ狀態ヨリ直ニ發熱スルコモアリ、一回ノ戰慄又ハ數回ノ惡寒ヲ以テ始マリ、大抵數時間内ニ體温四十度乃至四十一度ニ昇リ、僅ニ日哺弛張スレ、長ク此温度ヲ昇降ス、而ノ其他頭痛、倦怠、食氣、缺損、不眠、四肢痛、鼻加答兒等ヲ訴フ、且ツ其四肢痛ハ腸室扶斯ニ於ケルヨリモ、激甚ナリ、今左ニ多少詳細ニ症狀ヲ記述スベシ、

發熱期

發熱期ハ前述ベシ如ク、惡寒又ハ戰慄等ヲ以テ初マリ、朝ハ夕ニ比スレバ稍低ク、前驅期ニアリシ症狀ハ、一層増悪シ、眩暈、火亂、發耳鳴、精神混濁、等ヨリ漸次譫妄ニ移ル、此等ノ諸症ハ第二日ニ於テ益々其度ヲ高メ、筋力ハ脱失シ、言語不明、舌苔ハ白厚トナリ、脈搏ハ百二十乃至百三十至

發疹期

ヲ算シ、特ニ神經家ニ在リテハ速ニ嗜眠狀ニ陥ル、
發疹期第三日乃至第六日ニ於テハ、蓋微疹ヲ軀幹及ヒ四肢稀ニハ顔面ニモ生シ、暫時ニシテ非常ニ其數ヲ増シ、恰モ全身種子ヲ蒔キタルガ如クナルモ、又暫時ニシテ減少ス、熱ハ他ノ發疹病ノ如ク、發疹ト同時ニ下降セズ、時トシテハ僅ニ下降スルコアルモ、又速ニ舊ニ復ス、此ニ於テ病ノ極盛ニ達ス、意識ハ持續的ニ混濁シ、脈搏ハ百三十乃至百四十至ヲ算シ、軟ニシテハ復脈ヲ觸レ、又不整ナルコト間々アリ、熱ハ夕ニ於テハ四十一度、時トシテハ四十二度ニ達ス、便通、秘結シ、尿ハ時トシテ蛋白ヲ混スルコアリ、數日後ニ至テ微蓋疹ノ一部點狀皮下出血ニ變ズルコアリ、而シテ此者ハ多少隆起シ斑狀ヲ呈ス、假令是迄ハ精神明亮ナリシ者モ此時ニ至レバ全ク混濁ス、脾ハ腫大シ、氣管支炎蔓延シ、皮膚ハ發疹ノ結果其光澤ヲ失ヒ、一種紫赤色ヲ呈ス、此時期ニ患者多クハ心臟衰弱ニ依テ死ニ歸ス、故ニ此症ニアリテ注意スベキハ熱ニシテ、多クハ頓發シテ、直ニ高度ニ達シ、其儘持重シテ時トシテ四十二度ニ達スルコモアリ、既ニ四十一度以上ノ熱ヲ發スルニ至レバ甚ダ危險ナル者ト思惟スベ

シ其下降スルモ散逸ヲ以テ終ラス、分利性ニ行フ者ナリ、
 良好ノ場合ニアツテハ第九日乃至第十二日前記諸種ノ症狀ハ熱ト共
 ニ減退シ、熱ハ二日或ハ尙早ク下降シテ、常溫ニ復ス、然ルトキハ皮膚ハ
 冷涼トナリ、發汗シ、脈搏緩徐トナリ、腦症ハ一快眠ノ後全ク消散ス、然レ
 凡點狀出血ハ長ク其痕ヲ遺ス、脾ハ縮小シ、氣管支炎ハ去ル、如此シテ、漸
 次患者ハ快復期ニ向フ、然レモ若シ此時併發病若シクハ後發病ヲ起ス
 トキハ、再ビ生命ヲ危フスルコトアリ、其併發若クハ後發病トシテ、認ム
 ヘキハ、肺炎、胸膜炎、心臟内膜炎、痲筋膿瘍等ニシテ、又本病經過中ニ生セ
 ル擗創ノ爲メ、敗血症或ハ膿血症ヲ併發スルコトアリ、其他肺壞疽、耳下腺
 炎、化膿性中耳炎、格魯布性及ヒ實扶的里性疥癬等ハ幸ニモ稀ナル併發
 病ニ屬ス、又心力衰弱及ヒ榮養障害高度ナルトキハ、頑固ナル貧血ヲ呈
 シテ、大ニ本病ノ快復ヲ遲緩セシメ、加之心力減衰セル爲メ、水腫等ヲ生
 スルコトアリ、此他高熱ノ際ニ目撃セシ蛋白尿ハ、快復期ニ於テ多クハ消
 失ス、
 或ル場合ニアリテハ、蓋發疹ノ點狀出血ニ移行セサルコトアリ、又或ル時

ハ初メヨリ點狀出血トナリテ現ハルコトアリ、
診斷 稍容易ナルニ似タレモ、腸窒扶斯、痲疹等ト誤診スルコトナキニ
 アラス、之レガ爲メニ尤モ標準トスヘキハ熱型ナリ、腸窒扶斯ニアツテ
 ハ、熱ハ徐々ニ昇リ、其下ルモ散逸性ニシテ、又徐々ナリ、本病ニアリテハ直
 ニ上ルモ下ルモ亦急ナリ、亦發疹モ腸窒扶斯ニ在リテハ全ク取除ケノ
 場合ニノミ多ク發スレモ、其四肢ニ發スルハ決シテ多カラズ、又鼻、加答
 兒ノ如キモ本病ノ初期ニハ多ク發スレモ、腸窒扶斯ニ於テハ殆ント來
 ルコトナシ、又痲疹トノ區別ハ、發熱ノ工合ヲ見レバ容易ナリ、則チ本病ハ
 發疹ト熱ノ下降ハ伴ハザレモ、痲疹ニアリテハ發疹ト共ニ熱ハ下降ス、
豫後 其死亡數ハ大凡ソ十乃至二十%ノ間ニアリ、其適當ニ水治療
 法ヲ行ヒ、又ハ消毒藥ノ供用ハ、死亡數ト如何ナル關係ヲ有スルカハ未
 詳ニ屬ス、腸窒扶斯患者ニ比スレバ、腸ヨリスル危險一モナク、又其經過
 モ割合ニ短キノ利アリ、強壯ナル人及ヒ、小兒ハ虛弱ナル人及ヒ老人ニ
 比スレバ抵抗強シ、
療法 若シ患者アラバ直ニ隔離シ、顯職高位一モ會釋スル處ナカル

ベク、諸器具居室ノ消毒ニ就テハ、總論ニ云ヒシガ如シ、本病ノ特效藥ハ從來ナシ、近時レグレーン氏ハ、血清療法トシテ腸室扶斯ノ快復期ニアル者ノ血清ヲ二乃至二十立方仙米ヲ皮下ニ注射シ、其施セル十二名ノ患者ニハ、皆奏効アルヲ説ケリ、蓋シ後來益々經驗ヲ要スル者ナラン、此他ハ皆對症療法ニシテ就中注意スヘキハ熱症ナリ、患者ノ死ニ歸スルハ多ク高熱ノ爲メナレバ、早クヨリ亞爾格保兒分ヲ與フ可シ、其、コーニヤクナルト赤酒ナルトシヤンバンナルトハ問フ所ニアラズ、カンフル、エーテル麝香等ノ興奮劑モ必要ナリ、藥劑ハフエナツエチン(一、〇)ラクトフェニン(一、〇)一日量二回分服、アンチピリン(四、〇)乃至六、〇一回ノ小灌腸料、アンチフェブリン(〇、五)每一時解熱迄等ナリ、又リーベルマイステル、ストリコンベル、ジュールゲンゼン諸氏ハ冷水浴ヲ賞用シクルシヤン氏ハ病室ヲ「バラック」稱トナシ盛ニ通氣ヲ行ヒ偉効ヲ奏シタルヲ云エリ、其他本病ハ充分ナル看護ヲ要シ其榮養ニ注意スヘシ患者ノ食餌ハ流動性ノ者ヲ撰ミ、肉汁中ニ鶏卵ヲ投シテ與ヒ、又少量ノ粥汁等モヨシ、渴アル者ニハ水ニ赤酒ヲ混シテ與フヘシ、又瘧瘧ヲ豫防センガ爲メニ、晝

夜ノ寢具ヲ異ニシ、其上敷ヲ引延バシテ、皺襞ヲ作ラザル様ニス、且ツ時々患者ノ臥位ヲ轉セシメ、始終同位置ニ居ルナカラシム、又口唇ノ乾燥セル者ニハ、リスリン等ヲ塗布シ、譫妄ニハ冷水灌漑便秘ニハ冷水灌腸等ヲ行フ如此キ看護ノ注意ハ、却テ無効ノ處方ヲ投ズルヨリ優レル萬々ナリ、

再歸熱 一名再歸室扶斯 Typhus recurrens

本病モ亦觸接傳染病ノ一ニシテ、昔時未タ固有病毒ノ發見以前ニアリテハ、發疹室扶スト誤診サレタレ、オーベルマイエル發見以來本病ノ特殊病タルヲ知ルニ至レリ、我日本ニ於テモ或ハ昔時存在セシヤハ詳カナラザレ、臺灣ノ領地ニ入りテ以來、彼ノ地ヨリ來ル兵士商人等ハ續々本病ヲ發セルヲ見ル、

原因 本病傳染ノ模様ハ全ク發疹室扶スト同シク、直接ニ人ヨリ人

ニ傳ハリ、稀レニハ第三者ヲ介シテ、器具、洗濯物、衣服、寢具等ヨリ間接ニ傳ハルコトアリ、又病院内ニ於テ一患者ヨリ傳播スルコトアリ、

本病毒素ノ患者血中ニアルハ疑ナシ、モチユツトコフスキー氏ハ數回患者ノ血液ヲ健康體ニ接種シテ、陽性ノ成績ヲ得タリ、而シテ其潜伏期ニ於テハ感染セズ、又最終ノ發熱後十週ヲ經過セル者ノ血液ヲ以テモ感染セザルヲ知レリ、

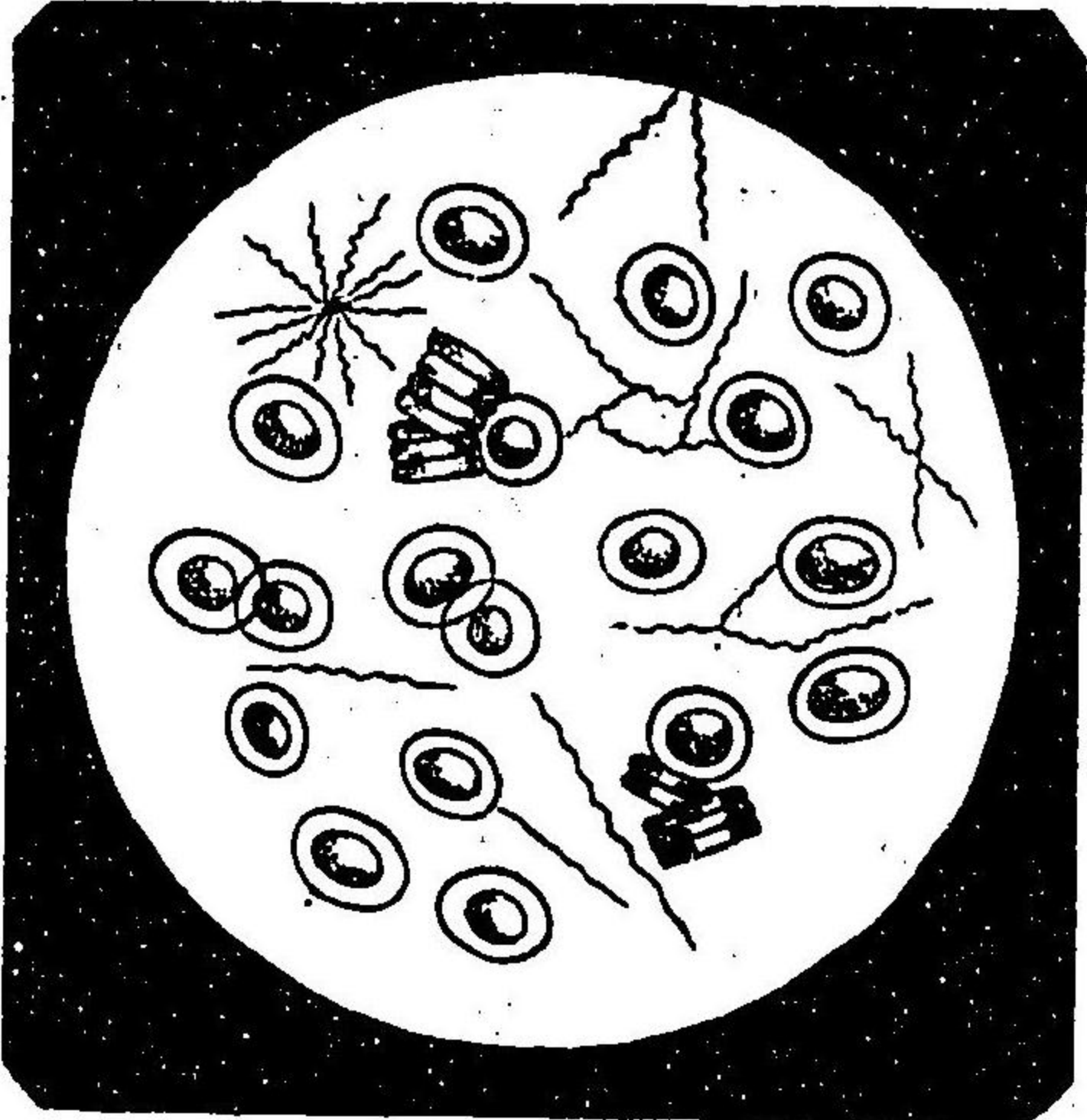
本病々毒素ノ形態ハ未タ知ラズ、千八百七十三年實ニオーベルマイエル氏ハ光輝アル業績ヲ公ニシ、患者ノ發熱時中ニハ常ニ一種ノ螺旋狀菌ヲ血液中ニ見ルト云ヘシモ、然レモ此者自身ガ其病原カ、又ハ少クトモ此者ノミヲ病毒運搬者ト見做スハ容易ニ首肯シ能ハサル處ナリ、如何トナレバモチユツトコフスキー氏ノ試驗ニヨレバ、患者ノ血液ニ〇、一%ノ規尼涅溶液ヲ混シテ、螺旋狀菌ヲ殺シ、後之ヲ人體ニ注射スルモ本病ヲ起シ得レバナリ、之ヲ以テ見レバ本菌ノ他ニ尙芽胞アリテ、本菌ニ比スレバ尙抗抵強キ者ナラン、然ルニ其芽胞ハ如何ナル形態ヲ有スルカハ、未タ知ル人ナシ、唯本病患者ノ血液中ニ存在セル光輝アル小粒ヲ以テ之ニ擬スルノミ、患者ノ年齢ハ十五歲乃至二十五歲ヲ多シトシ、五歲ヨリ十歲ニ至ル小兒ハ甚タ稀レニシテ、一歲未滿ノ者ハ多クハ免

ル、者ナリ、併シ九ヶ月ノ小兒ニシテ本病ニ罹リシリツテン氏ノ報告アレバ、決シテ絶無トハ云フコト能ハズ、性ニハ關係ナキガ如キモ、男ハ女ヨリ多キガ如シ、

職業、體質、モ亦顧慮スル程ノ價值ナシ、

本病ハ發疹室扶斯ノ流行後ニ流行ヲ來スコトアリ、昔時室扶斯ト誤診サレシ所以ナリ、

病理解剖 固有ナル解剖的變化ハ血液、脾及ヒ骨髓ナリ、其他ノ諸變化ハ必竟熱ニ伴フ副變化ニ過



第十圖

キス、屍體ハ速ニ強直ヲ起シ、又長時間之ヲ持續ス、筋肉ハ通例乾燥シ、深紅色ヲ呈ス、

外皮ハ時トシテ淡黄色ヲ呈スルコアリ、
 脾ハ腫大シ通例ノ者ノ五六倍ニ達シ、被膜ハ緊張シ、其實質ハ切裁スレ
 ハ非常ニ赤ク、且ツ粥様ノ硬度アリ、マルビキー氏小體ハ腫大シ、其他ニ
 灰色或ハ黄色ノ小結節ヲ見ル、時トシテ、又脾全體ノ許多ノ膿瘍ヨリ浸
 淫サル、コアリ、
 肝モ亦著シク肥大ス、若シ膽液性(チフオイド)ヲ呈スル者ニアリテハ肝
 ハ急性黄色肝萎縮ニ等シキ變化ヲ呈ス、
 腸胃ニハ瘀衝性症候アリ、
 腎ハ多クハ肥大混濁シ硬度ハ柔軟ナリ
 骨髓ニハ恰モ脾ノ濾胞ニ於ケルガ如ク、數多ノ白脈ヲ認ム、而シテ多少軟
 化セル部アリ、

症候

發疹室扶斯ト同ジク、急ニ發スル者ニシテ、多少ノ前驅症狀ア
 リト雖モ、多クハ短時間ニシテ、注意セサル間ニ烈シク惡寒ヲ催シ、全身
 打撃ノ感ヲ生ジ、頭痛烈シク、食慾缺損シ、或ハ全ク食氣異常ナキ者アリ、
 四肢ハ裂斷サル、ガ如キ疼痛ヲ覺ヒ、特ニ脾腸部ニ於テ甚シク之ヲ握

歴スレハ、益々甚シ、如此シテ患者ハ、速ニ高度ノ衰脱ヲ感シテ、臥床ヲ望
 ムニ至ル、熱ハ直ニ四十度乃至四十一度、或ハ時トシテ四十二度ニ達ス
 ルコアリ、而シテ朝時僅ニ〇、五度ヨリ一、二度ノ弛張アレバ、大抵此高熱ヲ
 持續ス而シテ前記諸病ニ於テ數々云ヒシ熱ニ伴フテ生スル諸症皆發ス、
 即チ眩暈、耳鳴、光線ニ對スル過敏、顔面充血、及ヒ白苔ヲ被ヘル舌等之レ
 ナリ、脈搏ハ百二十乃至百六十至アリ、顔面旬行疹ヲ生スルコト往々アリ
 又屢嘔吐ヲ催ス、脾ハ速ニ腫大シ、壓痛アリ、肝モ腫大シ、渴ヲ訴フル甚シ、
 如此高熱アルニモ拘ハラズ、意識ハ發疹室扶斯等トハ異ニノ明晰ナル
 者ナリ、唯患者ハ疼痛ニノミ苦シミ、爲メニ臥床上ニ靜臥ス、然レバ諸
 嗜眠等ハ決シテナキニアラス、其第四日乃至第六日ニ至レバ、多クノ場
 合ニハ皮膚黄色ニ變ス、(黃胆)其第一週ノ終リニハ上記諸症皆増進ス、而
 シ其尤モ危險ナルハ此時期ニ於テ一時ニ前記高熱ヨリ強發汗ノ後ニ
 平温以下ニ下熱スルニアリ、然ルトキハ、患者ハ眠リ、諸症消散シ、唯倦怠
 ノ感及ヒ時トシテ四肢ノ疼痛ノミ殘ル者ナリ故ニ患者自身ハ全ク快
 復セル者ト信スルモ、如此無熱ナルコト五日乃至十四日續クトキハ、再ヒ

體温上昇シ、稀レニ三十八度二分ヲ超ユルコトアリ、之レヨリ漸次熱上リ、初メノ發作時ト同シ症ヲ繰返ス、但シ此時期ハ通常短クシテ、三日乃至五日位ナリ、而シテ其去ルヤ又忽如タリ、如此發作ハ第三回ノミナラズ尙四回五回モ續クコトアレ、多クハ二回ノ發作ヲ以テ治癒スルヲ常トス、其死ニ歸スルハ、心臟麻痺又ハ併發病ニ因ル、併發病トシテハ紅彩、肺炎、紅彩、脈絡膜炎、氣管支肺炎、耳下腺炎、喉頭加答兒等ナリ、外皮病ニハ、匍行疹、紅斑、粟粒疹等ヲ生ズ、出血性腎臟炎、及ビ脾膿瘍等ハ稀レナリ、脾膿瘍ハ胆汁性、チフオイドニ屢々見ル處ニシテ、此際ニハ初メヨリ症狀重體ナル者ナリ、

衰弱ト黃胆トハ早時之ヲ發ス、特ニ本病ニ注目スベキ主症ト三アリ、曰ク血液體温、及ヒ脾ノ變化之レナリ、後二者ハ前既ニ云ヒタリ、茲ニ血液ニ付テ述ベシ、即チ發熱時ニ當リ、患者ノ指端或ハ他ノ部分ヲ刺針スルトキハ流出スル血液ハ暗赤色ヲ呈シ、之ヲ顯微鏡下ニ照ラセバ、固ノ如キ栓拔器ノ如ク廻轉セル、小體ヲ見ルベシ、之ノ小體ハ前進運動ヲ有シ、習熟セザル者特ニ初學者ニア

リテハ油浸裝置ニアラザレバ見ルコトヲ得ス、長サ十六乃至四十三ミクロン、密米アリ、之レ即チオーベルマイエル氏ノ發見セル所ニシテ此ノ名譽ノ爲メニスビロフエーテ、オーベルマイエルト稱スル者ナリ、

發後 他ノ室扶斯ニ比スレバ、死亡數遙ニ少ニシテ、概テ二%位ナレ、其時トシテ十乃至十五%ニ至ルコトアリ、一見危險ナルガ如キ患者モ時トシテ快復スルコトアリ、快復期ハ甚徐々ナリ、

診斷 單ニ熱型ヲ見ルトキハ或ハ麻拉利亞ト誤疹スルコトナキニアラズ、又實際麻拉利亞流行時ニ本病ノ流行ヲ來スコトアレバナリ、然レモ血液検査ヲ行ヒ、其固有小體ヲ見レバ、決シテ誤ルコトナカルベシ、

療法 カイリンアンチピリン、撒曹等ハ高熱ヲ下降セシメ得レ、モ病勢ハ少シモ變ゼス、小體ハ尙血中ニ依然トシテ存ス、筋痛ニハ微温湯浴、温或ハ微温湯ノ悉法又ハ芥子泥貼用等ヲ稱用ス、

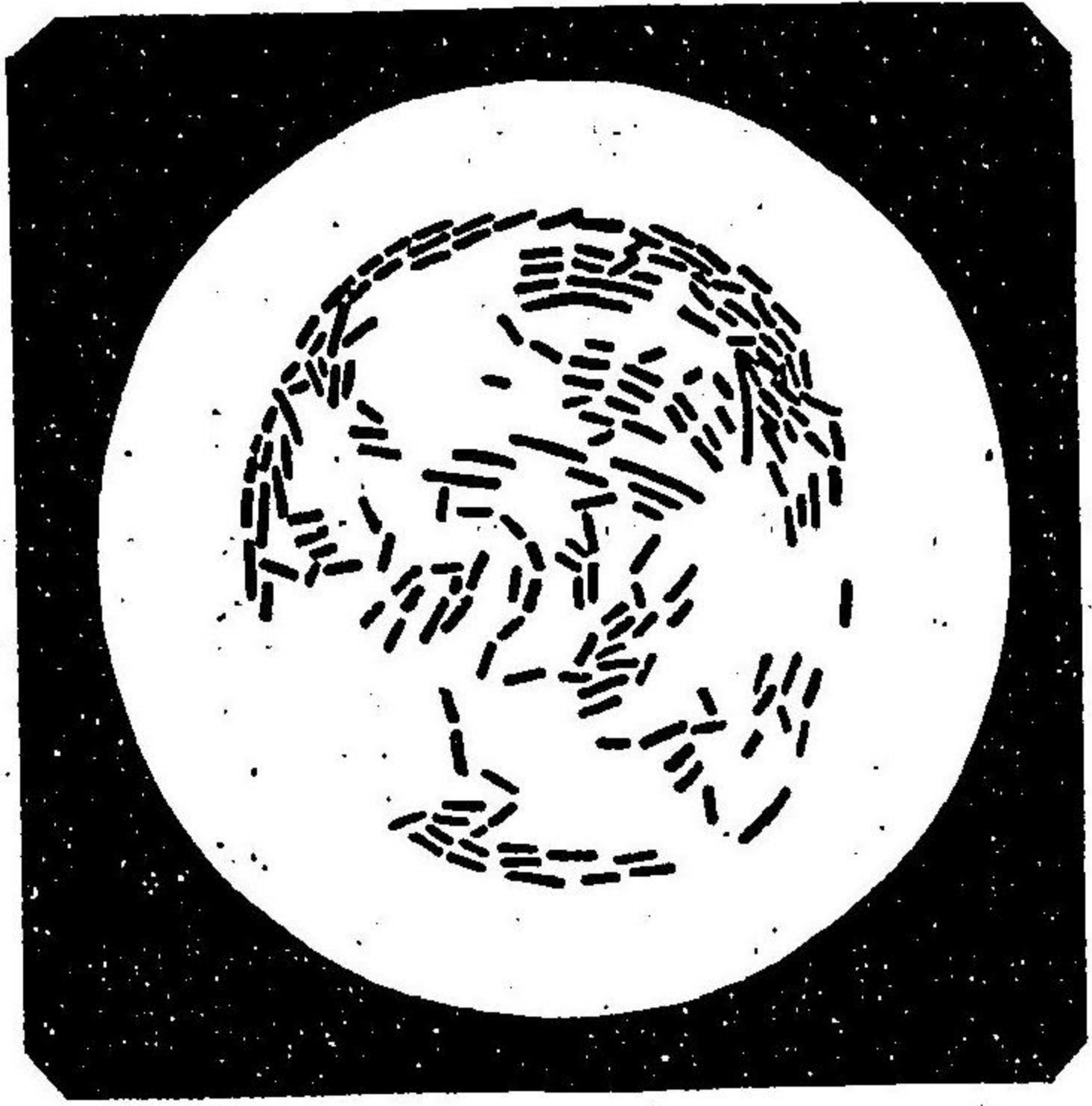
對熱療法ト共ニ強壯食餌ヲ取ラシム、

固ヨリ本病ハ觸接傳染病ナルヲ以テ隔離ヲ要ス、

腸室扶斯 *Tleosyplus*

本病ハ瘧毒性觸接性傳染病ノ一ニシテ其病毒ハ重ニ小腸ノ淋巴系統
腸間膜腺及ヒ外皮ニ局在スレモ又一一般症狀ヲ發スル者ナリ、地方性或
ハ流行性ニ來リ、大

第 十 一 圖



淋巴腺ヲ顯微鏡的ニ檢シテ一種ノ桿菌ヲ見出シ、後コツホ氏ガフキ

純粹培
養ヨリ
得タル
腸室扶
斯菌千
二百五
十倍

都會ニ至テハ、全ク
ナクナルヲナク、一
朝本病毒ノ發生ニ
好機アルトキハ、大
流行ヲ起ス者ナリ、
原因 千八百八
十年エーベルト氏
初メテ本病ニテ死
セシ屍體ノ脾及ヒ

氏等モ之ニ同意セリ、

此菌ハ桿狀ニシテ其兩端鈍ナリ、組織中ニ單獨ニ或ハ集マリテアルヲ
アリ、懸滴檢査ニテ見レバ、多クノ細毛ヲ有シ、中ニハ長キ細毛ヲ有スル
者モアリテ、仔細ニ檢スレハ其蛇狀的運動ヲ營ムヲ見ル、グラム氏法ニ
テ染色スレバ旋毛アリ、又此菌中ニハ光澤アル球狀ノ者アリテ其染色
力ハ桿ノ他部ヨリ強シガフキ氏ハ之ヲ以テ芽胞ナリトスレモ、七十
度ノ溫ヲ加フルトキハ死スルヲ以テ見レバ然ルニアラザルベシ、
此菌ハ亞尼林色素ニ染色スレモ、又脫色シ易シ

平板培養ニスレバ、通例ノ室内溫度ニテ一二日後ニ發生ス、肉眼的ニ見
レバ、白色恰モ磁色ヲ有スル點狀ニシテ、顯微鏡下ニ照セバ(ゲラチン)ノ
深部ニアル者ハ多クノ顆粒狀ヲ呈ス、其圓形橢圓形又ハ砥石狀ヲナス、
表面ニアル聚落ハ、其中中央輝キ、周圍ハ光薄シ、其邊緣ハ時トシテ針葉狀
ナルヲアリ、通例運動ヲ有スル微菌ハ、培養基ヲ溶解スレモ本菌ハ之ニ
反シテ溶解セシメズ、

本菌ト相類似スルハ大腸菌ナリ、形狀及ヒ聚落等ヲ見シノミニテハ、區

別到底困難ナリ、故ニ此區別ニ〇、二%ノ石炭酸ヲ加フルトキハ、本菌ハ發育スレモ他ノ微菌ハ發育セズ、從來本病菌ノ發見ハ、生體ニ於テハ唯糞便中ノミニシテ、他ノ排泄物中ニ於テセザルヲ以テ、單ニ本病ノ媒介ハ糞便ニ賴ル者ノ如ク、信セラル、多クノ經驗ニ徴スルニ患者ノ着用セシ不潔ノ襯衣、襪、袴、等ヲ洗濯セル下女ガ、直ニ本病ニ感染セルコトモアリ、尤モ如此キ直接傳染ハ、稀有ニ屬スレモ、又全クナキニモアラズ、新鮮ナル糞便中ニハ、通例病菌ヲ發見セズ、本病菌ノ直接ニ人ヨリ人ニ傳染スルコトハ非常ニ稀レナルコトニ屬ス、之ヲ要スルニ本病ハ幾多ノ經驗ニ徴スルモ、觸接傳染病ニハアラザルナリ、之ニ反シテ本病菌ハ糞便ト共ニ地中ニ入ルトキハ、大ニ毒性ヲ逞ス、而シテ其土地若シ有機質ニ富ミ、日光ト地温トニ依テ、漸次分解シテ尤モ適當ナル培養基ヲ與フルトキハ、本菌ノ發育益々速ナリ、本菌ノ生活年限ハ一年ノ餘ニ涉ルヲ以テ、時トシテ先年地中ニアリタル者ニシテ、適當ノ傳播路ヲ得ザリシ者モ其次年ニ於テ初メテ其便宜ヲ得、大流行ヲ來スコトアリ、而シテ人ハ其先年ニ病毒製造ノ因アルヲ悟ラズ、徒ニ狼狽徒勞スルコトアリ、

本病毒ノ人體ニ達スルハ、彼ノ有名ナルベツランコーフェル氏ノ空氣說アレモ事實ハ飲料水ヨリスルニ近シ、假令バ流行時ニ當テ其最初ノ病家ガ使用セル飲料水ヲ檢スレバ、肥料積場若シクハ流通セザル溝渠ノ近クニアリタルモアリ、又詳細ニ尋問スレバ初メ牛乳ヲ呑ミシノミニテ生水ヲ呑ミシコトナシト云フモ、其牛乳ヲ呑ミタル器物ハ其恐ルベキ井水ヲ以テ洗ヒタルニ注意セザル者モアリ、況ンヤ河水ヲ飲用セル村落ノ河流ノ通路ト一致シテ流行ヲ來スコトアルヲヤ、夏時ハ流行多ク、冬時ニハ少シ之レニモ亦ベツランコーフェル氏ノ地下水說アルハ人ノ普ク知ル所ナリ、個人的素因ハ十五乃至三十歳ノ者尤モ罹リ易ク、一歳以下ノ小兒六十歳以上ノ老人并ニ慢性病ヲ患フル者、妊婦產婦等ハ素因少シ、概シテ強壯ナル者ハ虛弱ナル者ヨリ罹リ易シ、一回之ニ罹リシ者ハ多クハ免疫質ヲ得レモ、他ノ傳染病ニ於ケル如ク、必然トハ云ヒ難シ、又從來本病ノ流行ナキ地方ニ住セル者、其流行地ニ移住スルトキハ既ニ前ヨリ同地ニ住居セル者ヨリ罹リ易シ、

誘因トシテハ胃腸ノ失調ヲ重ナル者トス、

病理解剖

屍體ノ所見ハ甚タ明瞭ナル者ニシテ、一度屍ヲ解ケバ、

直ニ診斷シ得ル程ナリ、先ツ其變化ヲ別テ二トナスヲ理解シ易シトス、

第一ノ變化ハ、有機小體直接ノ作用ヨリ起ル者、第二ノ變化ハ多クハ其

副發症狀ナル高熱ノ爲メニ生スル者是レナリ、

第一ノ變化ハ腸(小腸重ナレトモ稀レニハ大腸)ノ淋巴装置ノ一部即チ

パイエル氏平板及ヒ淋巴濾胞其他腸間膜腺及ヒ脾ニアリ、其他稀レニ

ハ氣管支腺、舌、及ヒ扁桃腺ノ淋巴濾胞等モ犯サル、トアリ、

之ヲ三期ニ分ツ、

加答兒期

第一期加答兒期 腸ノ粘液膜淋巴濾胞等充血シテ不透明トナル、

結核期

第二期結核期 加答兒期ノ去ルニ臨ミ、前記諸部ノ他結締織筋纖維

中ニ迄、淋巴細胞ノ浸潤ヲ來ス、而シテ此處ハ小腸ノ下部ニ多クシテ、上部

ニハ少シ、輕症ノ場合假令ハ小兒室扶斯ノ如キニアツテハ、此腫脹セル

濾胞中ノ淋巴細胞ハ、脂肪變生シテ、吸收サレ、後ニ痕ヲ遺サズ、然レモ重

症ノ者ニアリテハ、此腫脹部壞疽狀ヲナス、即チ淋巴細胞ノ増殖ノ爲メ

結核期

ニ、血管壓迫サレ、榮養不良トナル爲メニ一部壞疽ニ陥ルナリ、解屍スル

トキハ、此部ニハ胆汁ノ染色アルガ故ニ、知ヲ得ヘシ、

第三期結核期 前項ニ述ベシ如キ作用ニヨリ、壞疽ニ陥レル節ハ自然

ノ排泄ニヨリ、排除サレ、後ニ潰瘍面ヲ遺ス、而シテ此潰瘍面ハ、軟キ痕ヲ

以テ治癒ス、實驗ニ徵スルニ、此痕ノ爲メニ、腸ノ狹窄ヲ起シタルトナ

シ、若シ然レモ此潰瘍漸次深部ニ進入スルトキハ、時トシテ全腸壁ヲ犯シ

遂ニ穿孔スルトアリ、又潰瘍等生スレハ、血管壓迫サレテ、血栓ヲ生スル

トアリ、然ルトキハ、假令ヒ腸壁穿孔スルモ、出血ヲ見サルトアリ、若シ此

血栓不十分ナルカ、又ハ軟化スルトキハ出血ヲ生シテ爲ニ死ヲ來ス

以上ノ變化ハ前條云ヘシ如ク小腸ニ來ルヲ多シトスレモ、又時トシテ

ハ然ラスシテ大腸ニノミ來ルトアリ、如此ヲ大腸室扶斯ト云フ、

腸間膜腺ハ腫脹シテ豌豆大トナリ、脂肪變生シテ後吸收サル、ト常ト

シ、化膿スルハ稀レナリ、若シ化膿セバ其初メハ腺中ニ壞疽ヲ生シ、痂ヲ

造ルモ其痂ノ周圍ニハ結締織増殖シテ、限界線ヲ作り、容易ニ内容ヲ外

ニ出サズト雖モ、内部ノ化膿機漸次増大スルニ從テ、遂ニ皮膜破レテ外

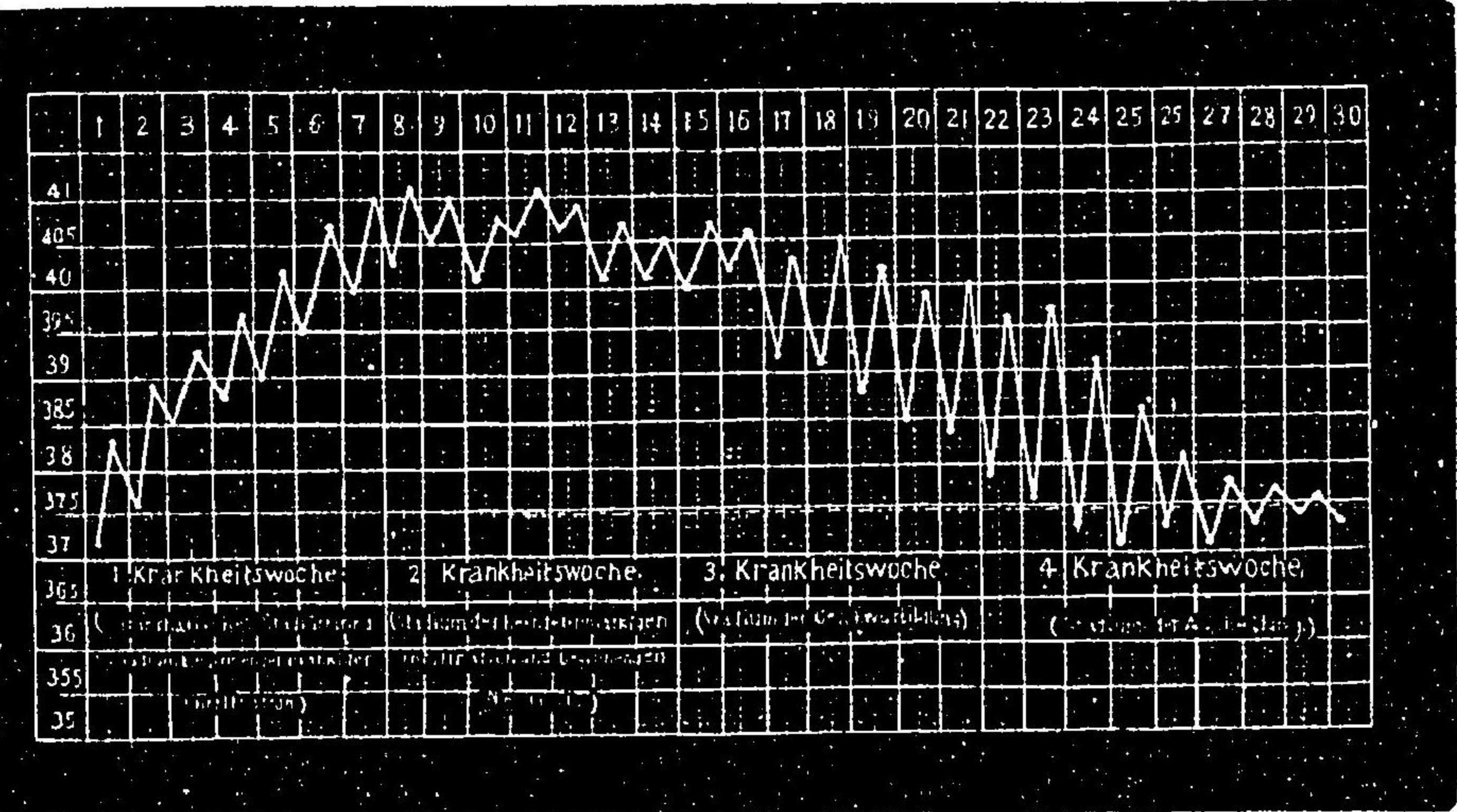
大腸室扶斯

ニ出テ、腹腔内ニ入り、腹膜炎ヲ起スナリ、但シ之ノ如キコハ甚ク稀レナ
 リ、
 脾ハ既ニ第一週ノ終リヨリ腫大シ、第三週第四週迄ハ漸次増大ス、始メ
 ハ充血シテ硬キモ、終リニハ柔軟トナリ、以前緊張セル被膜ハ、皺壁ヲ造
 ル、此腫大ハ管ニ充血ノ結果ナルノミナラズ、本病微菌ノ刺激ニ依テ實
 質ノ増息スルニモ因ス、其他舌腺、扁桃腺、氣管支腺等ノ腫脹皆前項ノ
 理ニ由ル
 第三ノ變化ハ主トシテ筋肉ノ實質的退行變性ニシテ、特ニ心臟ノ筋ニ
 於テ之ヲ見ル、其横紋ハ消失シ、且ツ所々脂肪球又ハ蛋白様沈着等ヲ見
 ル、時トシテハ蠟様變性ヲ見ルヲアリ、此他腹部、大腿横隔膜等ノ諸筋ハ
 第二週或ハ第三週ニ於テ著明ノ變化ヲ來ス、若シ快復時ニ至レバ、其退
 行變性セル纖維ハ、吸收サレ、健康ニ止マリシ筋ノ分裂ニ仍テ其空隙ヲ
 充タス者ナリ、神經中樞系統モ亦同様ノ變化ヲ受ケテ、腦膜ノ混濁、及ヒ
 肥厚等ヲ見ル、併シ是等ノ變化ハ神經症狀ノ強度ト關係ヲ有セザル者
 ナリ、

トニカク諸種器臟ノ實質的退行變性ハ、該器臟ノ抗抵ヲ弱ムル者ニシ
 テ、從テ數多ノ併發及ヒ後發病ヲ説明スルニモ此點ヨリスルヲ便トス、
症狀 余ハ今症狀ヲ述ブルニ當テ、之ヲ三ツニ區別シ、輕症、中等度重
 症トナスヲ便利ナリト思惟ス、勿論併發及ヒ後發病ハ其本來ノ疾病經
 過ニ關係アルヤ大ナリ、
 病ノ潜伏期ニ於テハ、些ノ症狀ヲ呈セス、前驅期ハ他ノ傳染病ヨリ長ク
 シテ、五日乃至十日持續シ、其重ナル症候ハ、全身倦怠ノ感、四肢ノ重感、頭
 痛、食氣不振、睡眠不良、便秘又ハ下痢等ナリ、然レモ又時トシテ前驅期ノ
 全クナキヲアリ、從來壯健ノ外觀アル者突然腸出血ニ依テ倒レ解屍ノ
 後、初メテ本病タルヲ知リタルノ例ハ稀有ノ一ニアラズ、余輩ハ今前
 述三種ノ症候ヲ順記スルヲ止メ、併發症ナキ中等度ノ者ニ付テ、症候ヲ
 述ベ、爾他ノ注意ヲ要スベキ項ニ就テハ、別ニ記載セントス、蓋シ三種ニ
 區別スト雖モ、全然異ナルニアラス、症候ノ發スル順序ハ、一定ノ者アツ
 テ存スルガ故ニ、中等度ノ者ニ就テ記載セハ、蓋シ其要ヲ得シカ前驅症
 狀、五、六日續グトキハ大抵其終リノ日ヨリ、發熱ヲ初メ、患者ハ坐立ニ耐

第二十圖

第一週



第一週
第二週
第三週
第四週

第一週衰弱感、頭痛、眩暈、悶火、亂發、耳鳴等アリテ睡眠ハ不安ニシテ、惡夢ニ犯サレ易シ、精神ハ明亮ナレド、尙虛脱ノヘズ、直ニ病床ニ上ル者ニシテ、熱ノ發スルヤ、數回ノ惡寒ヲ先ンズルアリ、或ハ然ラサルアリ、

第一週衰弱感、頭痛、眩暈、悶火、亂發、耳鳴等アリテ睡眠ハ不安ニシテ、惡夢ニ犯サレ易シ、精神ハ明亮ナレド、尙虛脱ノヘズ、直ニ病床ニ上ル者ニシテ、熱ノ發スルヤ、數回ノ惡寒ヲ先ンズルアリ、或ハ然ラサルアリ、

感アリ食氣ハ缺損シ、渴甚シク、口内粘着ス、嘔吐ハナシ、他覺的ニ檢スレハ此週ニ於テハ、外皮温ノ稍高ク、顔面ハ夕ニ至レバ、紅色ヲ呈スレド、旬行疹等ナク、體温ハ小楷ヲナシテ平常ノ如ク朝夕小弛張ヲナシツ、漸々上ル、第一日ノ朝時温ハ三十八度、夕時温ハ三十八度四分、第二日ノ朝ハ三十八度二分、夕ハ三十八度五分、第三日ノ朝ハ三十八度七分、夕ハ三十八度六分、第四日ノ朝ハ三十八度四分、夕ハ三十八度八分、第五日ノ朝ハ三十八度六分、夕ハ三十八度九分、第六日ノ朝ハ三十八度四分、夕ハ三十九度一分、第七日ノ朝ハ三十八度八分、夕ハ三十九度三分、アリ之レ唯一ノ摸型ヲ示シタル者、其上昇ノ工合大凡如此シ、固ヨリ萬病定型ヲ踏テ現ハル、ハ稀レナルヲ以テ、此病ニモ常ニ如此シトハ云ヒ難キモ、其變態ノ如キハ各家ノ實驗ニ委ス、脈ハ實ニシテ軟、本週ノ後半期ニ於テ、肺ノ下部ニ水泡音ヲ聞ク(氣管支炎)舌ハ白苔ヲ被ク、始メハ濕潤ナレド、後ニハ乾枯ス、本週ノ終リニハ腹部脹滿ス、(氣脹)初メハ便秘スレド、後ニハ下痢ヲ來ス、下痢ハ便ハ恰モ豆肉汁様ナリ然レトモ、ベルツ氏ノ實驗ニヨレバ本邦ノ空扶斯患者ハ下痢スルコト少シト、右腸

第二週

骨窩部ヲ壓スレハ過敏ニシテ、グル音ヲ聴取ス、之レ亦下痢ト伴フ微効ニ
 ノ、下痢ヲ來ス者ニアツテハ、腐敗瓦斯ノ發生多キヲ以テ、グル音モ明ニ
 聴取シ得レト、便秘スル者ニ至テハ不明亮ナリトス、此週ノ終リニ腹部
 及ヒ胸部ニ散在性ニ小蓄薇疹ヲ生ジ、之ヲ壓スレハ、褪色ス、之ト同時ニ、
 打診蝕診上ニ、脾臟ノ肥大ヲ認知ス尿ハ蛋白ナシ、
 第二週、此週ニ於テハ患者ノ虛脱甚シキヲ以テ、苦訴ハ却テ少シ、患者ハ
 常ニ半睡半醒ノ状態ニアツテ、容易ク嗜妄トナル、他ノ呼稱ニハ應答ス
 レト、頗ル緩慢ナリ、視線ハ意味ナキ方向ニ向キ、脱力甚シ、此週ノ半ニ一
 時性ノ精神異常ヲ呈スルコトアリ即チ患者ハ聲ナキニ聞キ、物ナキニ形
 ヲ見或ハ他ヨリ追跡サル、ト思惟シ、全身衰弱セルニモ拘ハラズ、病床
 ヲ飛跳シテ脱レントスルコトアリ、如此キ精神興奮去ルトキハ、全ク虚脱
 ニ陥リ時々意識ノ逃避スルコトアリ、皮膚ハ燒クカ如ク熱シ且ツ枯燥シ、
 體温ハ持續的ニ高シ、朝時ノ温ハ三十九度六分ヨリ四十度ノ間夕時ノ
 温ハ三十九度八分ヨリ四十度二分ノ間ヲ昇降ス、脈搏ハ平均百十至ニ
 シテ整然且ツ複脈ナルコトアリ、舌ハ振盪シ、黑色汚穢ノ被膜アリ、乾燥シ

第三週

テ皸裂アリ、若シ下痢アレバ、所謂豆肉汁様ニシテ之ヲ硝子器ニ取レバ
 二層ニ別ル、肺部ノ加答兒ハ増進ス、
 尿ハ混濁シ少量ノ蛋白ヲ含ム、
 發熱疹增多シ脾腫大著明トナル、
 第三週、衰弱益甚シク、虚脱亦加ハル、然レモ時々眼ヲ以テ水ヲ望ムノ意
 ヲ知ラシムルコトアリ、嗜眠狀ニ陥レル間ハ、尿ノ排泄ヲ怠ルヲ以テ屢々
 尿閉ヲ起スコトアリ、
 熱ハ間歇性ヲ示ス夕時ノ體温ハ尙三十九度八分、或ハ四十度二分等ノ
 高熱ナレト、朝時ハ三十八度六分、五分、三分等ヲ示ス、此週ノ終リニ至レ
 バ此朝夕ノ差尙著シ、
 此週ニ於テ發汗アリテ、爲メニ汗疹ト稱スル證明ナル小水疱ヲ生スル
 コトアリ、
 此週ノ終リニハ朝温ハ平温ニ復ス、
 脱力ハ尙存スレト、精神ハ明亮トナリ、蓄薇疹ハ消ヒ立テ自ラ大小便ヲ
 ナシ得ルニ至ル、